

小国の地政学

— 秘境・ブータンはなぜ滅びないか —

歌川令三（東京財団 理事）

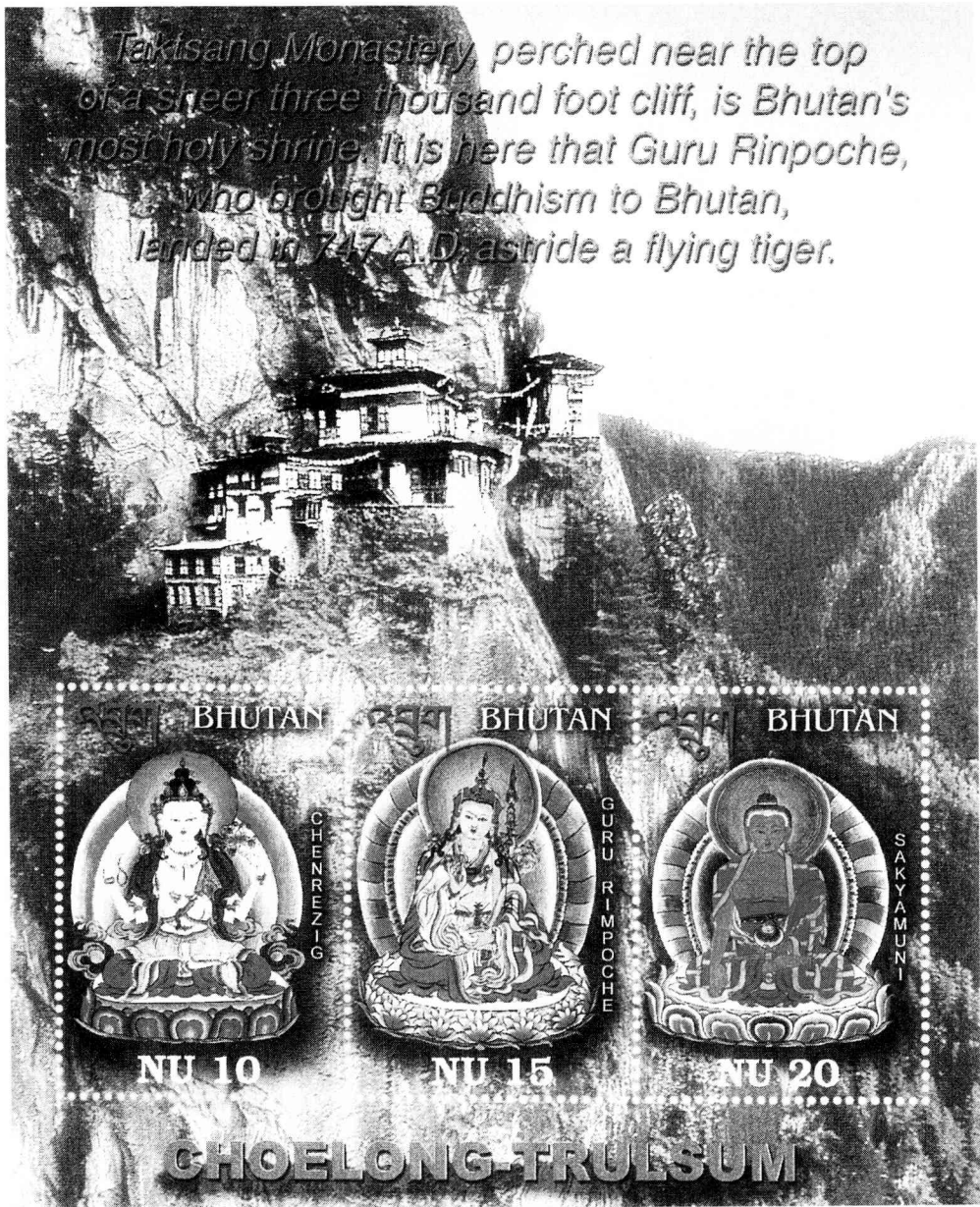


第四代 ジグメ・ワンチュック国王(右)と皇太子

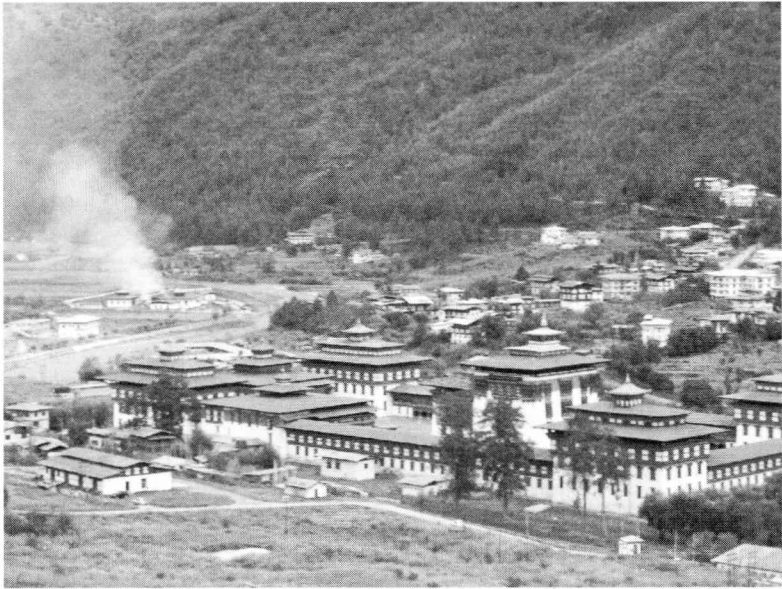


第4代ジグメ国王と4人の妃 いずれも姉妹

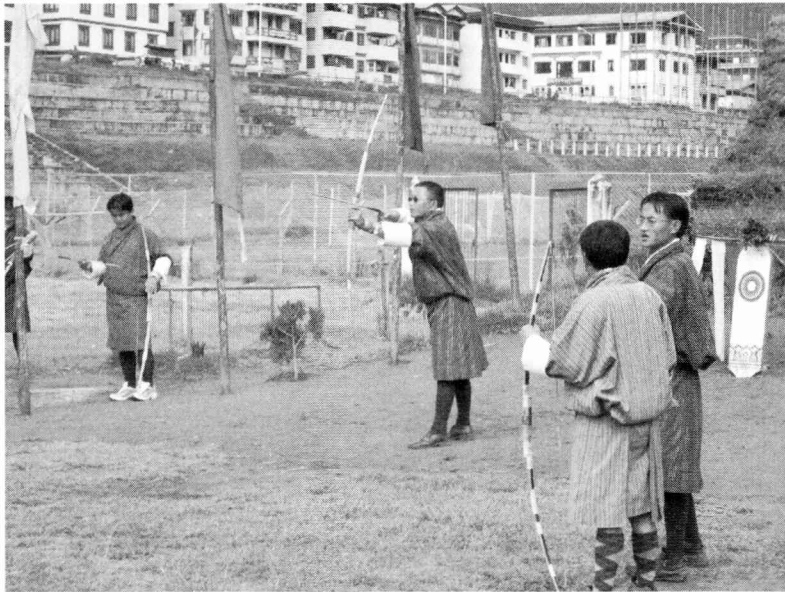
Taktsang Monastery, perched near the top of a sheer three thousand foot cliff, is Bhutan's most holy shrine. It is here that Guru Rinpoche, who brought Buddhism to Bhutan, landed in 747 A.D. astride a flying tiger.



ブータン仏教の聖地、岩の上の僧院(虎の巣寺)
 8世紀 尊師・リンポチェがインドから、虎の背に乗って
 この国に、仏教を伝えた(中央の像。右が釈迦、左は菩薩)
 —政府発行の記念切手—



首都 テインプーのタシ・チヨ・ソン
(王宮、僧院、城砦を兼ねている)



国技、ブータン式、アーチェリー



朝市でヤクの肉を売る山岳民族



世界で最も着陸の難しいパロの空港

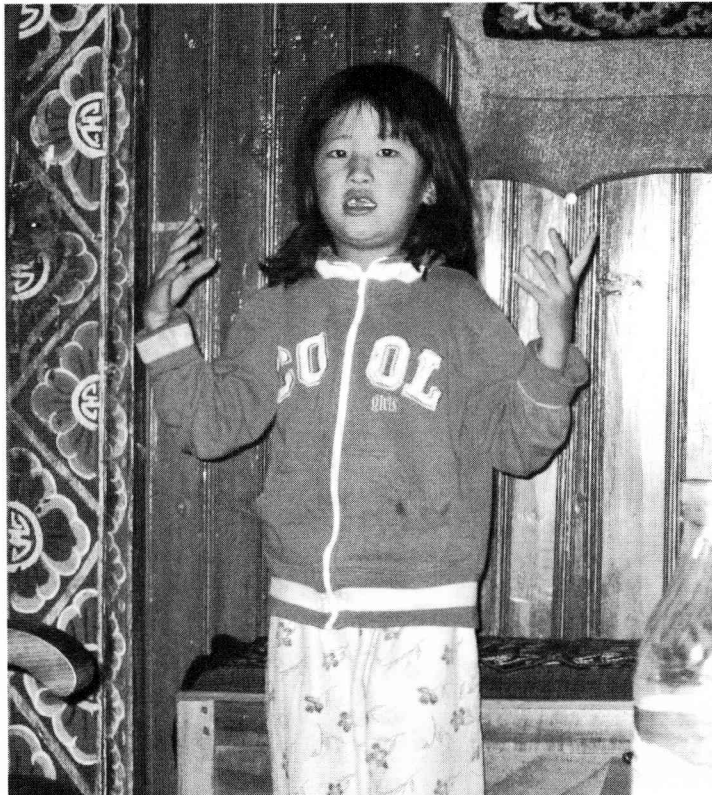


ジェルミ・ツエワンガイド(左)と赤川貴大君

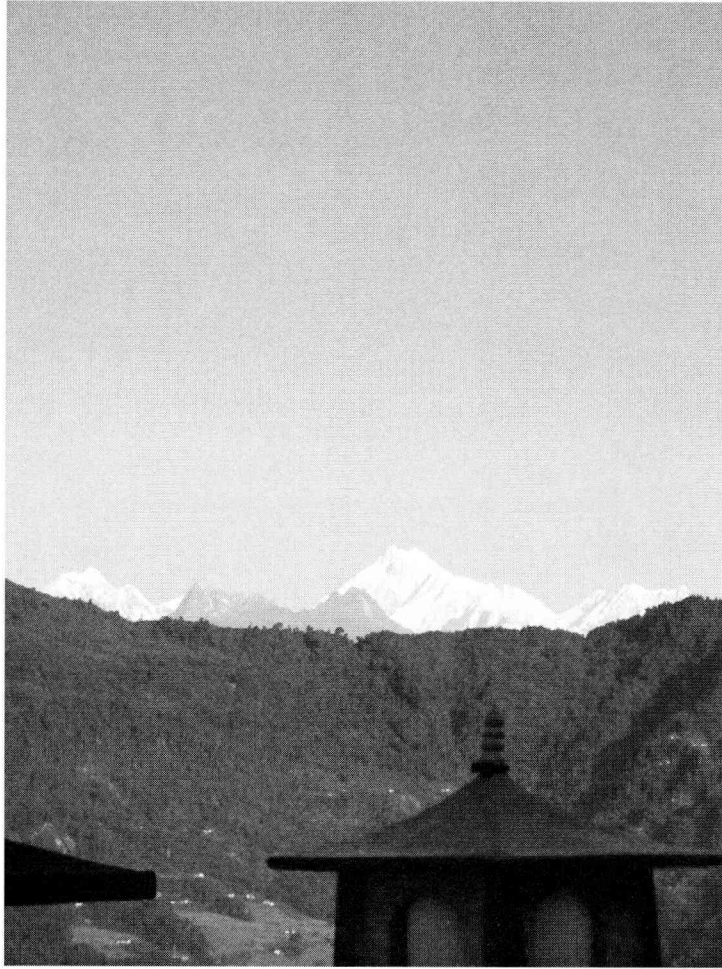
(赤川貴大 撮影)



マツタケ農民カルマさん

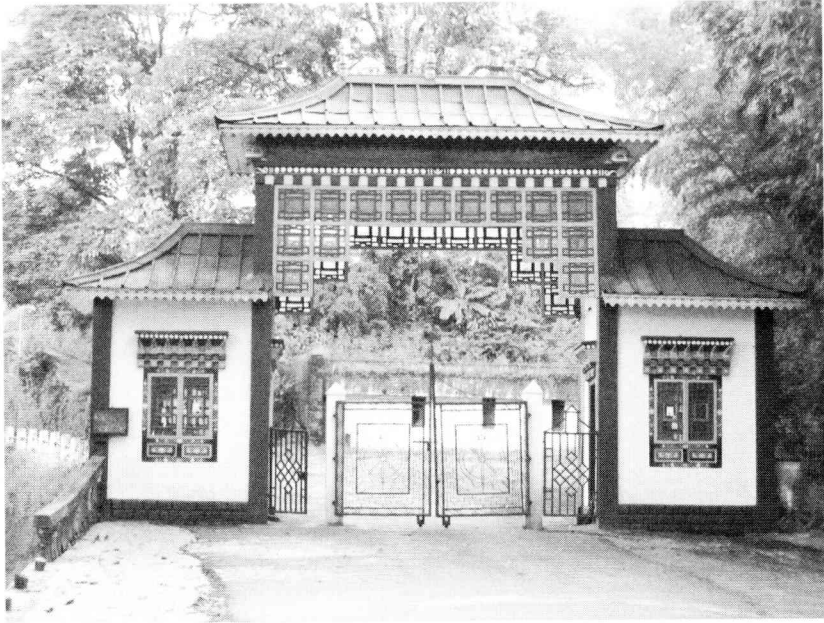


ワンモ家 長女ロブテンちゃん



ヒマヤラの真っ白な峰

(赤川貴大 撮影)



シッキム仏教王国の跡(王宮の門)



ブータン・インド国境 ジャイガオン門

東京財団研究推進部は、社会、経済、政治、国際関係等の分野における国や社会の根本に係る諸課題について問題の本質に迫り、その解決のための方策を提示するために研究プロジェクトを実施しています。

「東京財団研究報告書」は、そうした研究活動の成果をとりまとめ周知・広報（ディセミネート）することにより、広く国民や政策担当者に関わりかけ、政策論議を喚起して、日本の政策研究の深化・発展に寄与するために発表するものです。

本報告書は、「日本のインテリジェンス（知性の結集）構築作業に関する研究：小国の地政学—秘境・ブータンはなぜ滅びないか—」（2005年4月～2006年3月）の研究成果をまとめたものです。ただし、報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。報告書に対するご意見・ご質問は、執筆者までお寄せください。

2006年10月

東京財団 研究推進部

目次

まえがき：いま、なぜブータンなのか？ 1

第一章 ブータン素描 —パロ行き航空、4時間半の見聞— 3

座席番号「1A」、「オヤ、王妃が乗っている」3／機内誌の名は「衆生に吉祥あれかし」4／ブータンの文明開化は「明治維新ではない」5／「離婚すると男が、家を追い出される」7／ブータン名物？「GNPよりGNH」8／東インド会社に狙われたブータン 9／奈良の大仏もびっくり、高さ51メートルの巨大仏像 10／ドテラ姿？の入国管理所长との再会 11

第二章 ブータンの古代と中世 —チベット仏教の系譜— 13

「そして、ブータンが残った」13／ジェルミ・ツエワンさんとの出会い 14／二人の偉人、リンポチェとシャブドーン 16／仮説の検証「ブータンはチベットの属国か？」18／半世紀秘密だった、シャブドーンの死 20／英国の介入とシャブドーン王朝の分裂 21

第三章 中世からの跳躍、20世紀後半へ —その地政学的事情— 23

ワンチュック家が掴んだ「領土の安堵」23／「太平の 眠りを覚ます 毛沢東」25／“ブータン維新”、未開社会からの離脱 26／「近代を英語で教える」学校制度 28／開国の副産物—“内なる脅威”ネパール人問題 29／「明日は我が身？」ブータン人の“シッキム・ショック” 31

第四章 ブータン発、幸福の政治・経済学 —「GNH」とは何か— 33

英明君主の唱えた「国民総幸福」33／「心の安全保障」としてのGNH 34／脚光を浴びた“小国の幸福学” 35／国家戦略・GNHの系統図 36／図解・地球には「四つの経済哲学」がある 38／「幸福を計る物差し」はあるか？ 41／仏教哲学の「幸福方程式」42／“曼荼羅共同体”の統治形態 43

第五章 雷龍王国の都、ティンブー —近代と伝統の接点を訪ねる— 45

信号機のない首都 45／タシチョ・ゾン(王宮)での対話 46／土地ブームと“スイス・ベーカリー” 48／マツタケを「僧侶のキノコ」という 49／ティンブー名物、野犬の大群 51／鍼灸師、高田忠典さんと 52／“メディア開国”と国王の決断 54

第六章 母系制社会の原風景 —パロ谷の農家に泊まる— 57

ワンモ家の石焼き風呂 57／「スサノオ命」と「マスオさん」58／二階のトイレと豚小屋の関係 59／八歳の通訳、ロプテンちゃんの英語力 61／パロ谷に蒔いた“ダショー・西岡”の種 63／ヒマラヤの「妻問い婚」問答 64／パロ谷からインド平原へ 66

第七章 ブータンよ、何処へ？ “一周遅れの走者”ではない 69

グローバリゼーション対「小国の地政学」69／降って湧いた国王の退位宣言 70／仏教映画「旅人と魔術師」を見る 73／比較文化論：“仏教”と“アメリカ”76／図解：似て非なる国、ブータンと日本 78

第八章 付録：シッキム紀行 —消えた仏教王国を訪ねる— 81

国境の門をくぐると…… 81／「入域許可証提示を求められない人、それをインド人と定義する」82／「もし地震がきたら……」崖の州都、ガントック 83／ラスト・キングの妃は米国娘だった 85／国盗りの名人、英国の深謀遠慮 86／「カルマパ17世を知っているか？」87／カンチエンジュガを仰ぎつつ… 88

まえがき：いま、なぜブータンなのか？

ヒマラヤの秘境、ブータンは“不思議な国”だ。グローバル化時代にこういうユニークな国が、地球上に存在していること自体が面白い。“面白い”とは「一風変わっているところに、心を惹かれる」という意味だ。今、日本も含めた先進国では、ブータン旅行が静かなブームになっている。世界の先進国から毎年、一万人以上が出かけ、タイから飛ぶ直行便はいつも満席だ。

観光客にとって、ブータンは“心の癒し”を求めて出かける桃源郷だ。ブータンは1975年、観光に門戸を開いたが、旅行の目玉は、ヒマラヤのシャングリラのロマンだった。確かにブータンに行けば、ヒマラヤの山と渓谷、伝統と文化の村落共同体、チベット仏教の三者が渾然一体となった、“別世界”をたっぷり体験させてもらえる。

だから、よき思い出に浸った旅行者たちが、帰国後、ブータン同好会を作るケースが結構ある。欧米や日本の近代合理主義の社会に、いささか疲労を感ずる人々の集まりだ。この国の国営新聞KUNSELEの英語版を購読し、ブータンを語り合うサークルが、日本にも欧米にもある。

ブータン好きが昂じて、この国を「私のブータン」と呼ぶ“ブータンおたく”もいると聞いた。それはそれでよい。

だが、私のブータンへの強い関心は、ツーリズムが売り物にしている“桃源郷趣味”とか“心の癒し”のような情念の世界ではない。対象を心情的に捉えて描くやり方を“軟派”の技法という。私がブータンを取り上げたのは、ロマンの香りのする“軟派”のもの書きとしての、創作意欲が出発点ではない。

歴史、風土、政治、軍事、外交、経済、文化、思想、宗教など、彼らの国家像を形成するものは何か？その構造を出来ることなら情に流されずに、解明したい。そういう“硬派”のジャーナリストの衝動に駆られたからだ。

ヒマラヤのミニ・仏教王国ブータン。この国はぼんやりしていたら、大国の餌食になり、滅亡していた。だが、したたかに生き残り、“低所得国”卒業の日も近い。ブータンは1950年代末まで鎖国していた。貨幣も郵便も自動車道路もない、山の中の自給自足国家だった。

開国したのは、1959年で南のインド側に道を開いた。北の隣国チベットが中国の版図に組み込まれた。ダライ・ラマ14世が亡命、チベット仏教王国は滅亡した。「明日はわが身ではないか」との危機感がただよい、インドと手を結んだ。

中国の侵攻を懸念するインドは、自国の防衛基地をブータンに置き代わりに、巨額の経済援助を与える約束をした。これがブータンの近代史の始まりだった。インドの後押しで国連に加盟、まず領土の安堵を確保した。そして今日まで九次に渡って、近代化と経済発展のための五ヵ年計画を実行してきた。

だが、ブータンは用心深かった。インドの援助は受け取ったが、心は開かなかった。インド経由でやって来る西欧的合理主義が、ブータンの仏教共同体を破壊するのを恐れた。

近代化と開発の過程で、主権国家として生存し続ける秘訣は、“ブータンらしさ”の維持に

ある、を国是としている。キーワードは、“ユニークであること”だ。風変わりなブータンが“普通の国”になったら、滅亡すると国王も国民も考えている。

だからいま、ブータンが面白い。桃源郷旅行のロマンもさることながら、近代国家を目指すこの王国を“硬派”の眼で観察し、“尋常な国”でないところを発見するのが面白いのだ。

「いつもドテラ風の民族服を着用し、うまい英語をしゃべる国」。

「仏教の慈悲の心が、野犬の大群を発生させる国」。

「離婚すると男が追い出される母系制家族なのに、一夫多妻制もある国」

「酒は飲み放題だが、世界で一番初めに全面禁煙に踏み切った国」。

「どの家にも仏間があるのに、お墓も位牌もない仏教王国」

「海外からのバック・パッカーの若者を敬遠し、一日に二百ドル以上払える“良質の旅行者”のみ受け入れる国」

「“GNP（国民総生産）よりもGNH（国民総幸福）が大事”と国王が宣言、西欧合理主義経済学に真っ向から、議論を吹きかけた人口七十万のミニ途上国」

「国連やインド、日本などとは付き合いが、米、英、仏、ロ、中の安保常任理事国とはあえて外交関係を結ばない国」

確かに変わっているではないか。

ヒマラヤの仏教王国の編み出したこの“ブータン方式”、それはグローバリゼーションという名の欧米の“文化帝国主義”に併呑されないための、国家安全保障政策でもある。

ブータン人とは、誇り高く、かつ、したたかである。こういう戦略眼がどうして形成されたのか？それを人間存在と風土との関係や、地政学の観点から分析を試みたのがこの本だ。

この国はいま、ちっぽけなヒマラヤの空間から、地球を画一化する大国発の文化“普遍主義”の対抗軸として、生存をかけて文化の“独自主義”を主張している。「小国の地政学」は、苦闘するブータンの生きざまを最も端的に象徴する言葉と考え、本の表題とした。

第一章 ブータン素描 ―パロ行き航空、4時間半の見聞―

座席番号「1A」、「オヤ、王妃が乗っている」

日本からブータンに出かけるには、タイから、空路が便利だ。インド経由で陸路、入国するルートもある。だが、インド・ブータン国境まで出かけるだけでも、大旅行だ。ブータンの王立航空会社、ドルック・エアー（雷龍航空）が、タイのバンコックから週に五便、空港のある唯一の町、パロまで直行便を飛ばしている。

ブータンという国名は、英語だ。“チベットの端”というヒンドウ語がなまって、英国人がブータンと命名した。彼らの国語、ゾンガ語ではドルック・ユル（雷龍の国）という。日本人が自分の国を「ジャパン」と呼ばないのと同じだ。「日の丸」に該当する紋章が、ドルック、つまり雷龍で、国旗にも天に昇る龍が使われている。

ブータンは8世紀ヒマラヤ越えでやってきたチベット僧が広めた、仏教文化のうえに築かれた王国だ。

ある偉いチベットの坊さんが、ブータンにやって来て布教を始めようとしたとき、突如として雷鳴がとどろいた。空を見上げたが、雲ひとつなく晴れていた。お付きの者は恐れおののいたが、「あれは龍が叫んでいるのだ。吉報である」と坊さんがいった。古くから伝わる民話だ。

ブータンの国教はドルック派仏教と呼ばれているが、その名の由来はこの故事がもとになっている。以来雷鳴をとどろかす龍が、国のシンボルになったという。

私のドルック航空の座席番号は「4E」、前から四番目の席だ。2005年10月、インドのコルカタ（カルカッタ）経由パロ行きは、三時間遅れて、午前九時、バンコックを出発した。英語の放送が、「当機には、王の一族がご搭乗です」とアナウンスがある。一番前の「1A」にはそれらしきお妃風の女性が座っている。離陸直前に乗り込んだ十人ほどの一団が、彼女を囲むように席につく。

「どなたが乗っているのですか」

隣の窓際、「4F」の席に座る女性に、そっと聞いた。

「国王の二番目のお妃です。外務大臣と大蔵大臣とその夫人たちも乗っています」

英語で尋ねたら、いきなり日本語で答えが返ってきた。ブータン駐在のJICA（国際協力機構）の専門家、ドイル・恵美さんだった。政府に知人が多いとのことで、前列の席に陣取った政府高官の何人かと、会釈をかわしている。

「王妃は、多分、バンコックのエステの帰りですよ。美容と健康には気を使われているそうですから。」

「ホウ。大臣たちもお供するのですか？」

「まさか。ニューヨークの国連総会の帰りじゃないですか。バンコックで落ち合ったのでしょう」

ブータンは二回目の訪問である。この機内の出会いは、素顔のブータンに触れる絶好の機会だった。

国連総会帰りの二人の大臣が、前の座席でなにやら話している。内容までは聞き取れなかったが、使用言語はまぎれもなく英語だ。ブータン人は小学校から英語教育を受けていることは承知していたものの、二人の閣僚の機内の会話が英語とは、いささか驚きだ。

「私も始めは、びっくりした。若い知識人どうしが、街の中で、わざわざ英語で話しているのをよく見かける。英語はこの国の人々のある種のステータスシンボルと見なされているから、多分いいカッコしているのでしょう。でも、この場合は違う。外交や経済の話は、ブータンの国語のゾンカ語は向いていない」

「4F」女史がそういう。

「国際政治や経済の用語や表現に該当する単語がゾンカ語にない、という意味かですか」

「そう。宗教、伝統、習慣など純粋ブータン文化に属するものは、ゾンカ語で考え、ゾンカ語で話すのが便利みたい。英語は向かない」

「それはそうだ。そこまで英語で考えたら、発想法がアングロサクソンのになり、ブータン人としてのアイデンティティが無くなってしまう。」

精神はブータン、実利は西洋の発想で。近代化してから、まだ日の浅いこの国の“和魂、洋才”路線だ。

機内誌の名は「衆生に吉祥あれかし」

ドルック航空は、英語の機内誌「Tashi Delek」を備えている。「タシ・デレ」と発音する。この国の仏教文化の元祖、チベット密教の吉祥天信仰の合言葉で「衆生に吉祥（福德）あれかし」という意味だ。ロイヤル・ファミリーや隣席の良き解説者との機内での遭遇、どうやら私も吉祥天のご利益にあずかったらしい。

機内誌には「ブータンのすべて」と題する外国人用の読み物が載っていた。ブータンとは、どんな国？長い話を短く展開するには、もってこいの記事だ。以下はタシ・デレ誌の記事も取り混ぜつつ、機中でまとめたブータン素描だ。

ブータンはヒマラヤ東部の山国だ。地球上で最も険しい山々に何重にも覆われた土地で人々は生活している。北は中国（チベット自治区）、東西と南はインドで、東はアルナカル・プラデンシ州、南はアッサムと西ベンガル州、西はシッキム州とそれぞれ国境を接している。広さは三万八千平方キロ、九州と同じくらいだ。もっとも山々や谷間のシワを伸ばした表面積はもっと大きい、とブータン人は胸を張る。

大ヒマラヤ山脈を北に背負い、階段や坂を下りるように南に行くほど低くなる。一番高いところは、チベット国境のガンカル・プンスム山で、7550メートル、低いところは、南端のインドのアッサムと接する亜熱帯ジャングル地帯で、標高180メートルだ。

人口は2001年調査によると、69万9千人。首都はティンプーで人口約五万人だ。

この国の人口は、実ははっきりしない。理由はこの国に事実上、居住している人口の約三分の一を占めていると見られるネパール人を、どこまでブータン国民と認定するか、その扱いに苦慮しているからだ。この国の南部では、インド経由で移住してきたネパール人との間に、民族紛争の火種が絶えない。

1972年、ブータン王国が国連に加盟したとき、「人口130万人」とかなり水増しした数字が報告された。三十余年で、人口が半分に減ったわけではなく、あまり少ないと加盟申請が否決されるのではないかとの懸念があったからだという。

無為、無策に時を過ごしたら“国が滅びてしまう”という危機感の強いブータン政府にとっては、人口統計でさえも国家の生き残り戦略の重要な構成要素だ。

「同感です。南部のジャングル地帯の人口の40%は、ネパール人だというわさもある。ブータンとインド国境付近に、ネパール人の独立国家を作ろうという運動もある。私のお手伝いさんの夫は運動に参加したかどで勤務先をクビになり、家族は一家離散の状態です。」「4F」女史はそういった。

ブータンにおけるネパール人問題、処理を誤れば、主権国家としての存立に関わる大問題に発展しかねない。だから、機内誌は触れていない。

日本とは、時差三時間。北緯26度45分から28度10分、日本の沖縄の緯度にあたる。だが、極寒の山岳地帯から高温多湿の亜熱帯まであらゆる気候、風土がそろっている。

宗教は、大乘仏教の一つであるチベット密教だ。「ブータン人は信心深く、生活と仏教が密着している。ほとんどの家には、チョソムという仏間がある」と機内誌に書かれている。建国記念日は12月17日。1907年、国家を統一したワンチュック王朝の創立の日だ。ブータンの通貨の単位はヌルタム、インド・ルピーと常に同じ価値を持つよう連動している。買い物するとおつりに、インド・ルピーが混じることもしばしばだ。

40年前は、通貨がなかった。物々交換が主で、決済にはインド通貨が使われた。正式に自国通貨を持ったのは、中央銀行が設立された1960年代の末のことだ。

ブータンの文明開化は「明治維新ではない」

1952年、第三代の、ジグミ・ドルジェ・ワンチュック国王が即位する以前は、ブータンは、中世の封建制、あるいはそれ以前の古代社会の風習をもつ山岳地帯の鎖国国家だった。ワンチュック国王の近代化政策で、農奴が廃止されたのが、1956年。郵便、電気、電話、そして車が入ったのは、やはり貨幣の導入と同じ60年代だった。

なぜ、この国は封建時代から一挙に二十世紀後半の近代に一足飛びに突入したのか？それを知るには、王の決断の背景となった地政学的事情を頭にいれておく必要がある。ブータンが開国と近代化に踏み切ったのは、ヒマラヤのパワーバランスの上の大変化が起こったからだ。

震源地は五十年代の“革命中国”だ。ブータン文化の母胎であったチベットは、武力で制圧された。ダライ・ラマは亡命し、ヒマラヤ仏教の総本山チベットは滅亡した。中国の脅威にさらされたブータンは、1959年インドへの道路を開き、鎖国の中世を離脱した。

開国の原因が外圧であったところは、明治の黒船騒動と似ている。だが、ブータンの開国のやり方は“似て非なるもの”だった。「廃仏毀釈」「富国強兵」「脱亜入欧」「散髪脱刀」が維新の明治の国策だ。

ブータンは正反対の方向を目指している。「仏教が減れば、国が減びる」と固く信じている。ミニ国家にとって、「富国強兵」はありえない。チベットの二の舞を避けるため、まず国連に加盟し“国の安堵”を担保したのち、ブータン流「小国の地政学」をしたたかに追求している。

「脱亜入欧」ではなく、あくまで民族としてのアイデンティティをヒマラヤの文化に求めている。最大の援助国である隣国の大国、インドにも金はもらうが、心は開かない。経済発展は目指してはいる。しかしグローバル化もインド化も、伝統文化を破壊するので、独立の脅威だと認識している。

「散髪脱刀令」で官吏の洋服着用に始まり、衣食住の西洋化が急速に進んだ日本の明治とは対照的なのが、現代ブータンの生活文化だ。

タシ・デレ誌は、ブータン人の暮らしについて、こう説明している。「農業と牧畜が主な産業で、GNPの45%を占める。人口の90%が従事している。農地は山の傾斜を崩して造成した棚田や狭い段々畑だ。林業はGNPの15%、小規模工業と鉱山が10%を占める。主要食糧は、赤米、小麦、そば、とうもろこし、豚、牛、鶏、ヤクの肉、それからチーズ、そして唐辛子だ。唐辛子は香辛料としてではなく、野菜の一つとして食べる」と。

ブータンの建物もユニークだ。「チョルテンという経文の書かれた旗印とストーバという仏塔が、寺院はもちろんのこと、一般の民家にも立ち並び、もっともブータンらしい風景を演出している。ブータンには昔から、ゾンという名の城が、山頂や峠、あるいは川の合流点などの要衝に何箇所も建設され、そのまま残っている。昔は外的を防ぐための要塞だったが、今では仏教の僧坊であり、中央政府や県の行政センターでもある」タシ・デレ誌の解説だ。ゾンはブータン建築の代表例だが、一般の民家も建築条例で、昔のたたずまいを残すよう、細かい規制がある。

「衣服」はどうか。ブータンには、ドレス・コード (dress code) があり、男は「ゴ」、女は「キラ」という民族服着用を義務付けている。この法律は、文化破壊は国の滅亡につながるというブータン独自の安全保障哲学に由来する。「ゴ」は日本のドテラのような着物で、「キラ」はかかとの隠れる巻きスカートと上着のアンサンブルだ。

衣服に限らず、ブータンには伝統的な制度が温存されている。民法がそれだ。日本の明治民法はドイツを範にしたもので、家督の相続は長子の単独相続で、男のほうが圧倒的に有利だ。

ブータンの法律には一夫一婦制の規定はない。しかも基本的には、古来の母系制を維持している。これも広義の国家生き残り戦略の一つといえるだろう。もしこれを急激に変えたら、

華族や村落共同体のもつ伝統文化に亀裂が生じ、社会の混乱を招く。それだけでなく、ブータン人のものの考え方の“文化変容”を起こし、インド化や西洋化の引き金となると懸念しているのかもしれない。

「離婚すると男が、家を追い出される」

隣席の「4F」女史によれば、ブータンは一夫多妻制もあるが、重婚もOK。だから、一夫多妻や一妻多夫もある。ただし、一妻多夫は、今は禁止された。しかしブータンでは家や財産は女性が持ち、男はそこに婿入りするケースが多いという。

「財産保全のために女性が世襲する母系制ね。家付き女が婿取りをする。夫に不都合があったら、家から放り出される。もともと夫婦別姓だから、離婚されてもあまり目立たない。ブータンは離婚が多いので、世間は気にしていない」と。

「一妻多夫は禁止され、なぜ一夫多妻はOKなのか」

「よくわからないけど、家の中に夫が何人もいると、男同士でいさかいを起こすからじゃないかな。ブータンの一夫多妻制はチベット文化圏の伝統で、妻は原則として姉妹ということになっている」

「それは原則で、そうでない一夫一婦制もあるということか」

「ブータンは、山や谷で地域が多いから、昔の有力者の男性は、あちこちに現地妻を持っていたといわれる。その名残は今でも残っているみたい」

この国の王朝の四代目にあたるジグメ・センゲ・ワンチュック現国王は正統的な一夫多妻制の実践者だ。ブータンの名家の四人姉妹を同時に娶っている。機内で遭遇した王妃はその一人だ。

母系社会の実体について機中の会話が弾む。彼女は米国人と結婚しているが、夫はタイで国連の仕事をしており、ブータンには単身赴任だ。

「私のテイエンブーで借りている家が月350ドル、家主は大金持ちの女性で、一年ほど前、亭主をクビにして追い出した。離婚の調停裁判で、前夫が月に一度子供に会いに泊りにくる権利を与えられた。この男、泊りに来るのはいいのだが、そのたびに一人さびしく洗濯機を回して自分の下着を洗っている。お手伝いが三人もいるのに、奥さんは絶対に手伝わせない。

彼女は優雅に生活を楽しんでいる。先日、タイに出かけたとき、日本製のデジタル・カメラを買ってくるよう頼まれた。700ドルもする高級品だったが、カメラと引き換えに、ニヶ月分の家賃の領収書をくれた。ブータンには相続税も固定資産税もない。資産家天国よ」

ブータンにはこの種の土地つき、家付きの実権派の奥さんが大勢いる。その家系はついこの間まであった封建時代の地方豪族の末裔で、母系制で財産がそっくり女性の下に保全された上、ブータンの開国、近代化以来続く首都の土地ブームで、ますます富が増加しているという。

「ブータンの上流婦人、なかなか優雅なものですね」

「ええ、日本では、想像つきません。先日、首都の上流階級の集まるパーティーに招かれたとき、政府のお偉方に、“現地夫、作ったらいかがですか”といわれました」

「よろしく願います」といえばよかったのに」

「とんでもない。そんな事いったら大変なことになる。本気にされて、ボーイ・フレンドでも紹介されたらどうですか」

ブータンと日本、男女の仲と婚姻の文化は、大いに違う。一夫一婦制に拘らない。そして、離婚とか、ガール・フレンド、ボーイ・フレンド問題には、とても寛大な国とお見受けした。

ブータン名物？「GNPよりGNH」

タシ・デレ誌が触れていない、ブータンの経済の話がある。「4F」女史は次のように言う。

「ブータンの一人当たりGNPは7百ドル以上、隣の大国、インドよりずっと多い。

でも、国の歳入の四分の一はインドからの贈与で成り立っている。ブータンはインドにとって対中国の自然の要害だから、安全保障上の理由で、最大の援助国となっている」

私は以前、三日間だけブータンに立ち寄ったことがある。大勢のインド人労働者が、道路建設現場で働いているのを目撃した。

「そう。それがインド政府の援助の一つです。一日120ルピー（350円）というインドの最低賃金で出稼ぎ労働者としてやってくる。彼らは、道路わきに小屋を立てて住んでいる。ブータン人はこんな安い賃金では働かない。国民一人当たりの所得を比べれば、貧乏な国が豊かな国を経済援助していることになる」

インドは核兵器を持つ人口十億の巨大国家、ブータンはわずか6千人の軍隊しかない、人口70万にも満たないミニ・ミニ国家、象がねずみを助けるのは、当たり前のように思われている。しかし、インド人の出稼ぎ労働者ほうが、ブータン人よりも、はるかに貧しい。これをブータン人はどう受け止めているか。

「ブータンの若者は“道路工事はインド人のやるもの”と割り切っているみたい。気位の高い民族だから、もっと高給を出さないと働かない」。若い人の高失業率がこの国の社会問題の一つだというのに。最も人気のある職業は、国や地方の公務員で、平均賃金が月給で250ドル、激烈な競争試験のある狭き門だ。

「もう一つ機内誌が触れていないことがある。GNHという有名な話が紹介されていない」
「4F」女史が言う。これは、欧米の伝統的経済学の教説に挑戦する学問的なテーマでもあり一般の観光客向きではない。だが、GNH抜きでは、現代ブータンを素描したことにならないことも確かだ。

GNHとは、Gross National Happiness の略語だ。純粹のブータン製キャッチ・コピーで、この国の開発の哲学であり、基本戦略である。

ジグメ・シンゲ・ウォンチュック現国王が、ブータンにとっては「GNPよりもGNHの方が重要だ」と述べたことから一挙に有名になった、ブータンの知識人たちは、このアルファ

ベットの三文字がお気に入りだ。

GNPは国民総生産の略であることは言うまでもない。この一年間の経済的付加価値を示すGNPの構成要素の中には、環境破壊や過度の軍事支出など人間生活に負の結果を招くものが多く含まれている。近代化に伴う負の影響は沢山ある。ブータンをブータンたらしめている仏教文化の衰退を招く。力の弱い国が物質主義に走れば、グローバリゼーションという大国主導の経済ルールに翻弄される。そのことはやがて小国であるブータンの滅亡に結びつくかもしれない。物質的な豊かさはある一定の水準を超えたら、追加的な幸福をもたらさない。ブータン人が必要としているのはGNPという、物質的豊かさのあくなき追求ではなく、GNHすなわち「国民の総幸福」を大きくすることだ。

これが、小国ブータンの生き残りのための開発戦略の骨子だ。いま、世界のエコノミストのあいだでも注目を集めている。

ドルック航空のエア・バスが着陸し、ドアが開いた。いきなり湿った熱風が、客席にまで吹き込んでくる。インドの西ベンガル州の巨大都市、コルコタ（旧名、カルカッタ）の空港に立ち寄ったのだ。満席の機内から何人かのインド人が降り、同じ人数の観光客が新たに乗り込んできた。

東インド会社に狙われたブータン

コルコタは人口1200万人、17世紀末、英国の東インド会社が、このガンジス川のデルタ地帯に拠点を築いたことで発展した都市だ。以前は植民地インドの首都でもあった。とにかく暑い。その当時の英国人をして、「この宇宙で最悪の場所」といわしめた瘴癘（しょうれい）の地だった。東インド会社はヒマラヤの高原に目をつけ、避暑地として土地を占拠しようと試みた。ブータンも候補地の一つだった。ブータン王国は断り続けた。英国はジャングルと山に囲まれ、アクセスがあまりにも厳しいので断念した。その代わりに、隣のシッキム王国を脅し、紅茶で有名な清涼の地ダージリンを割譲させた。これがシッキム王国滅亡の遠因となった。

もしブータンが英国に領土の一部でも割譲させられていたら、この国がヒマラヤ最後の仏教王国として、今日まで生き残ってこられたかどうか？

眼下に、ガンジスの大河が、蛇行している。ヒマラヤの氷河湖を源流とする何十本もの清流が、インドの平原で合流し、やがてセピア色の濁流となって、ベンガル湾に注いでいる。

90人乗りのエア・バス機はヒマラヤの山麓の国目指して、北上する。ベンガル湾の三角州コルコタから、ヒマラヤの山麓国家、ブータンへの飛行時間は思ったよりずっと近かった。離陸してまもなく「あと40分でバロです」機内放送がある。

インド亜大陸は象の顔みたいな形をしているが、地図でブータンの位置を確かめたら象の右耳の上の小さな斑点のように見える。東西300キロ、南北170キロの小国だ。しかも

全土が急傾斜の坂に乗っているような国だ。

インド国境の標高200メートルから1500メートルの南部地帯は、森とジャングルで人はそれほど多くは住んでいない。

1500メートルから3000メートルの中部内陸部に国民の大部分が住んでいる。政治、経済、文化の中心地で、首都や空港や大寺院もそこにある。北のどん詰まりには、万年雪を頂く、ヒマラヤの大山脈が屏風のようにそそり立っている。

北部の3500から4000メートルの山麓地帯は遊牧民の生活圏だが、村を起点に何本かのトレッキング・コースがある。

「ブータンのトレッキングは、ネパールの二倍以上も金がかかる。でもそれだけの価値ありだ。ネパールより山の傾斜はきつい。風も強いし、気候は厳しい。ネパールではなく、ブータンにきたれ。本当のシャングリラ（桃源郷）のたたずまいはブータンにあり」

客席で読んだ機内誌「タシ・デレ」の「何故トレッキングはブータンなのか？」と題する記事の抜粋だ。

ブータン旅行は、同じヒマラヤの山岳国家であるネパール観光ほど手続きが簡単ではない。ブータンが観光客を受け入れるようになったのは、1975年だ。ただしそのころは、空路はなかった。全てインド経由の陸路だった。パロ空港に商業航空が就航したのは、1983年だった。それまでは、ブータンの空は事実上外国に対し、鎖国状態だった。

なぜか。それはやたらに外国人がやって来ることによって、国を乱されては困るという警戒心からだった。開国政策を徐々に取り入れつつあるが、ブータン旅行にはかなり制限がある。政府観光局認可の観光会社に、ガイド、車、ホテル、食事代込みで、一日につき米ドルで200ドル以上前払いできる「良質の？観光客のみ受け入れる」との布告を出している。バック・パッカーは麻薬の持込など風紀を乱すので絶対に排除するとのことだ。この一連の外国人に対する旅行規制策は固有の文化と環境の保全という広い意味での国家安全保障政策の一環だ。外国人立ち入り禁止の寺院や、地区がかなりある。

奈良の大仏もびっくり、高さ51メートルの巨大仏像

ブータン国民にとって仏教は、かけがいのないよりどころだ。ヒマラヤにいくつかあった仏教王国は、仏教の衰退と共に滅亡した。残るは、ブータンのみだ。仏教が衰退すれば国がなくなり、国が滅びれば、仏教が形骸化する。機内誌、タシ・デレに「ブータンに世界一巨大な仏像がお目見えする」と題する政府系新聞、KUENSELの次のような記事が、転載されていた。

「ブータンに統一国家を作ったワンチュック王朝成立百年に当たる2007年、首都ティンプーを見下ろす丘の上に、世界一巨大な釈迦仏の坐像が建設される。高さ51メートルの青銅製の釈迦仏の坐像だ。高さ5メートルの釈迦の聖座に当たる部分の内部はそっくり礼拝堂が建設される。その上部に座る仏像の内部は16階建てで、十万体の黄金色に輝くミニ仏

像が飾られる。総工費、二千万ドル。完成すれば、ピラミッドなど“世界七つの奇観”に“八番目の名所”が付け加えられることになる。世界中の仏教徒の、新しい巡礼の聖地となるであろう」と。

ちなみに世界一の金銅の仏像、東大寺の奈良の大仏の高さは、15メートル、その四倍も座高の高い巨大な大仏だ。「国王と政府は、この計画を国の王朝百年の記念行事としてスタートさせることを正式に決定した」とのことだ。これもブータンの生き残り戦略の一つだ。

この年のブータンの雨期明けは遅かった。知り合いのブータン人が、東京の私の事務所を訪問したとき、九月ごろブータンを訪問したい旨を伝えた。「大歓迎だけど、雨季だから飛行機が飛べるかどうか、保証できない」といわれ、一ヶ月遅らせた。それなのに標高2300メートル、空港のあるパロの町を囲むヒマラヤ山麓の山には厚い雲がかかっている。

「今年は変な天気、もう秋なのに。着陸できるかしら」「4F」女史が心配する。前日のバンコック～パロ便は厚い雲で、空港が視界に入らず、ネパールの首都、カトマンズに飛び、乗客はそこで天候回復待ちの宿泊を余儀なくされたという。

ドルック航空のエア・バス機は、山の上空を二回ほど大きく旋回した。わずかな雲の切れ目をめざして、ジグザグ飛行の急降下を始めた。まるで、航空ショーのアクロバット飛行だ。谷間を縫う。崖が迫る。低空で空港わきの丘をUターン、風上に機首を向けながら、着陸態勢を整えた。

パロの空港、もともとインド軍が対中国国境紛争の前進基地として建設したとのことだが、1983年、ドルック航空の定期便が就航した。世界で最も着陸の難しい空港という定評がある。パイロットは全員山と谷の地形を熟知したブータン人で、アメリカのテストパイロットの免状も持っているという。

パロの空港で、入国手続きのため行列が出来る。定員90人の乗客のうち外国の観光客が50人ほどだった。あらかじめ旅行社経由で登録した名簿との照合や、ヴィザの発給作業で、結構手続きに時間がかかる。行列に加わった外国人は欧米人がほとんどだ。東洋人と思しき人間は私ともう一人の日本人の仲間しか見当たらない。

後刻わかったのだが、インド人はブータンとの間に、相互にヴィザなし協定が結ばれ、他の外国人よりも自由にブータンを旅行できる。一日200ドル前払いの“良質な外人観光客”の規制の枠外として扱われ、ほとんどのインド人観光客は、陸路でブータンに入ってくる。

空港で些細なトラブルがあった。日本の旅行社であらかじめ記入してくれた入国の申告用紙が昔の書式だった。「列に並んだ人の入国手続きを全部済ませたら、事務所に行って新しい用紙をもって来るから、列の最後尾で待ってほしい」と入国管理官に言われたのだ。

ドテラ姿？の入国管理所長との再会

そこに顔見知りを通りかかった。空港入管所長のドルジ氏だった。半年ほど前、空港で話

をしたことがある。とっさに声をかけた。「また日本からやってきた。私の顔おぼえているでしょ」と。本当は忘れていないに違いないのだが、そこがヒマラヤの山の民の心の温かさなのだろう。ニコリして「勿論だとも」の返事が返ってきた。事情を話したら「最近入国手続きのフォームが改定になったのだ。俺が書いてやるから、サインだけしなさい」所長室に案内され、すべて記入してくれた。

海外旅行者にとっては、どこの国に出かけても、空港の入国管理ゲートは、異なる文化との最初の出会いの場だ。ブータンにやってきた外人観光客が、まず異文化ショックを受けるのは、この国の入国管理官も税関も、民族服のゴをまとっていることだ。

空港の官憲の扮装のグローバル・スタンダードは、警官や軍隊と同じような制服だ。そこで、ある種の“それらしさ”を出すのだが、私の知る限り民族服姿は、アラブの一部の国とブータンだけだ。この国で、制服をまとっているのは、軍隊、警官、消防の洋服と僧侶の服くらいで、ほかの職業の人々は公務員といえども、男性はゴ、女性はキラを着用している。

欧米の旅行案内書には「ブータン人の男は王様以下、日本の着物のような民族服を着て公務に当たっている」と書かれている。日本人の目で見ると、欧米人が感ずるよりももっと異様に写る。

「ドテラをたくし上げて帯で結び、下半身はパッチをつけたようないでたちで、しかも草履や下駄でなく靴を履いている」どうしても日本の着物文化に目線を合わせて、見てしまう。だから、余計に変てこな感じがする。

この国の近代化につれて、都市の男達の服装の洋風化が進行した時代がある。公務や寺院の儀式以外は、街なかにTシャツやジーンズ姿が結構目立っていたという。ところが1989年の国王の布告で、男はゴ、女はキラの着用が義務づけられた。

公の場所とは、街路、市場、レストランも含まれている。ブータン人が独自の文化を、身をもって尊重することによって、国家への帰属意識を高めることがねらいだ。王の布告には「ブータン国民の安泰と主権を守るための独自性の維持強化策」と説明されている。

ゴをまとった入管所長が税関まで付き添ってくれた。「シガレットもってないでしょうね。税は私の管轄でないけど。持っているとな税関が強制的に預かることになっている。帰国の時、空港で返してくれるけど」とささやいた。

仏教王国、ブータンでは、タバコを吸う習慣がなかった。代わりにピンロウをかむ習慣が昔からあった。カストロ首相がハバナの葉巻をこの国の要人にプレゼントしたのが、喫煙のきっかけとのことだ。王室や政府高官のなど上流階級に始まった喫煙は、インドの安タバコが大量に流れ込み、あっという間に、大衆化が起こったという。

2004年、ブータンは世界初のタバコの全面禁煙国になった。外でも家でも、喫煙はご法度だ。国民の健康維持には違いないが、宗教上の理由もあるらしい。

「ブータン仏教ではね、タバコのことを悪魔に捧げる線香だといっている」別れ際に入管所長が教えてくれた。

第二章 ブータンの古代と中世 ―チベット仏教の系譜―

「そして、ブータンが残った」

ブータンから仏教をとってしまったら、アルコールのないビールだ。スピリット（魂）がぬけた無意味な存在になってしまう。ブータンは仏教が創った国だ。「仏教が減れば、ブータンはなくなる」とブータン人は言う。この国の“こころ”である仏教は、いつ、どこから、どのようにして入ってきたのか？ブータンを語るには、まずそこから始めるのが王道だ。

インド亜大陸の地図を広げる。北の中国との境界に東西2千四百キロにわたって、世界でもっとも高い山々が連なっている。大ヒマラヤ山脈だ。7世紀ごろ北インドからタントリズム密教と呼ばれる神秘的な仏教が、ヒマラヤに入っていった。そして山の北側のチベット高原で栄えた。欧州や日本では、「ラマ教」と呼ぶこともあるが、大乘仏教の一つだ。

タントリズム密教とも呼ばれ、元祖はインドだ。インドの大乘仏教の最後の段階である6世紀ごろ登場し、13世紀、イスラムの侵入で仏教がインドから姿を消すまで続いた。大乘仏教の哲学を前提とし、これに古くからあるヒンドウ教の呪術を神秘主義的に体系化したものだ。

曼荼羅と呼ばれる絵図を仏の世界の宇宙と見なし、祈禱や儀式を重視する。祈禱には護摩を焚き、インド古来の神々を取り込んで呪術を行い、その秘儀によって恍惚感に達し、即身成仏を目指す流派だ。

凡夫にはうかがい知れない秘密の教えのことを密教という。チベット人はもともとボン教という巫女を通じて心霊や祖霊と交信するシャーマニズムを信じていた。インドからやってきたこの新手の大乘仏教のもつ神秘性は、彼らの土着文化にぴったりだったのかもしれない。

チベット人はインドで仏教が減亡した後も、これを発展させ近隣諸国にも布教に努めた。その結果、南はネパール、ブータン、インドのシッキム、インドのラダックまで、西はモンゴル、東は中国の青海、雲南、四川省にまで広がった。

だが、この山と高原に広がった大チベット仏教圏は20世紀に入り、急速に縮小した。本家のチベットも社会主義中国の支配下に入り、政教の盟主、ダライ・ラマ14世のインドへの亡命で、仏教国としての息の根をとめられた。この国に残るのは形骸化した“観光仏教”のみだ。

チベットにこんな言い伝えがある。

「昔、チベット高原は天国に一番近い桃源郷だった。ところが王様が間違っ、天国行きのロープを切ってしまった。それからチベットは苦難の道を歩むことになった」と。

天国行きのロープが切れてしまったのは、チベットだけではない。ヒマラヤとその北の高原の仏教国は、次々と列強に滅ぼされていった。モンゴルはソ連に、チベットは中国に、そしてネパールは、ヒンドウ教の勢力に圧倒され、かつての仏教花やかかなりし頃の面影はない。

1975年、ヒマラヤ山麓のシッキム王国がインドに吸収された。そして、ブータンが残

った。いま、唯一ブータンだけが、ヒマラヤの大乗仏教を国教とする王国として存続し、チベット密教の伝統を守り続けている。

雨季の終わったパロの溪谷にある小さな空港、降り立った外国人観光客は、およそ五十人。観光ヴィザでやってきた日本人は私と若い友人だけで、あとは米国人、ドイツ人、フランス人だ。観光局の資料によると年間の観光客は、三週間以内の観光なら出入国自由のインド人を除くと、約一万八千人、アメリカ、日本、ドイツ、フランス、英国の順だ。日本人はざっと千人が訪れる。今、欧米では静かなるブータン旅行人気盛り上がりしている。欧米の大企業が、取引先の接待で、自家用ジェット機をチャーターし秘境ブータンの観光に連れてくる例もある。「ヒマラヤ仏教とは何か？それを知りたいならブータンに行ってみよ」が彼らの、合言葉になっている。

「ラマ教は仏教ではない」と思っている日本人がいるが、ブータンにやって来る欧米人は、チベット密教の知識を持った人が多い。出発前、日本のヒマラヤ専門の旅行社から聞いた。英語のブータン旅行記には、面白いものがあるという。現地の本屋で格好な本を見つけた。

「天国にあまりにも近いところへ滅び行くヒマラヤの仏教王国」という表題のニューヨーク・タイムスの元女性記者の旅行記だ。何故、欧米人がそんなにブータンに特別な興味を持つのか？この本に答えが出ていた。

「この数十年間、多くの西洋人は物質主義と過度の産業発展に嫌悪感をもよおしていた。そういう人々が、東洋の仏教やヒンドウ教の中に慰めと安心のよりどころをみつけようとする。しかし昨今ではインドやネパールには失望する旅行者もいる。霊的な旅行をしようとしても、人間が多すぎて騒々しい。自然愛護の気持ちが薄い。寺院など名所・旧跡めぐりも見え見えの商業主義に侵されている。その点インド亜大陸とヒマラヤで、ブータンは汚されていない、たった一つの旅人の心の癒しの場所だ」と。

欧米とりわけ、フランスとドイツのチベット研究のレベルは高い。あらかじめ書物で、チベット密教の系譜と概論を頭に入れた上で、この国にやって来て、瞑想ツアーに参加する欧米人が大勢いる。

ジェルミ・ツエワンさんとの出会い

欧米人観光客と共に空港の玄関を出た。ブータン人の現地ガイドが十人ほど、運転手つきの四輪駆動車で迎えに来ていた。原則としてこの国の観光は、ガイドと車つきのバック・ツアーだ。ブータンには外国人受け入れの為の民間の旅行社が百社近くあるとのことだが、私は素晴らしいガイドにめぐり合った。

ジェルミ・ツエワンさん、日本語と英語堪能、しかもブータン事情、とりわけチベット仏教にも詳しい知識人だった。日本に七年ほど働いたのが縁で奥さんは日本人、『小国の地政学』執筆にはうってつけの身近な取材先でもあった。

パロにあるブータン最古の寺とされているキチュ・ラカンに案内される。「仏教の歩みをた

どりたいなら、ここから始めるのがよい」ジェルミさんのお勧めだ。

ラカンとは、僧房のない小さな寺のことで、7世紀チベットを統一したリンツエン・カンポ王が、建てたものだという。ヒマラヤの南、ブータンを含むチベット圏全域には、神通力を持つ土着宗教ボン教の魔女が支配していた。仏教に帰依したチベット王は、魔力を封ずるため、魔女の身体の百八のツボに当たる場所に、それぞれ寺院を建立した。

国境を越えたこの地もそのひとつで、キチュ・ラカンは魔女の左足のツボに当たる。「まあ、そのあたりのことははっきりした史実に裏づけられているわけでない」とジェルミさん。

ブータンにはいたるところに寺がある。ブータン人の50人に一人は、僧侶だ。政教分離が達成された20世紀初頭以来、彼らは政治と行政には直接関与していない。しかし国民の心を癒す精神的な師で、国家が扶養している。僧侶はブータン人の文化的アイデンティティ維持の役割をになう準国家公務員なのだ。

寺と並んでヒマラヤ仏教の風景を、かたちづくるものが三つある。仏塔とマニ車、そして祈りの旗だ。ブータンでは仏塔のことをチョルテンという。もともとは釈迦の仏舎利を安置した古代インドのストーパ（卒塔婆）に由来する。墓ではなく仏の記念塔だ。

キチュ・ラカンの本堂の周囲の壁面には、百以上のマニ車が備え付けられていた。参詣人は、それを廻しながら、本堂に進む。マニ車の中には経文（マニ、すなわち真言）が書かれ、それを一つ廻せば、経文を一回読んだことになる。

寺の背後のヒマラヤの山々から、吹き降ろす風に数十本の旗が、はためいていた。ダルシンと呼ばれる祈りの旗で、経文や仏の絵が、描かれている。「春と秋は、午前中はベンガル湾の湿ったインドの南風が吹き、ヒマラヤの山に突き当たり、午後はそれが乾いた北風となって戻ってくる」とジェルミさん。

本堂とは別棟の建物に、生き仏と思われる巨像が安置されていた。「この方がインドからおいでになり、ブータンに仏教をもたらしたのです」。

パドマサンバヴァ（蓮の花から生まれた人）という聖人だ。ブータン仏教では釈迦に次いで二番目に偉大な仏で、グル・リンポチェ（至宝の師）と呼ばれている。ブータン人の信仰生活の中で最高の人気を集める存在で、年に一度、仮面舞踏会など五日間にわたって盛大なお祭りをやる。

「8世紀、虎の背に乗ってバロにやってきました。岩山で瞑想した後、その当時この地方を支配していた土着の神々を調伏し、仏教に帰依させた、という伝説があります。これがブータンの仏教伝来です。17世紀、それを記念してリンポチェが瞑想した岩山に僧院が建てられました。あれがそうです」彼が指差した。

五百メートルも垂直に切り立った岩山の狭い棚状の土地に、三階建ての寺院らしきものが見える。ブータン仏教最高の聖地、タクツァン僧院だ。

「Tiger's nest、虎のねぐらという意味です。あそこに行くには、ロバか徒歩です。数年前全焼し、やっと再建されました。ブータンでは寺が不審火で焼けることがたまにある」

「異教徒の仕業ですか。」

「それは考えられない。多分、犯人はねずみです」

ブータンでは、ロウの代わりにバターで作られた灯明が使われる。それをなめに来たねずみが、灯明を倒し火事を引き起こすらしい。防火の為にねずみを駆除すれば、と思ったのだが、敬虔な仏教徒であるブータン人は殺生を嫌うのでそれもままならぬ事だという。

二人の偉人、リンポチェとシャブドーン

ブータン人は、そもそもヒマラヤ仏教の元祖はチベットではなく、自分の国だと考えているふしがある。その開祖は、偉大なる尊師リンポチェだと信じている。大乘仏教の本場、ガンダーラから、ヒマラヤにやってきたリンポチェは、まずブータンを訪れた。ニンマ派という古代ヒマラヤ仏教の宗派を開いた後、チベットに招かれて布教に努め、彼らを仏の民にした。ブータン人はそう考えている。

パロで訪れた二つの名利で聞いた仏教由来の言い伝えは、どうもつじつまが合わない。初めに訪れたチベット王が建立したという最古の寺、キチュ・ラカンの話の方が百年古い。だから、ブータンの仏教は、チベットの分家と思えるのだが、そう簡単に割り切れる事柄でもないらしい。

「偉大なる文化英雄、尊師、リンポチェ」なる政府発行のパンフレットは、尊師はブータンで仏教を広めたのちチベットに行き、呪術師や悪魔と戦いニンマ派仏教を広めた、と指摘している。そして「その結果、野蛮人の国であったチベットは、この上もなく気高い精神文化を持つ国に変質した」とある。まさに“仏の光はブータンから”である。

どちらに理があるのか。縁なき衆生にとっては、どちらでもいいことだ。だが、宗教史ではなく、国家や民族同士の攻めぎ合いという政治学の観点から見ると興味深い。

ブータンの中世は、大国チベットの軍事的、政治的脅威に、常に晒されてきた歴史でもある。それを考慮すると、この本家論争は大国チベットに対抗する独自性の主張であり、「小国の地政学」的計算に基づく、現代ブータン人の精一杯の突っ張りなのかも知れない。

だが、それにしても腑に落ちない。ブータンは宗教的にも、言語的にもチベット文化圏に属する国であることは厳然たる歴史的事実ではないか。私の理解するところでは少なくとも12世紀以降、ブータンの宗教的な官僚と行政官は、チベットからの移民ではなかったのか？ 知識人ガイド、ジェルミさんに、ずばり聞いてみた。

彼はリンポチェ直系のニンマ派の僧侶の家の出身である。父親は、ニンマ派の最高位にあるティンジェン・リンポチェ19世の直弟子で、13年間、秘書を務めていた。

「ブータンには、三千年くらい前から人が定住していたらしい。チベット系のほかに、東部にはミャンマー系の先住民が住み着いていた。多民族国家だ。その中で中世以降はチベットの影響力が大きかったことは間違いない。しかしそれ以前、8世紀から10世紀にかけてはブータン古来の仏教であるニンマ派全盛時代時代だった」という。

ブータン史はかなりややこしい。その後、ブータン仏教の急速なチベット化が始まったらしい。11世紀から16世紀にかけて、チベットで新しい宗派が幾つも誕生、宗派同士の激しい主導権争いが起こった。

自派の勢力拡大のためチベット仏教の諸派はブータンに進出、入り乱れて布教活動を行なった。山岳の国ブータンに点在する村落を、それぞれの宗派が分け合う形で根を下ろしていった。

高原の国チベットとは異なり山と谷の国ブータンでは、峠一つ越えると政治的にも行政的にも、宗教的にもまるで別の世界が存在する群雄割拠の時代だった。ブータンではこれらのチベット新興仏教を“新派”と呼び、伝統的な“古派”であるニンマ派と区別している。

「ブータンに統一国家が生まれたのは17世紀です。宗教家のみならず、政治家としても優れた力量の持ち主がチベットからやって来て、それを成し遂げたのです」と。これがブータンの中世の始まりだった。ジェルミさんの長い講義を短くすると、その後のブータン仏教の歩みは、以下の通りだ。

国家統一の英雄は、ガワン・ナムゲルという名のチベットからの亡命僧だった。チベット仏教の本流であるダライ・ラマの宗派、ゲルック派と対抗するドルック（雷龍）派と呼ばれる門徒集団の高僧だった。チベットではシャブドーンという称号を持っていた。この人はドルック派の偉い人の化身とされていたが、チベット王から「お前は化身ではないと」排斥された。

進退窮まったこの高僧は、峠を越えて西ブータンに亡命した。すでに地元で、勢力を張っていたドルック派門徒と協力、群雄割拠の各派を武力で打ち破り、ブータン全域を視野におく仏教王国を打ち立てた。

シャブドーンは、地方の要所にゾンという名の城塞を建設した。峠越えでやってくるチベット軍の追手と戦う地域防衛施設だが、この施設内に宗教を扱う寺と行政を行う役所を併設した。“軍事、宗教、行政三位一体”の多目的城塞だ。ブータンでは、県に当たる行政単位をゾン・カクというが、それはこの時代の伝統を受け継いだものだ。

空港から、車で十分ほど行ったパロ川のほとりに、山をうしろに背負い、石垣と漆喰で周囲を固めたパロ・ゾンがそびえている。車道から、川向こうのゾンの入り口に通ずる吊橋が架かっていた。外敵の攻撃に晒されたときは、直ちに橋が切れて落とされる仕組みになっている。

この地のゾンは、シャブドーンの追っ手として、チベット王から派遣された侵略軍との戦いで大きな威力を発揮した。

ゾンのすぐ裏手にある円形の国立博物館に案内された。パロ・ゾンの物見の塔を利用して作られた歴史博物館だ。展示物もさることながら、防衛施設としての出城の構造が興味深い。内部は城壁に沿って床が張られ、五階建てになっている。5メートルおきに矢を射るための小窓が切られている。

「ここは実戦に使われたのですか」

「そうです。ここは古戦場です。パロはチベットに抜ける峠の下にある町です。ヒマラヤ越えて、三日くらいでチベットに通ずる山道があった。今は閉鎖しているけれど。その道を伝わって、二度にわたってチベット軍が侵略してきたが、その都度撃退に成功した」

「遠くから射るブータン流の弓がそんなに強力な武器になるのかしら」
「いや強力です。かすり傷でも負わせればよい。矢尻にはトリカブトの毒が塗ってある」
ジェルミさんの解説である。

仮説の検証 「ブータンはチベットの属国か？」

シャブドーンは、チベットという外敵だけでなく、いくつかの反対派の門徒集団との戦いにも勝利を収め、自らの地位を不動のものにした。これまでの慣習に基づく掟を成文化し、仏教的価値観に基づく法体系であるシャブドーン法典をつくった。この法典は、ブータンが近代化に乗り出した1960年代まで、司法のよりどころとなっていた。

この聖人は、チベットから移入した自らの宗派、ドルック派を国教と定め、国名もドルック・ユル（雷龍の国）とした。それが今日まで続いている。

シャブドーンの国家統一以来今日に至るまで、ブータンの伝統的エリートは押しなべてチベット出身で占められている。これは歴史的事実であり否定のしようがない。そこで一つの仮説が出来上がる。それは「ブータン人とは一人のチベット人支配者に何らかの形で、隷属した民族だ。そしてこの国の仏教的価値観に基づく文化や社会の制度の源はブータンでなく、チベットであり、シャブドーン以後、この国はチベットの政治的、文化的属国になったのではないのか」私はそう思った。

しかし、このブータン人の民族意識をさかなでするような私の仮説はたちどころに否定された。答えは「属国ではなく、ブータン人は常に独自性を貫いてきた」であった。ジェルミさんも「チベットはチベット、ブータンはあくまでブータンであることを貫いてきました」という。

その論点のポイントは、今日のブータンの政治エリートの多くはチベット系かもしれないが、その祖先たちは全て政治亡命者として新天地、ブータンに移住してきた人々であること。彼らはチベットで支配者と敵対した人々で、支配者の意を戴して、ブータンを植民地化するためにやってきたのではないことであった。

初めからチベット政権に敵対する勢力がヒマラヤの峠を越えてやってきて統一した国、がブータンであり、本国の意を受けて植民者としてやってきた移住者が、後に本国の締め付けに会い、やむなく反旗をひるがえしたアメリカの独立戦争と、いささか背景がちがう。

この亡命チベット人は、新天地で、この国はチベットと違うのだということを訴え、“ブータンらしさ”を追求した。今日の伝統的ブータン文化といわれる慣習や伝統の多くは、実はこの時代に形成されたものが多い。

例えば一人の法王が、宗教と政治の双方を握るチベット方式ではなく、宗教と政治・外交を別の部署で行うチョシ制度という独自の行政制度を確立した。シャブドーン自身は宗教をつかさどり、政治外交は政教分離の見地から選ばれた別の人物が行った。この制度は基本的には、現代ブータンに引き継がれている。

このほか、ドテラのようなブータン人の民族服の制定、ツエチュと呼ばれるブータンの仏教の祖、バドマサンパパの祭りの制度化など、非チベット化政策を遂行した。

「ブータン人であること」いう民族意識が形成されたのは、実はこのシャブドーン時代だった。逆説的な言い方も知れぬが、“ブータンらしさ”の原点とは亡命チベット人がこの国にもたらした中世の文化なのだ。

建国者、シャブドーンは今日でも、偉大なる僧侶であり賢明な政治家であったとして国民の畏敬の対象になっている。僧侶や役人は臣民に無用な負担をかけてはならぬと論じ、贈り物を一切受け取ってはならぬと厳命した、という言い伝えも残っている。

彼自身は質素な生活を旨とし、一日わずかのミルクと果物で過ごしたが、気力と活力に満ち溢れていたという。

学校の教科書には、シャブドーンが、国民向けに書いた自己紹介の説話、「十六の私」が英語で掲載されている。

「私は宗教と政治の二つの車を廻す人、私は全てのドルック人の避難所、私はみんなに慈悲を与える人、私は全ての人の倫理の源泉、私は悪魔をやつける英雄、私はあらゆる科学を知る賢者、私はドルック人を装おって侵入するよそ者の征服者、私の力をそぐ強者がどこにしようか。私はこの国の偉大なる家父長の化身だ。そして私は、ニセモノの化身を処刑する人だ」

これが、その一部の抄訳だ。シャブドーンにとって、チベットはまさしく、ドルックに侵入するよそ者であり、ニセモノの化身だった。

反チベットのシャブドーン体制確立後、二世紀にわたり両国は戦争状態が続いた。ジェルミさんに歴史的な証拠の一つを見せてもらった。案内されたのはパロのゾンから北西に車で一時間、自動車道路の行き止まりにあるドウゲ・ゾンという名の標高2千4百メートルにある山城だった。

この道は、チベット国境まで続く山道だったというが、国境は閉鎖されている。城の名の“ドウゲ”とは“ドルック派の勝利”という意味だ。1647年、北から峠越えでこの道を攻め降りてきたチベット軍を打ち破ったのを記念して、次の侵攻に備えて築かれた城だ。

60年前の火災で焼け落ちたまま、廃墟になっている。火事の原因はチベット人ではなく、やはりねずみらしい。ゾンの門の辺りから谷底まで続いているという地下道があった。竈城した際、水を取りに行く秘密の通路だったという。

山上の廃墟の城壁に登り、チベットを望む。雲の間から、大ヒマラヤ山脈の高峰のひとつ、真っ白なチョモラリ（7314メートル）が、ほんの一瞬顔を覗かせた。地図で見ると直線距離で50キロ、その向こうはチベットだ。

ここからトレッキングのルートとして、標高4千メートルのチョモラリ登山のベースキャンプまで山道が続いている。馬の背に荷物をくくりつけ、徒歩で谷越え、山越えの三日間の行程である。ここにブータン軍の駐屯地がある。今は中国領になったチベットからの密入

国者の監視所だ。

半世紀秘密だった、シャブドーンの死

チベットと一戦を交えた末、ブータンに統一国家をもたらしたシャブドーン体制は、それほど長続きしなかった。体制を危機に陥れたのは、外敵ではなく後継者問題だった。シャブドーンは、ブータン亡命35年後の1651年、亜熱帯気候の当時の首都、プナカで死去した。ところがなんと半世紀にわたって、その死は国家機密にされていた。

ブータンに限らずヒマラヤの仏教王国の、政権の座の相続問題はかなりややこしい。とりわけ妻帯を禁止しているチベット仏教の流れを汲む宗派の後継者選びは、世襲ではないので、残されたものの中で争いが起こりやすい。通常は、伯父・甥相続なのだが、あいにくシャブドーン、ガワン・ナムゲルには甥がいない。開祖以来何代も続いたドルック派法王の継承は危機に陥った。

後継者がいなければ国は滅びる。そこで、法王の死を伏せたまま五十余年の紆余曲折の末、思いあぐねたドルック派は、相続の伝統を放棄した。シャブドーンがブータンでの布教を禁じていたダライ・ラマのゲルック派の“化身制度”の採用に踏み切った。

化身相続はチベット密教の特徴の一つで、輪廻転生の仏教哲学に根ざしている。解脱して仏性を獲得した存在は、人々を輪廻から解放するために、繰り返し人間の姿をして、この世に戻ってくると信じられている。この仏の生まれ変わりを、化身というのだ。

法王が死去したとき、残された者たちは、化身と思われる存在を国中に捜し求め、後継者に据える。どうやって化身を捜すのか。

チベットからインド亡命中のゲルック派の総帥、ダライ・ラマ14世の場合はこうだった。「私は歴代十三人のダライ・ラマと、観音菩薩の化身と考えられている。私が三歳のころ、時の政府が派遣した新しいダライ・ラマの化身捜索隊が、いくつかのお告げに導かれてやってきた。中略。

彼らは前任者の遺品と、それとそっくりの二セモノをいくつか持参した。その男の子は、いずれも正しいほうを選び“それ僕のだ”といった。人々はその子がダライ・ラマの生まれ変わりだと、ほぼ確信したが他にも候補者がおり、そちらも確かめる必要があった。しかしまもなくその男の子が本物のダライ・ラマと認定された。その子が誰であろう、この私だったのである。中略。

私は僧院（近くの）に連れて行かれ、そこで儀式の座に据えられた。夜明け前にいきなりたたき起こされ王座にすわらせられたのだ。中略。

一年の厄払いの後、私は首都ラサで正式に“獅子の王座”に付いた」

（ダライ・ラマ自叙伝から）

だが、18世紀におけるブータンの法王の後継者としての化身問題は、1940年王座に付いたダライ・ラマのようにすんなりとは行かなかった。

「国内の諸勢力のせめぎ合いで、統一が取れなかったからでしょう」ジェルミさんはそう

分析する。しばらく鳴りを潜めていたチベットの介入もあったらしい。この化身という靈魂再来の相続システムは、結局残されたものの宗教的判断に依存する。甲論乙駁の果てに、シャブドーンの化身は一人ではなく、“身体”、“口”、“意思”の三つの系譜の後継者が選ばれた。

この奇妙なシステムを考え付いたのは、事実上の支配者だった大僧正で1705年、シャブドーンの死を発表し、「シャブドーン聖人の身体から三つの光が出ている」といったという。

化身相続制度導入が原因で、シャブドーン法王の王朝は内部紛争を繰り返し、弱体化していった。この三つの系譜のうち国家元首の位置を占めるのは、“意思”の生まれかわりの化身と定められていた。しかし、“意思”の化身が成人するまで、摂政政治が行われた。後継者である歴代の化身たちは、大僧正と世俗を支配する摂政を筆頭とする、役人達を抑えて政治を行うことが困難になり、国民統治に必要なカリスマ性が失われてしまった。

シャブドーンの化身王朝は、初代の死後、統治力は徐々に衰退していった。中央政府内部では、官僚同士の派閥争いが激化、宮廷内で摂政の暗殺事件も起こった。

こうした中央政府の混乱は地方の藩王の力を増大させた。初代シャブドーンは国を三つの地方に分け、ペンロップという僧侶出身の地方行政官を置き、さらに主要な谷ごとに藩主をおいた。権力を蓄えていたペンロップや藩主に対し、中央のにらみが効かなくなりブータンは三世紀もの間不安定な群雄割拠時代が続いた。

英国の介入とシャブドーン王朝の分裂

シャブドーン王朝が成立、ようやく民族国家が形成されて間もないころ、隣の大国インドには大英帝国が進出していた。ブータンの南のアッサムを手中に収め、さらにヒマラヤに交易路を求め、チベットに及ぶ北への版図を広げようと野望を燃やしていた。国力の弱体化が目立ち始めたブータンは、北のチベットにも、南の英領インドに対しても鎖国政策をとっていた。

ところが、シャブドーン王朝の孤立願望は英国によって簡単に破られた。英国との最初の出会いは1772年だった。コルコタに本拠を置いた英国東インド会社は、英軍の支援で当時シャブドーンが支配していたインド国境に接したクチ・ビハール藩王国を領有した。チベットとの交易路を開くためだった。

当然、軍事衝突が起こったが、英国は東インド会社のチベットへの通行権などの利権を認めさせることに成功、領土を返還した。ブータンというこの国の英語名は、このとき出来上がった。シャブドーンの建国したドルック・ユル（雷龍の国）ではなく、英国人はヒンドウ語でブータン、すなわち“チベットの端の国”と名づけた。これが世界コードとしてのブータンという国名の由来だ。

この呼び名は、英国の関心事はこの小さな山国ではなく、その向こうにある帝政ロシアとの緩衝地帯としての、広大なチベット高原であったことを雄弁に物語っている。

クチ・ビハール藩王国問題は何とか乗り切ったものの、シャブドーンの雷龍の国は、群雄が割拠し内戦状態の様相を呈していった。それぞれの藩王国のあいだで、境界や、交易圏をめぐる争いが頻発し、国力はますます低下していった。そこでもう一つ英国とのあいだに領

土紛争が起こった。ドワール戦争の勃発だ。

ドワールは、英国が支配しているアッサム地方に接するブータン支配下の藩王国で、この帯状の土地の領有をめぐる、両国の関係は再び悪化、国境での小競り合いが続いた。

1864年、戦争に突入したが、ブータン側が敗北、領土利権を英国に譲渡し、毎年一定の補償金を受けとることで決着した。

この戦争はブータンの中央政府をますます弱体化させ、ブータンは事実上、ペンロップと呼ばれる二人の僧侶出身の地方行政官によって二分されてしまった。パロ・ペンロップとトンサ・ペンロップという“二つの龍”の時代の到来だ。トンサのペンロップは人口の多い中部と東部のブータンを管轄し、パロのペンロップは農産物の収穫の良い西部ブータンを勢力下におさめ、インドとチベットに通ずる重要な交易路を押さえていた。

19世紀後半において、この二つの大政治勢力にとってもっとも重要な外交的関心事は、清国に支配されたチベット、およびインドに居座った英国とどのような関係を持つかであった。

当初は孤立主義願望の名残で、両派ともいずれの側にも肩入れすることを避けていた。しかし19世紀の終わり頃にはこの種の“不関与等距離外交”の継続は困難となり、どちらかの外部勢力と提携するようになった。

トンサのワンチュック家と、同じパロの豪族だがペンロップとは対立関係にあったドルジ家は、英国を選択した。これに対し領内のチベット交易のルートから財源を得ていたパロのペンロップは、親チベット、親清国政策を取った。

両者の政治的運命の明暗を際立たせたのが、インドからやってきたチベット遠征隊である。1903年から4年にかけて、首都ラサまで進攻した。このときトンサの地方太守（ペンロップ）ウゲン・ワンチュックとワンチュックの支持者パロのウゲン・ドルジは自らも出兵、英国遠征隊を支援し、英国の信任を得た。特に1905年の英国・チベット条約締結交渉では、交渉の仲介役として英国に有利な条件を引き出した。一方地方太守は、もっぱらチベットの反英国派を支援した。これが引き金となり国内でも政治的力を失い失脚、チベットに亡命した。

ウゲン・ワンチュックは、コルコタに招かれ、英国から“インド帝国司令官”の爵位をもらった。チベットの脅威を回避するための英国との提携策の果実だ。ブータンはこれによってチベットのみならず、以後、英国のブータンへの領土侵害と内政干渉を封じることに成功を収めた。

トンサとパロのそれぞれの地方太守の小国ブータンについての地政学的状況の認識の違い、それがその後のブータンの政治体制のあり方を決定付けたのである。

国の安全保障を勝ち取ったトンサのペンロップ、ウゲン・ワンチュックは1907年、宗教と世俗の双方の評議会と国民代表の全員一致の支持で、世襲の国王に選ばれ、シャブドーン以来の化身制度は廃止された。

この世襲君主制のもとでは、大僧正は宗教の最高指導者の地位を継続するが、世俗をつかさどる国王が絶対的権力を持つ。ブータンのジグミ・シンゲ・ワンチュック現国王は、この世襲王朝の四代目である。

第三章 中世からの跳躍、20世紀後半へ ―その地政学的事情―

ワンチュック家が掴んだ「領土の安堵」

安全保障の視点からいうとブータンは、地形的に難しいところに位置している。周囲を大きく、強大な、そして隙を見せると攻撃を仕掛けかねない国々にはさまれている。このように国の進路が、他国の存在に大きく左右され易い状況を、国際政治学の世界では、「地政学的に厳しい」という。

ヒマラヤ山中という特殊な空間にあって、小国ブータンは、建国以来、周辺の脅威にさらされながらも領土を保全し、生き残ってきた。「地政学」は、彼らの宿命である困難な地形的条件と、その中で編み出したたまたかな戦略、との因果関係を解明するキーワードだ。

ここで「地政学」とは何か？について触れておかねばなるまい。地政学とは「政治現象と地理的条件との関係を、研究する学問。19世紀のドイツで生まれた」。手っ取り早い説明はないものかと、広辞苑を引いたらそう書かれていた。

それには違いない。だが若干の補足説明が必要だ。地政学のいう“地理的条件”とは単なる自然環境ではない。風土によって培われてきたその土地の人々の、気風や、行動原理も含まれている。

そういう見方をすると、孫子の兵法は、地政学の優れた古典だ。孫子は「上兵は詭道なり」と言っている。兵法の極意は、武力もさることながら、情報や心理作戦で相手に勝つことだという意味だ。その点では、“軍事小国”の山の民、ブータン人は、調略に長けており、鋭い地政学的センスの持ち主だ。

「疾きこと風の如し、静かなること林の如し、侵攻すること火の如し、動かざること山の如し」これは戦国武将、武田信玄の軍旗、“風林火山”に書かれた孫子の兵法の一説だ。ブータンの政治史を読むと、彼らは「動かざること山の如し」の“孤立主義”と「疾きこと風の如し」の“詭道”の双方を、周囲の地政学的状況の変化に応じてやっている。

臨機応変、まさに“風林火山”の軍略だ。

さて、第二章のブータン史の続きである。ブータン初の政教分離の世襲王朝、ワンチュック家はチベット侵攻に協力した代償として、英国から内政不干渉の約束を取り付けた。これは、孫子流の“詭道”の偉大な成果だが、ここで伝統的な“孤立主義”に復帰した。

以下は、1907年、初代ウゲン・ワンチュック国王と英国のインド総督との間で結んだ二国間協定だ。

内容は、①英国はブータンの内政に一切関与しない、②その代わり外交については、英国の助言を受ける、③英国人のブータン移住は認めない、④隣国の二つの藩王国、シッキムとクチ・ビハールに英国が関与することについては、異を唱えない、などだ。

この条約によって、英国はブータンの外交を握り、清国の支配下にあったチベットとブータン同盟の可能性を完全に封じた。一方ブータンは外交権を英国に渡すことによって、イン

ド亜大陸とヒマラヤ山脈南側の藩王国の中で、ただ一カ国、植民地主義の波を食い止め、孤立した主権国家としての地位を保全した。

英国はなぜそれで納得し、植民地化しなかったのか。ブータンという国土そのものに大きな魅力を感じていなかったからだろう。ブータンはこれといった資源もない、余りにも険しい山国だからだ。

当時、英国はチベットに影響力を拡大、帝政ロシアに対抗する緩衝地帯にしようともくろみ、インドからヒマラヤ越えの戦略道路建設のルートを探索していた。ブータンには、中世以前から、チベットへの交易路があった。

しかしいずれも険しい山道で、車の走る道路に拡張することは、まず地形的に不可能だった。そこで英国は、チベット道建設のルートとして隣の藩王国シッキムを選んだ。これが、ブータンがインドと境界を持つヒマラヤ国々のなかで、一カ国だけ独立性を保ち続けた理由だ。

初代王は、英国から「領土安堵」のお墨付きを取り付けた後は、もっぱら内政に取り組んだ。依然として力を持つ大僧正（ケンポ）の率いる宗教界や旧領主勢力との利害調整だ。生き仏の化身相続を排し、血縁の男系による世襲王朝を作ったとはいえ、もとをただせば仏教的権威を持たない地方太守であり、王家の正統性確立には時間が必要だった。

1926年、初代王は死去、その子であるジグメ・ワンチュック王が世襲王朝として初めての跡目を継いだ。二代目王は、外交は孤立主義路線、内政は17世紀シャブドーン時代以来の封建制を踏襲した。彼の治世中の世界は大恐慌や第二次大戦など激動の時代だった。だがブータンは大混乱の世界の圏外にあり、大国の介入もない平穏無事な時期だった。

米国に始まった大恐慌は、たちどころに他国に波及し世界同時不況をもたらした。だが、貨幣経済が未発達で、物々交換の自給自足経済を営むブータンは埒外だった。平坦な大陸と海が主戦場だった第二次大戦も、ヒマラヤの小さな山岳国家ブータンの存在など、忘れたかのように通り過ぎていった。

この頃のブータンはまさしく外部から隔離されたシャングリラ（桃源郷）だった。ヒマラヤの国境の王国の中で、この国だけが外界との関係を絶ち、近代化とか反英・民族主義などの政治思想とは全く無縁だった。

近隣諸国との接触を保っていたのは、ワンチュック家やドルジ家のような少数の豪族やインドやチベットとの交易に携わる一握りの貿易商に限られていた。北のヒマラヤの氷雪や南の亜熱帯林を越えて、外部から訪れる人も稀で、それも短期滞在しか認められなかった。国民は外の事情に疎く、また為政者は、近代化などブータンの平穏な政治形態と自給自足経済にとって無用の思想と見なしていた。

1947年、隣の大国インドが英国のくびきを脱し、独立した。第二次大戦の副産物でもあった。インド政府は、直ちに民族自決の観点から「ブータンは独立国である」と声明した。

1949年、両国関係を規定する条約が結ばれた。19世紀末のドワール戦争の戦利品として英国がブータンから租借したわずかばかりの土地をブータンに返却した。インドの民族自決理念の発動らしきものは、それだけだった。新条約は1907年、初代のウゲン・ワンチュック王が、英国と結んだプナカ協定と同じ内容、つまり「内政干渉は一切しないが、外

交はインドの指導を受ける」であった。

ブータンが孤立主義を継続する限りは、それでよかった。なぜなら孤立主義とは外に向かって積極外交を行わないことであり、インドの指導を受ける場合などないと思われていた。

「太平の 眠りを覚ます 毛沢東」

1952年、先王は死去、王位は息子のジグメ・ドルジ・ワンチュックに継承された。この三代目の王は、インドと英国で教育を受け、チベット語、英語、ヒンドウ語を流暢に話す外国通でもあった。彼が即位する三年前、すでに国を取り巻く地政学的状況の大変化の予兆が現れていた。

やがてそれは、閉ざされた平穏なブータンを根底から、揺さぶる大事件に発展していった。三代目の王は“ブータン近代化の父”と称えられている。歴史に“IF”はないとはいえ、地政学的転機がなかったら、この称号もなかったに違いない。

実際、王は二十年間にわたる治世の全てを、鎖国から開国へ、封建制から近代国家へ、停滞から開発へと、ブータンの進路の180度転換の大事業に捧げた。

事件の震源地は北京だった。1949年、中国本土を掌握した毛沢東主席率いる中国共産党軍は、北京放送を通じて、チベットは中国の一部であり、チベット人を外国の帝国主義者から解放するために、チベットを目指して人民解放軍が進軍するであろうと発表した。

危うし、チベット。ダライ・ラマ14世は、その時の状況をこう記している。

「1950年10月、恐れていたことが現実となった。川を超え、8万の人民解放軍がチベット領内に侵入したという知らせがラサに入った。中略。斧は振り下ろされた。ラサの陥落は時間の問題であった。中略。チベットの自由に対するこの脅威は世界の注目を集めた。イギリスに支えられたインド政府は、中華人民共和国に対し、侵略は平和の為にならないと抗議した。

チベット政府は国連に仲裁に入るよう訴えた。しかし伝統的孤立主義を守り続け、国連の一員になろうともしなかったチベットに、国連から送られた電報は悲しいことにならぬの功も奏さなかった」
(ダライ・ラマ自伝から)

このあと、中国・チベット協定で、ダライ・ラマ政権に一定の自治権が与えられたことにより、ヒマラヤの緊張は一次沈静化した。しかし、チベット全域におこった反中国暴動を契機に、情勢が一変、中国を潜在的脅威と見なしているインドは、ヒマラヤの国々のみならず、自らの国の安全保障危機と受け止めた。

チベットの対中国反乱軍はブータンの北の国境に近い地区にも拠点を築いた。それを口実に中国はブータン領に進攻するのではないかと、との危惧が持ち上がった。

インドのネルー首相が、ブータンを訪問したのは、ちょうどその頃だった。1958年、首相と国王は、両国政府が取るべき政策を協議した。

ブータン・インド首脳会談は、今は空港のあるパロ県のゾンで開かれた。ガイドのジェルミさんが興味深いエピソードを、語ってくれた。

「ブータンの国土に、初めて自動車というものが入ってきたのが、その時なのです」と。
「だって道路がないのに、どうやってインドから運んだのです？」と私。
ジェルミさんの、話は以下の通りだった。

ネルー首相と同伴した娘のインデイラ・ガンジーさんら、百人以上の大使節団は、ロバの背と荷車と、そして徒歩でやってきた。インド領のダージリンにあるカリンボン経由で、まず「ハ」に入り、そこからパロまでやってきたらしい。「ハ」はワンチュック王朝の盟友、ドルジ家の拠点だった。「ハ」はブータンの西の谷間にある古都で、領主だったドルジ家は、ここから山越えてインドに抜ける交易路を抑え、カリンボンにはブータン・ハウスと呼ばれる交易の館を持っていた。

数日ばかりでたどり着いたネルー一行は、ロールスロイス一台を王への贈り物として持参した。当時、ブータンには自動車はなく、車の通る道もなかった。一台の車を解体し、部品ごとに荷車に載せ、苦勞して運んだ。現在、パロ空港のある川のほとりの平地でロールスロイスは組み立てられ、王と首相は試乗した。

ネルー首相はジグメ・ドルジ・ワンチュック第三代国王に対し、ブータンの孤立主義政策をやめることを促し、見返りにインドは経済援助をする用意があることを表明した。特に強調したのは、インドからブータン中西部を結ぶ自動車道路の建設で、それは両国にとって、軍事的、経済的に大きな意義を持つことを訴えた。

ロールスロイスの初乗りは、そのためのデモンストレーションだった。このときブータン王は即答を避けた。チベットの出来事は、国の安全の脅威であることは認識していたが、インド側に付くことによって、中・印両大国の衝突に巻き込まれることを心配したからだ。

だが、こうした躊躇を吹き飛ばす決定的出来事がチベットで起こった。1959年、ラサで中国に抗議する大規模な大衆蜂起が起こり、それがチベット全土に広がった。中国軍は徹底的な武力行使を行った。混乱の中でダライ・ラマは、ブータンに国境を接する東の町に逃れ、そこからインドに亡命した。

チベット人とチベットの仏教施設に対する武力攻撃は、信心深いブータン人に衝撃を与えた。ブータンの有力な一族と姻戚関係にある家族も含め、多数のチベット人難民がヒマラヤを越えてブータン領内に押し寄せてきた。中国版の新しい地図には、ブータンの一部が中国領として印刷され、ヒマラヤの小国に対する中国の領土的野心をちらつかせた。

王は決断した。中世ブータンの伝統的な孤立主義外交を放棄、インドとの同盟を選択したのである。

“ブータン維新”、未開社会からの離脱

ブータンの歴史には、いわゆる「近世」というものがない。物々交換の自給自足の村落の上に築かれた、未開で荒削りの封建制から、いきなり近世に突入した。近世とは封建時代か

ら近代への過渡期をいう。商業資本の台頭や、官僚制の整備など、主従関係を基盤として構築された封建国家体制を、内から突き崩すエネルギーが発生する時代のことだ。日本では江戸時代がそれに当たり、やがて明治維新の近代へと受け継がれる。

1960年、インドへの開国を契機に第三代国王の行った一連の近代化政策はまさしく、王の主導する「御一新」だった。それ以前のブータンは世界から隔絶され、一部の特権階級を除けば、社会構造、価値観、生活スタイルは、1500年前の先祖たちと余り変わらなかった。

国連開発計画のブータン駐在、ステファン・プリズナー氏は、次のように記している。

「それ以前のブータンの人の大部分は自給自足の農民で、数エーカーの農地と隣接する森から生ずる生産物への依存で、生計をたてていた。若干の余剰は物々交換に廻された。

彼らはお金というものを知らなかった。車の走る道路もなく、全てはロバで運ばれていた。

それぞれ二人の医師がいる病院が四つと診療所が数箇所、ハンセン病患者の隔離施設がひとつ、これがこの国の医療施設の全てだった。疫病の流行で、村が全滅することもあり、1960年代の平均寿命は38歳だった。

このような状況下では、教育は贅沢で生存には不必要なものともみなされていた。1950年代の終わりには、全土で小学校がわずか11、生徒は440人しかいなかった」

(『Gross National Happiness』収録の論文、「Bhutan's Vision of Development and its Challenges」)

空港のあるパロから首都のティンブーに抜ける険しい自動車道の脇にいくつかの村があった。溪谷沿いの傾斜地を切り開いた段々畑のある古い村だ。土や漆喰で固めた家の土台や、崩れた石垣が残っているだけで、人の気配のない廃家が何軒も見える。

ハンセン病の蔓延で、棄てられた部落の跡だった。ブータンのハンセン病は1997年に制圧された。ガイドのジェルミさんが、面白いエピソードを教えてくれた。

「ハンセン病に罹ったお坊さんがいた。この方は、瞑想の生活に入り悟りを開き、病を克服した。村から村を歩き、患者のために祈祷し、絶望しなくてもいいと励ました。60年代に入り、政府の近代化政策が始まり特効薬が配布され、最盛期には四千人もいた患者の治癒に当たった。患者の出た村には、僧侶たちの加勢も仰いで説明を徹底的にやり、社会人として生活しながら、病気を治せるように計らった。村人も理解し、差別もなくなった、と聞いています」と。

パロとティンブーの山の中にあった昔の隔離施設は、今では、結核などの一般病院に転用されているという。

近代化は確かにこの国に幸せをもたらした。今日の姿を示すいくつかの指標を集めた。

今も、人口の85%が農村に住んでいるが、近代化は僻地まで及び、全土に農業、牧畜センターがある。品種改良で農業生産の飛躍的拡大と家畜飼育環境の改善が図られた。中央銀行が設立されブータンに通貨が誕生した。

インドとの援助協定で三千キロの自動車道路が建設され、数百の橋が架けられた。

電気と電話が引かれた。所得も飛躍的に増大、2004年には一人あたり、7百ドルに達

した。医療と教育の発展は目覚しく、しかも無料だ。病院は26箇所、診療所は450箇所ある。平均寿命は、66歳に跳ね上がった。

1990年代末には、10万人の生徒が三百の学校に通い、小学校の就学率は72%、近代化以前は一桁だった識字率は47%になった。

これが第三代王の「御一新」以来の、近代化四十数年の果実だ。だが、維新前夜、開国と近代化が、この国に良い結果もたらすと見通せる人は、少なかった。しかしチベットを手に入れた中国の脅威がブータンに迫りつつあることは判っていた。しかも、第三国の支援は望み薄で、インドと手を結ぶ以外に道はないことも明白だった。

国王は、国会を召集、「外国の影響を最小限に押さえつつ、この国のかたちを徐々に変えていく」という“変身”(Transformation)を提案、きわどいところで、同意を得た。しかし、鎖国中に培われた孤立主義者の外国への警戒心は容易に消えなかった。

「近代を英語で教える」学校制度

インドからの援助受け入れによって始まった、第一次五ヵ年計画(1960年発足)は、開発地域を現在空港のあるパロ渓谷に限定、他の地域にインド人やネパール人の外国人労働者が、大量に入ることを極力抑制する政策がとられた。

国王の近代化を目指す公共政策の大転換について、ブータンの政治エリートや国民は次第にそれが、国の将来に大きな意味を持つことがわかってきた。とりわけ、インドで教育を受けた若いエリートブータン人に支持され、彼らは国に戻り行政職として王を支えた。

第三代王が手がけた近代化政策は、三つの分野にわたっていた。農地改革、教育改革、経済開発計画で、農地改革は開国以前にすでに着手されていた。

社会改革の主眼は不平等の是正で、①小作人の廃止と耕作用の土地の供給、②古代からある地主や領主に対する無料の労働奉仕制度の撤廃、③地租の物納から、現金納税への切り替えだった。しかしこの税金はほとんど名目的なもので、生産物の四分の一を領主、僧院に物納していた封建時代に比べ、農民の負担は大幅に軽減された。

教育改革は近代化への不可欠の社会投資であるとの認識から、11年の教育制度が実施された。初等が5年制、中等が3年制、高等が3年制で、80年には英国のパブリック・スクールを念頭に置いた11年生制の英才教育機関が設置された。

ブータンの教育の特徴は、ほとんどの教科が英語で教えられていることだ。第三代国王がインドと英国で教育を受けた国際派であるという事情もさることながら、この国が教育の使用言語として英語に頼ったのは、もっと切実な事情がある。

教育設備の経済援助は全てインドから出ていること、教師はインド人が多いことがあげられる。しかし、もっと本質的な問題点は、近代文明の源が欧州であることから、国語のゾンガ語に近代化や発展に関する語彙が少ないからではなかったのか。

維新前夜の日本の近世では、蘭学事始に見られるように欧州の単語の集中的な日本語訳が

行われたが、中世からいきなり近代入りしたこの国には外来単語の自国語化という準備期間はなかった。

ブータン政府は、いずれかの時代に、教育言語の国語化を行うといつているが、それはいつのことか、判らない。エリートの間では、そのような手間をかけるより、英語を使ったほうが、手っ取り早いという風潮が強い。

経済開発計画はインドの援助申し出を受け入れた1960年からスタートした。五カ年計画は、これまで（2005年まで）九次にわたって更新されている。第一次五カ年計画は、主にインド政府によって策定された。援助の戦略的目標は、インドの安全保障をおびやかす中国から身を守ることであり、そのための緩衝地帯としてのブータンを掌握することだった。

インド側が最も重視したのは、インド国境からブータンの中心部に向かう戦略道路の建設だ。インドに対中国防衛の軍事基地をつくり、そこに物資を運ぶ道路である。チベットとの通商関係を絶ち、経済のインド依存に踏み切ったブータンにとっては、これは欠かすことの出来ない生活道路になった。

首都、ティンブーから、南部のインド国境プンツォリンを結ぶ国道一号線が、二年足らずで完成、ブータンに初めて自動車が走った。道路脇には、電線と電話線が引かれた。小規模の水力発電所も建設された。郵便制度も導入された。インド人教師が招かれ、学校が建設された。ブータンの文明開化、光はまさしく1960年代のインドからだった。

開国の副産物 — “内なる脅威” ネパール人問題 —

近代化の父、第三代ジグメ・ドルジ・ワンチュック王が選んだ外交政策の主要な窓口は、ニューデリーとニューヨークだ。インドに向かって開国したこの国にとって、ニューデリーが外交の拠点であることはいうまでもない。

国王はニューデリーに加え、ニューヨークにも拠点を置き、独自の民族属性を持つこの国を世界に認知してもらうことを考えた。それは1971年、インドの支援もあって実現した国連加盟である。

国連加盟はチベットの悲劇の二の舞を演じないための、国の存在の安全装置だった。チベットは主権国家として認知されない国連非加盟の曖昧な政治実体であったために、中国に吸収されてしまった。米国や国連総会に救いを求めたものの方策尽き、このヒマラヤの仏教大国は、滅亡した。国連に加盟しておけば、チベットのように滅ぼされることはない—

国王はそう考えたのである。

国連に国の生存を担保したものの、ブータンは二国間の外交関係には慎重だ。インドを除くと、国王は、国際政治の主要な役者、アメリカ、ソ連、中国や欧州の大国には、深くかわらない政策を採った。それは、どこかの大国と密接な関係になると、大きな争いに巻き込まれるとの小国の知恵がもたらす伝統的な“非関与”政策の表れだ。

今日、日本、スイス、クエート、タイ、スウェーデンなどとは外交関係があるが、超大国

アメリカとは正式な国交はない。

ヒマラヤのかつての仏教王国ネパールとは、インドより十年以上も遅れて、四代目王の時代ようやく外交関係が結ばれた。ブータンとネパールは難しい関係にある。ブータンの人口の三割以上は、ネパール系住民といわれる。この国が近代化するにつれ、ネパール系住民問題は、国家安全保障の“内なる脅威”と認識されるようになった。

ブータン領内にネパール人が、住むようになったのは、19世紀末のインドの英国植民地時代に遡る。ブータンとネパールは、近くに位置するが、国境は接していない。英国はブータンの南隣に位置する、ダージリンとアッサムで茶を栽培していた。人口過剰のネパール東部に目をつけた英国人は、多数の労働者を募り、茶畑で働かせた。

ところがネパール人労働者の中には、北に隣接するブータンの亜熱帯低地に目をつけ越境して、無人のジャングルに入植してしまう者もいた。低地に住む習慣のないブータン人は、当初、この移民には無関心だったが、20世紀前半には、そこに住み着き農業に従事する越境ネパール人が目立って多くなった。

そこで1958年、啓蒙家の第三代国王は、彼らの居住権を追認、ある一定の資格を持つものには国籍を与え、その他の移住者には外国人居住者として登録させることにした。これで、ネパール人問題は一応の決着がつけられたかに見えたが、その後もネパール本国から、インド経由でブータンに密入国するネパール人は後を絶たず、問題の解決は第四代王の時代まで先送りされた。

ネパール人問題が、深刻化し国家安全保障上の重大問題として、再認識されたのは1980年代に入ってからである。外国の援助で近代化開発計画が軌道に乗ったブータンでは、その頃までに、一人当たり国民所得はネパールをはるかに上回っていた。

人口爆発で貧困から脱し得ないネパール人から見れば、ブータンは日当も高く、教育・医療はブータン人・外国人を問わず無料であり、ネパール人の不法移民は増加の一方だった。

このため1988年、全国レベルで住民の実態調査が行われた。その結果、南部では住民の半数近くはネパール系移民でしめられ、その中に多くの国籍を持たない滞在者がいることが明るみに出た。ブータン国籍、もしくは1958年実施の外人登録のないものは、不法滞在者として、国外退去命令が出された。これがネパール系住民との間に激しい民族摩擦を起こすにいたった。

平和な桃源郷と見なされ、世界のマスコミに注目されなかったブータンは、この事件がきっかけでにわかに外国の新聞やTVに頻繁に登場した。皮肉なことにブータンの世界的知名度を上昇させたのは、このネパール人との間で、流血事件にまで発展した国外退去騒動だった。

ブータン南部では90年代に入り、大規模な反政府デモとテロが起り治安状況は悪化した。政府軍との戦闘で、ネパール系住民の本国への逆流現象も起り、国連はネパール東部に難民キャンプを設置した。

「ネパールには、ブータンを追われた十万人のネパール人難民がいる。このうちの90%は、国連の難民救済キャンプに収容されているが、解決の糸口はいまだに見つかっていない」2005年版の、米国CIAの世界ファクト・ブックのブータン編には、そう書かれている。

「明日は我が身？」 ブータン人の“シッキム・ショック”

なぜ、現代ブータンが、ネパール人問題に強くこだわり続けるのか。それは、ヒマラヤ仏教王国の一角を占めてきたシッキムの滅亡が、ブータン人の心の深層にある強烈な“国家保存本能”を掻き立てたからだ。この仏教国は、異教徒のネパール人の大量移住によって、人口構成が変わってしまい、それがもとで国が崩壊した。だから、ブータン人は「明日はわが身ではないか」と恐れるのだ。

シッキム王国の生い立ちは、ブータンとそっくりだ。15世紀、チベットからやってきた仏教徒が建国した国で、王室は親戚同士でもある。ところが1975年、当時人口21万人だったミニ王国の王制は廃止された。そして住民投票の末、圧倒的多数の支持でインドに併合されてしまった。

シッキム滅亡の遠因は、英国だった。19世紀末、チベットへの道を模索していた英国はシッキムを候補地に選び、領内での道路の建設権を獲得した。英国は道路建設の為の労務者という名目で、隣国のネパールから大量の非仏教徒を移住させた。仏教徒の王は猛反対したが、英国は軍事力をちらつかせ、強行した。

この結果、人種的バランスが崩れ建国以来の主流派だったチベット系の仏教徒の発言権が低下していった。有機体である国を人間に例えるなら、英国の永久支配の陰謀で大量の血液の人れ替えが行われ、別人にされてしまったようなものだ。

四代目のジグメ・センジュ・ワンチュック現国王が即位して、わずか三年後の1975年シッキムが崩壊、それ以来、ネパール人の大量移住に悩むブータン人の心中は、穏やかではなくなった。前節で述べた新国王が取った1988年の“不法滞在ネパール系居住者”の国外退去命令と、その後の国際緊張は、こうしたヒマラヤ特有の民族移動が引き金だった。

ところで、インドに植民地帝国を作った英国が藩王国と名づけたヒマラヤの小王国はいずれも民族構成の複雑な地域だ。民族移動が、国のかたちを変えてしまう。シッキム然り、ネパール然り、ブータンも例外ではない。

ブータンの住民は、四つに分類できる。第一は、9世紀から17世紀にかけてヒマラヤ越えてやってきたチベット系の人、第二は東ブータンに南からやってきたインド・モンゴロイド系でミャンマー人と同じ先祖を持つ人々、第三は、この国の先住民といわれるレプチャ、ドロツパといわれる山岳の部族集団、そして最後にネパール系のブータン人だ。この人々はせいぜい三世代しか住んでいない人たちで、よそ者扱いされている人も多い。

ブータンはこの四つの民族分類の中で、多数をしめるのが仏教を持って移住してきたチベット系民族だ。

チベット系ブータン人は社会的にも政治的にも主流派を占めているが、次に人数の多いインド・モンゴロイド系の東ブータン人は、仏教文化に完全に同化し、この国の潜在的な分裂勢力にはなりえない。この人たちは非チベット系の方言を話し、独特の伝統や、儀式を持っているが、これは国教である仏教文化の様式に追随するもので、むしろブータン国のアイデ

ンティティの一つの基礎になっている。

ところが、ネパール人の場合は、民族的事情は全く違う。彼らは新しい移民であり、仏教とは相容れないヒンドウ文化と価値観を持っている。そして大部分の人は、ブータンの伝統とか社会、あるいは政治集団に加わりたがらない。ネパールやインドと家族や、カーストを通じて関係を維持している。インドの政治価値である共和制を唱え、君主制に反対する政治運動も結構活性化している。

それでも近代化初期の第三代王の時代は、ネパール移民対策は比較的寛大だった。この啓蒙家の王は、インドからブータン南部に入り込んだネパール人に、一定の条件の下で国籍、もしくは滞在許可証を与えた。彼らを未開発の南に隔離して住ませ、農業や手工業を通じて僻地開発をさせるのが、目標だった。

だが、この目論みは裏目に出た。その後、二千万人という過剰人口を抱えるネパール本国や、インドから生活の糧を求めて、ブータンを目指す不法入国者が急増したのだ。ネパール発、ブータン行きの人口圧力は凄まじい。

この国の人口は2001年政府発表では、69万九千人だ。ところが前出のCIAファクトブック2005年版には「いくら小さく見積もっても人口は81万人」と記されている。これはインド情報に基く推計だろう。数字のずれは、膨れ上がるネパール人移住者を、どこまで居住者として認知するかに掛かっている。

第四代、ジグメ・シンゲ・ワンチュック国王は、こう述懐している。

「1953年、南ブータンのネパール人は、インドの国民会議派と連携、議会党を結成し、それが内乱に発展した。これがきっかけで、大量の不法移民が押しかけてくることはわかっていて。だが、私の父は寛大な心の持ち主だった」と。(『So Close to Heaven』の著者 Barbara Crossett の第四代王との会見記から)

ジグメ国王は1975年の、シッキム王国のインド併合を深刻に受け止め、ネパール人に対してとった父王の路線の180度転換に踏み切った。以後ブータン移民は制限され、不法滞在者は国外退去の強政策が取られた。大地の子であるブータン人仏教徒が、ネパールからのヒンドウ移民の洪水に溺れ、国を失った“もう一つのシッキム”にならないための、国家戦略だった。

以上が、封建制から一足飛びに20世紀後半に突入したブータン近代化の歩みだ。第三代王はインドへの開国、国連加盟によって、まず国の生存を国際的に担保した。郵便、電気、電話、自動車、貨幣を歴史上初めて導入した。外国の援助をうまく利用するしたたかな経済計画で、この国に数千キロの道路網を作り、そして教育と医療は無料というヒマラヤの小さな福祉国家を建設した。

だが、近代化の過程で予期しない副産物が発生した。ネパールの人爆発のもたらす外圧で、この国の新しい脅威として浮上した。ブータンはいかに生き残るか？それには、己の持つ文化、伝統、宗教をしっかりと見つめ直し、ブータン民族の属性の再確立が不可欠である。第四代王はこうした認識の下に、国家近代化戦略の大改定に着手した。それが次の章のテーマだ。

第四章 ブータン発、幸福の政治・経済学 — 「GNH」とは何か—

英明君主の唱えた「国民総幸福」

「GNH」という三文字が、いま、世界の開発経済学者の注目を集めている。

「GNH」(Gross National Happiness) — 日本語に訳せば「国民総幸福」、魅力的な響きを持つキャッチ・コピーだ。「GNP」(国民総生産)をもじったもので、物の豊かさよりも、心の豊かさの方が大切だというメッセージだ。ブータンでは国民的合言葉になっている。

製作者は現国王、すなわちジグメ・シンゲ・ワンチュク第四代国王の若き日の作だった。彼は「ブータンにとっては、GNPよりGNHが大切だ」と言い出し、独特な“幸せの政治・経済倫理学”を、国家戦略の基本哲学に据えた。

どのようないきさつで、このアイデアに到達したのか。国王と親しい国際エコノミスト、西水美恵子・元世界銀行副総裁に、そのいきさつを尋ねたことがある。

「旅の途上で、閃いたのだ」と彼女はいう。鎖国を解きブータンに近代化の道を開いた第三代王が1973年急死した。十六歳で即位した青年国王は、まず前国王から引き継いだ開発計画改訂の準備に取り掛かった。そのために全国を行脚した。ロバの背と徒歩だった。“王の足跡のなかった村はない”と語り継がれるほど歩き回り、村人と話をした。

「ある日、つつじとシャクナゲの大木がそびえる山間を歩きながら、側近に語った。“わが国の民は貧しくとも、心は豊かだ。近代化がもしもこの豊かさを脅かすときが来たら、わが雷竜国は滅びる”と言った。まさに、今、日本その他の先進国が抱え、悩みぬいている数々の病を先見した洞察だった」西水さんに聞いた若き時代の国王秘話だ。

以来ブータンはGNHを、改革と発展の国家戦略に定め、今日に至っている。GNHの思想とは何か。かいつまんで紹介すると以下の通りだ。

一、戦略目標は国民により多くの幸福感を供給することだ。物質的な欲求を満足させることにも留意するが、それよりも精神的な幸福感を大きくする社会的、文化的、自然的条件を整えることに主眼を置く。

二、経済成長は、幸福を達成する合理的手段であることを、GNH哲学は否定していない。だが、それは幸福実現の様々な手段のほんの一部に過ぎない。逆にGNPの概念そのものに、環境破壊など人々の幸せにマイナスをもたらす要素も含まれている。富の増加は、必ずしも、人間の心の幸せに繋がるかどうかもわからないと認識している。

三、幸福の鍵を握るものは何か。たしかにGNPの増加によって、衣、食、住などある程度の満足を得ることも幸福の一要素ではある。しかしそれが達成された後に、人間の幸せの鍵を握っているのは、GNPとは無関係の非物質的満足感だ。情緒、感情、あるいは宗教的な心の満足の増進が大切だ。

四、世界の開発経済学の主流は、GNP思想に偏るあまり、人々の幸せに満ちた生活を可能にしてくれる自然環境、精神文明、文化の伝統、家族や友人などとの絆である共同体まで破壊し、人間を不幸せにしている。

五、仏教の教える自我の抑制と幸福感は、完全に正の相関関係がある。自我を抑えなければ、物欲は無限に拡大、たえず欲望の満たされぬ苛立ちが続く。それだけでなく、この身勝手な欲は、社会の不均衡と自然破壊を引き起こすし、やがて破滅する。

三十年前、若き国王が提唱したGNH思想のエッセンスだ。これはアジアに近代化と西欧化をもたらした17世紀以降のヨーロッパの合理主義に対する批判とであり、挑戦でもある。

西欧が版図をアジアに求めたことによって、アジアの国々は近代化と西欧化を促された。これに対し非西欧社会は、どんな対応をとったか。サムエル・ハンチントンによれば、そのやり方は、三つだった。①近代化、西欧化双方を拒否する鎖国主義、②近代化と西欧化の双方を受け入れたトルコのケマル主義、③近代化は取り入れるが、文化の西欧化は拒否、あくまで自国の伝統文化を維持する、改革主義だ。

日本はどうだったか。ハンチントン流にいうなら、16世紀西洋と接触して以来19世紀半ばまで、①を選択、鎖国することによって、近代化と西欧文化導入を拒否した。しかし明治維新で開国した。ただトルコのように近代化するためには、西欧文化の受け入れも同時に必要とは考えなかった。そこで、③の改革主義路線を選択、西欧を範として近代化を進めたが、自国の文化や価値観、生活習慣は維持し続けた。和魂洋才だ。

「心の安全保障」としてのGNH

ブータンの近代化が歩んできた路線は、どうだったか。この国が西欧文明に遭遇したのは先代の王の1959年、元の英国植民地帝国、インドへの開国であったことはすでに述べた。近代化の父といわれる啓蒙家の先代王は、③の改革コース、つまり、ブータンの仏教文化を維持しつつ、近代化を成し遂げる路線をとっていた。

第四代王の提唱するGNHも広い意味では、③の範疇に入る。しかし先代と比べて重点の置き方が大きく変化しているところに注目したい。西欧の近代合理主義の産物である経済発展思想を批判し、物質的豊かさを目指す開発のテンポを徐々に落としている。

GNPそのものを否定はしていないが、それよりも、ブータン独自の伝統文化に根ざした“道徳的再武装”によって、国民の精神面での幸福感の充実を図ることに重点が移っている。これは先代王の近代化路線の改訂に他ならない。

国王をして、国家戦略の見直しを決意させた背景として、二つのことが考えられる。一つは1975年のシッキム王国の滅亡だった。シッキムはもともと、チベット系の人々が作った仏教王国だったが、その後、隣国ネパールから大量の移民が流入、異教徒が国民の大多数を占めるようになった。

この民族大移動は、19世紀末の英国のヒマラヤ支配の一環として実施された。多数派のネパール系住民は、仏教王国打倒の革命を起こし共和制に移行、さらに住民投票が行われインドの一州に吸収された。

仏教の兄弟王国であったシッキムの滅亡は、他国の軍事侵略がなくても、国は内側から滅

びるという安全保障上の教訓をもたらした。

国家が生き残るには、外交政策だけではなく、民族としての帰属意識を日ごろから高める国内政策が必要である。宗教、伝統文化、共同体的価値観の尊重を通じて、ブータン人であることの幸福感を増進する。そのような“内なる安全保障策”もGNHの重要な柱として位置付けられた。

罰則付きの民族衣装着用規定や、文化破壊防止の為の外人観光客の入国規制なども安全保障政策の一環であるとGNHは再定義している。

近代化路線改訂のもう一つの理由はブータンが、インドの援助で経済開発を進める過程で、市場万能主義の強者の経済学から、身を守る必要があると認識したことだ。西欧の合理主義が生んだ近代経済学は、万有引力のように地球のどこでも万遍なく効き目があるわけではない。

小国にとっては効き目どころか、経済のグローバリゼーションという大波がやって来て、沈んでしまうことがある。国王は、早くからその気配を感じ取っていた。

だが、このユニークな国家戦略は、四半世紀の間、世界にほとんど注目されないまま、ヒマラヤの幸福の試みとしてひっそりと存在してきた。

脚光を浴びた“小国の幸福学”

小国のささやかな“幸福学”「GNH」が、脚光を浴びたのは1990年代後半だ。世界の開発関係者の間で、にわかに、ブータンが取り上げられるようになった。

西水元世界銀行副総裁はいう。

「近代経済学は、効用（Utility）という個人の満足度を表す概念は持っている。しかしその満足度とは何かについては、理論的に踏み込んでいない。もちろんその満足度と幸福とどういう関係にあるのかについては考えていない。だから、“国民総幸福”なんていう唐突なアイデアは、エコノミストは無視するか、一笑に付すしか、なかった」と。

ところが、経済成長に伴う社会のひずみの激化、環境や文化の破壊が地球レベルの問題として発生、近代経済学そのものの有効性が問われるようになった。ブータンはこうした先進国の市場万能主義への反省を先取りしたかのように、自然と人間の共生経済を営んでいた。そこでブータン発の「幸福の経済学」は世界銀行やアジア開発銀行などの国際機関や先進国の途上国問題研究者の注目を集めるようになった。

理論経済学のエコノミストたちもブータンに関心を寄せはじめた。まず注目したのは、この国のGNP だった。“心の幸福”などという“奇妙な経済倫理を提唱する変な国”の経済成長率が高いことに気付いたのだ。年間5～7%の成長を継続、1988年に一人当たり国民所得が、190ドルだったが、98年には645ドルとなり、インド、パキスタンを抜いて南アジアトップになっていた。

西水さんによれば、注目に値するのは「経済成長もさることながら、環境破壊が世界的問

題として浮上するよりはるか昔から、ブータンがかなり水準の高い自然保護政策を、静かに実施していたことだ」という。

例えば、国土の半分を下回っていた森林面積が、十年で七割まで拡大させることに成功していること、外貨不足に悩んでいたのに、木材輸出をいち早く禁止したこと、長期発展計画から鉱山開発の大型プロジェクトを撤回したことなどだ。これを知ったエコノミストたちは、ブータンのGNH戦略は、政治や外国のレトリックではなく、本物であることと、わかった一という。

ブータンの40年前は、貨幣もない物々交換の自給自足だった。アジアで近代化へのスタートの最も遅かったにもかかわらず、なぜブータンが、自然保護と伝統文化の維持と、経済成長の三つを同時達成できたのだろう。

その謎を解く鍵は、GNHの中にあるはずだ。そんな雰囲気が高まる中、1998年GNPの経済学と非物質的満足感を強調するGNH哲学との接点を探る初の国際シンポジウムが、韓国ソウルで開かれた。

シンポジウムには、ブータン政府を代表してリョンポ・ジグミ・ティンレー首相が出席、「GNHの価値基準と開発」と題する基調講演を行った。その中で、首相は次のような趣旨の問題提起をした。

「幸福は人類の究極の目標であり、全ての人が幸福になれることを望んでいる。ところが、経済学者たちは、「幸福はユートピアの御伽噺に過ぎない」として、幸福の定義の作業を放棄した。幸福はそれぞれの人間の主観に属するものだから、客観的科学的である経済学にはなじまないというのがその理由だ。開発や経済発展の目標は、幸福の増進であるのに、幸福とは何かについては一切お構いなしとは、何たる逆説であることか」と。

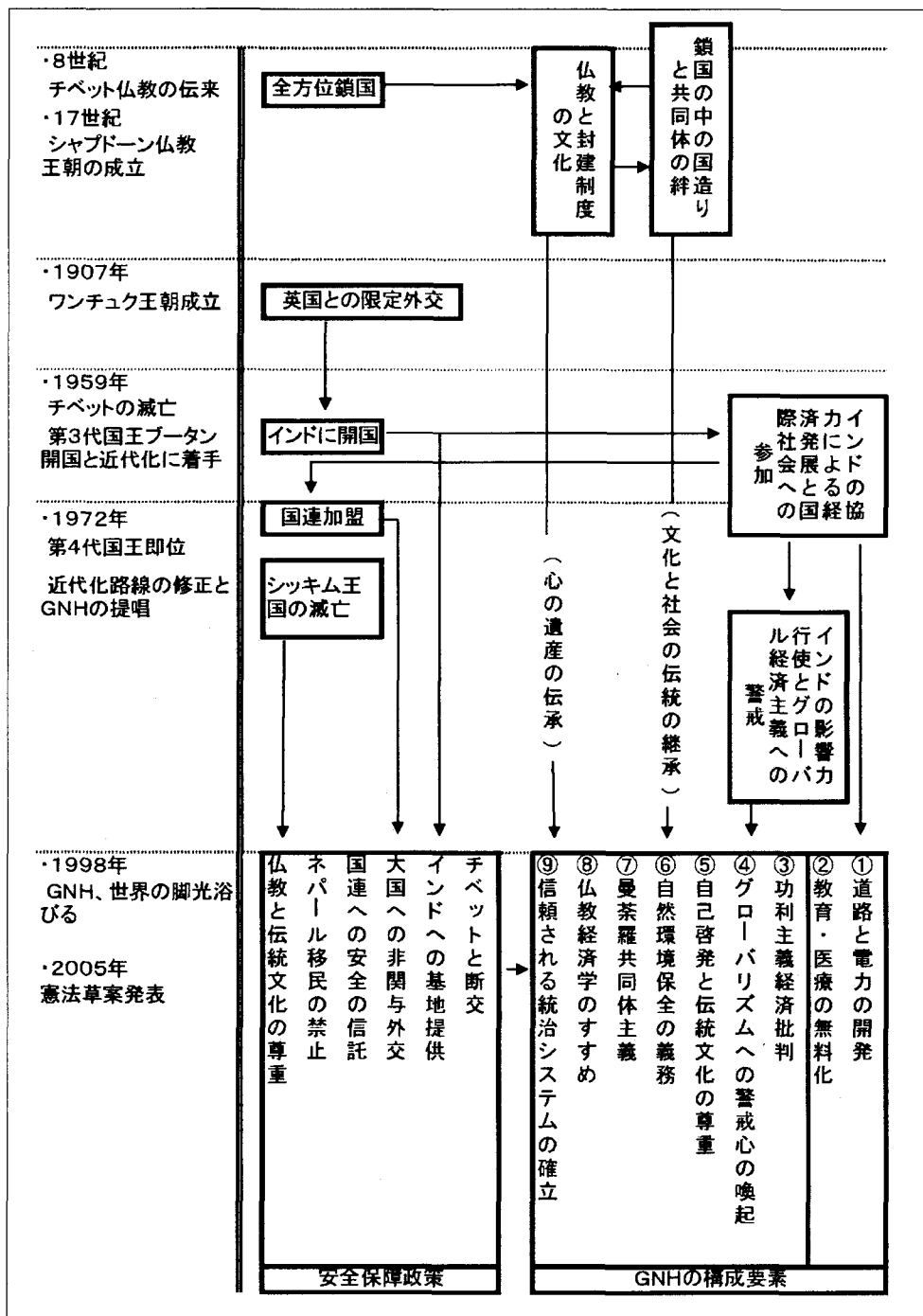
さらに首相は、GNHの国家戦略が展開しているいくつかの“幸福の構成要素”を明示した。それがいかなる歴史的、文化的、宗教的背景を持ち、ひいてはこの国の安全保障とどんな関わりがあるのかについても明らかにした。

国家戦略・GNHの系統図

このシンポジウムには国際機関の開発専門家や欧米の社会学や心理学者、それにブータンやタイの仏教哲学者などが参加した。それぞれ持ち寄った研究成果の発表がおこなわれたことにより、GNHの輪郭が見えてきた。

シンポジウムを通じて、世界に発信されたブータンの国家戦略・GNHとはどんな内容だったのか？議事録から拾ってみると、GNHは第一図が示すように九つの政策目標から成り立っている。①道路と電力の開発、②教育・医療の無料化、③功利主義経済学批判、④グローバリズムへの警戒、⑤自己啓発と伝統文化の維持、⑥自然環境の保全、⑦曼荼羅共同体主義、⑧足るを知る仏教経済学の尊重、⑨信頼される政治と統治システムの確立だ。

第1図 国家戦略「GNH」の系統図



GNHが描くブータンの国家戦略はもちろん経済の発展と国の近代化を目指してはいるが、アジアのほかの途上国の開発政策とは、かなり趣を異にしている。

第一に基本的にはブータンの歴史と文化の継承の上に築かれる。第二は、鎖国の放棄によって発生した近代との出会いの中で、“ブータンらしさ”を維持しつつ近代化への道を歩む。そして第三に、西欧文化やグローバリゼーションの弊害をわきまえつつ、経済の発展を目指すに集約される。

このような、独特の近代化戦略が、どのようないきさつで、出来上がったのか、その背景をこの国の歴史の歩みと関連づけて、問題別に整理したのが、第1図の「国家戦略・GNHの系統図」だ。

ブータン史については、第二章、第三章で紹介済みだ。この国は17世紀、チベットの亡命仏教徒によって建国された。当時の社会システムは、高原の大国チベットとヒマラヤの狭い山国の土着文化の混合した自給自足の村落共同体のそれであり、母系制社会が色濃く残っていた。宗教はチベット仏教であり、政治システムは政教一致の封建王制だった。

GNHは、このような中世封建制のもとで育まれた村落共同体の持つ伝統的価値観と仏教を、ブータン人であることの証として、持ち続けることを宣言している。これは近代化の中で西欧文明への埋没を戒めるブータンの国家戦略のあらわれだ。

ブータンに近代をもたらしたのは、1959年の中国のチベット完全支配に脅威を感じた先代の王が、北の国境を閉鎖、インド側に開国したことがきっかけである。ここでブータンはインド経由で、インド文化とそしてかつての宗主国であった英国に代表される西欧文明の無制限の流入防止に努めた。

インドに経済と防衛の援助は受けるものの、警戒心を緩めない、いわゆる「和して、同せず」の路線をとり続けた。

1973年に始まった国家戦略としてのGNH作りの過程で、インドによるシッキム併合が起こり、異民族の流入に対する危機意識が高揚した。その結果、国家安全保障政策の見直しが行われ先代の王から引き継いだ、①国連主義、②対米、中、口不関与外交に加え、③外国人観光客受け入れに踏み切った際、限られた“良質の客”に限定、④ネパール移民の拒否など、新たな安全保障策が追加された。

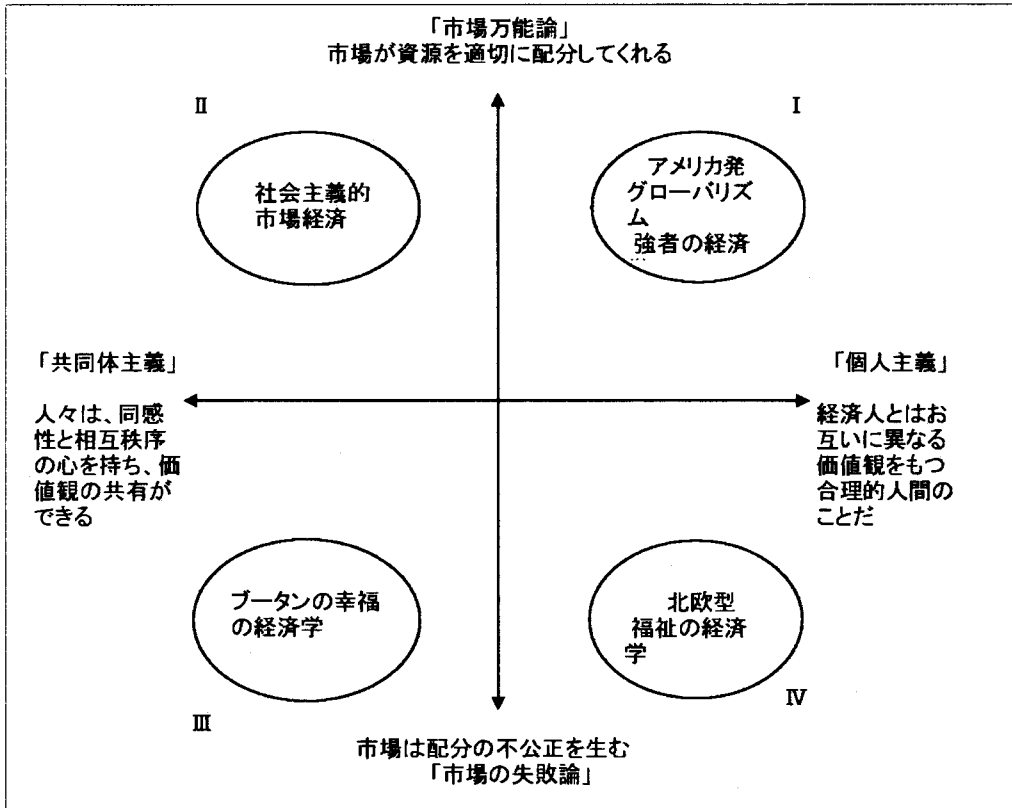
さらに、GNHの構成要素として、グローバリズムへの警戒心の導入、自己啓発と伝統文化の維持などが“内なる安全保障策”として新たに位置づけられた。

「文化は防衛の道具である。GNH思想の中でその役割を明確にしなければならない。」国王の言葉である。

図解・地球には「四つの経済哲学」がある

市場経済は人間を幸福にするのか？これはブータン発GNHのメッセージだが、20世紀末の世界経済には、この問いを真剣に受け止めざるを得ない状況が起こっていた。

第2図 地球には四つの経済学がある



経済のグローバリゼーションの進展とともに、その思想的根拠である新自由主義に、疑問を持つ人々が増えてきたのだ。新自由主義とは、自由な市場経済の下では、“最適者”が自然に頂上に上りつめることを想定し、それを人間の競争の最も文明的な形態と見る強者の経済思想だ。

1997年のアジア通貨危機や、新自由主義経済学の優等生と持てはやされたアルゼンチンの破綻などで批判の矛先は、新自由主義という思想にとどまらず、近代経済学の基礎理論にまで及んできた。

近代経済学とは、そもそも人間の営みである経済を工学的なモデルに置き換えることで構築された理論であり、人間の幸福を念頭に置かない学問だ。もっと暖かい心を持った経済学の出現が望ましい。

そのような風潮が高まるなかで、ブータンの試みは、グローバリゼーションとは、まさしく正反対の極にある、新しい倫理観にもとづく経済思想と位置づけられた。

シンポジウムの挨拶で、ティンレー首相は「GNHの発展哲学が、ブータンのみならず国境を越えて通用し、新しい視点による21世紀の地球発展の目標とみなされることを望んで

いる」と述べている。

“新しい視点”とはどういう思想的立場を指すのか。それを掴むには、世界の経済思想を分類する座標を作り、このブータンのユニークなGNHが、座標上のどの平面に位置するのかを示すのが手っ取り早い。それが第2図だ。

X軸は経済社会を構成する主体をどう見るか、二つの相反する見解を対比している。正の方向は、相互に考えの異なるバラバラの個人で構成されているとする「ホモ・エコノミクス主義」だ。負の方向は、「共同体主義」の領域だ。これは、経済社会には、物事の感じ方が似ており、しかも相互扶助の心を持ち、価値観の共有を目指す人々が住んでいるとみなす思想だ。

Y軸は経済社会における市場の機能についての見解の違いの対比だ。正の方向には、市場が資源を適切に配分すると信ずる「市場万能主義」、負の方向には、市場に任せておくと必ず分配の不公平を生むと考える「市場の失敗論」を対峙させた。

このような二対の相反する経済哲学を組みあわせると、地球には四つの経済学があるという答えが出てくる。第2図を参照していただきたい。

第I象限はエコノミストの主流派、近代経済学の空間だ。経済活動だけを合理的に追求する人間像が想定されている。これをホモ・エコノミクスというのだが、日本語でいえば経済人だ。自立した各人が、私欲を満たす「効用」なるものを求めて市場に参加することによって、必要な財とサービスが供給され、私欲は満たされる

その繰り返しで、資源の最適配分が行われ一定の秩序が達成され、活気のある社会が生まれる。これが、グローバリゼーションの経済学の基本理念でもある。

座標軸で区切られた四つの平面で、この思想と正反対の位置、すなわち第III象限に陣取っているのが、ブータンの幸福の経済学だ。市場はあてにならない。不公平と社会の混乱を生む。

それだけではなく各人が好きのように、私欲を追求したら世の中に悪徳が充満し、無秩序がはびこる。個人の物欲の追及は、ほどほどにしなければならぬ。その代わり心の幸福を満たす国づくりを目指す。ブータンは歴史と伝統のある共同体の文化を継承する。個人差はあるとはいえ、幸福の基準としての共通の価値観をブータンで確立することは、不可能ではない、と主張しているのだ。

ちなみに、第2図の第二象限に該当する経済思想はなんだろうか。多分、共同体的な平等を維持しつつ市場原理の活用で経済成長をはかろうとする中国流の社会主義的市場経済論の領域なのだろう。もっとも社会主義の平等はあくまで建前で、中国の狙いは市場経済の急拡大による富国強兵であることを考慮に入れると、すでに第一象限の経済思想の仲間入りをしていると見るべきかもしれない。

第四象限は、市場経済は理論どおりには動かないと主張する福祉経済学の領域だ。経済の中核は市場だが、市場は万能ではない。分配の不公平という社会的不正義を生み、弱者を圧迫する。このような「市場の失敗」の埋め合わせとして、政府が市場から多くの果実を得た強者から多額の税を徴収し、これを弱者に社会保障として再配分する。

これが福祉の経済学の目指すところだ。先進工業国では多かれ少なかれ、この種の社会政策が実施されているが、社会民主主義の北欧では徹底している。

「幸福を計る物差し」はあるか？

誰もが幸福になりたいと願っている。アメリカの独立宣言にも、日本の憲法にも「幸福の追求」が謳われている。ところが、奇妙なことに「経世済民」を目的とする学問であるはずの、経済学はこれまで「幸福」というテーマに取り組むことを避けてきた。「それはおかしい」と、国をあげて、経済学に文句をつけたのが、ヒマラヤの小国、ブータンだった。（前出のGNHシンポジウムのティンレー首相の基調講演参照）

なぜ経済学が、「幸福」を避けて通ったかについては、すでに述べた。経済学の数値化が進行し、「幸福」などという曖昧で客観性に欠けるものは、経済学の体系外に追放してしまったからだ。ブータンは国民の受け取る幸福の総量（Gross National Happiness）の最大化を国家目標にしている。

この戦略を世界に認知させるには、「幸福」の計量は必ずしも不可能ではないことを示す必要がある。もしそのことに成功すれば、GNHは、単なる精神作興運動ではなく、普遍性のある原理に支えられた新しい思想としての地位を獲得できる。

「幸福」をさっさと追放した経済学にしろうじて残ったのが「効用」という「幸福」よりもずっと狭い概念だ。「効用」と「幸福」との結び目はどこにあるのか？幸福の尺度を模索するシンポジウムの出席者達は、このあたりの分析からはじめた。

近代経済学の「効用」とは、人間が財を消費することから得られる満足感のことだ。個人が一定の予算の中で、どんな商品をどれだけ選ぶか、その組み合わせを作る序列を決めるとき、「効用」を目安にする。

しかし「効用」というものはあくまで、個人の心の中の満足感であり、他人の持つ「効用」とは別物だ。だから個人間の効用は比較できないし、したがって、個人の「効用」を足し合わせて、社会全体の「効用」を測定することは出来ない。

それが近代経済学の主張だ。これに対し、GNHに注目する学者たちは、このような効用学説は、経済学が幸福の追求を放棄するための言い訳に過ぎないと反論し、次のような幸福測定への方法論を展開している。

第一は、近代経済学者の言う無味乾燥な「効用」という概念に、幸福論の観点から中身を入れようとの試みだ。

近代経済学の誤謬は、豊かな生活の源泉を「効用」と見なしていることだ。豊かな生活とは市場での利己的な「効用」の追求では達成されない。経済学が想定していない、市場以外で形成される精神的な充足感が大切だ。

人間とは何か？ バラバラの価値観をもち、利己的な競争に専念するホモ・エコノミックスが、人間の全てであるとは断定できない。人々は、よき共同体の一員でありたいとの願望を持っている。現実の生活の多くの行動には、慈善とか社会奉仕など、市場の外で形成される利他的な協同行動が含まれている。

共同体の意識の強い伝統的社会では、人々は共通の感覚と共通の価値観を形成する。その

ような似たもの同士で構成される社会では、個人の幸福感の総和を求めることに意味があり、物質的満足度だけでなく、精神的満足を示す幸福量を考える意味がある。共同体の持つ「共通の喜び」が個人の幸福感の総和とほぼ等しくなる一と主張している。

第二は、主観的幸福の自己申告制度の導入だ。「幸福度を測る物差しとして例をあげるならば、例えば五年、十年後に自分の暮らしを振り返ったとき、少しずつ良くなっていると国民の大多数が考えるかどうかである」。1989年、国王は読売新聞とのインタビューでこう語っている。

これは主観的幸福を心理学的尺度で測るやり方だ。適切な質問項目を作れば、各個人が自分の人生における満足度や幸福をどう自己評価している手がかりが得られる。

客観的幸福度を、生理学的尺度で測定できるかどうかの探求も行われている。「自分が今幸福かどうか、もし脳波で測定できたら幸福の経済学は一挙に花が咲く」、前出の西水美恵子元世銀副総裁はそういう。

脳は情の動きを作る古い脳と知性の動きを作る新しい脳の二重構造になっており、この二つの脳の間を神経細胞が作る電気信号が飛び交う。それを脳波といい、その働きによって心が創り出されるといえるが、幸福度測定に応用するめどは今のところたっていない。

仏教哲学の「幸福方程式」

1998年のGNHシンポジウムの基調講演者を務めた当時の首相テインレー氏はこういった。「ブータンは物質面の発展のみならず、内面的な精神の発展をとりわけ大切にしている。開発とは、わが国にとっては、個人の啓発に帰着するのだ。自己啓発は幸福の花を咲かせる」と述べ、次のようなブータン農民の自己啓発のエピソードを披露した。

首相が東部の県知事をやっていた1980年代後半の話だ。ある優れた農民が政府の奨励で高収穫品種の米生産にはげんだところ、収穫が二倍になった。彼が模範を示したことで翌年には村人はこぞって新種の米栽培に取り組んだ。ところが驚いたことに、この模範農民は「今年は米造りを休む」と言い出した。理由をたざしたら「去年の大豊作で、今年は何もしなくても食える。一年間、仏を拝みながらゆったりとした信仰生活を送りたい」と言った。

この宗教的説話は、所得という物質的豊かさがある一定の水準を超えると、追加的幸福をもたらさないことを教えている。首相によれば、こんな話はブータンには沢山あるという。

近代経済学の「効用」理論では、所得の大きさは購買の選択幅を広げるのだから、「効用」の水準は高まることになっている。だからこそ、所得の増大や、GNPの成長は経済社会の目指すべき重要な指標として定着した。しかしブータンの幸福の経済学から見ると、GNPは「多々ますます便ず」ではない。

首相は「国が経済の規模で上位に上がったからといって、幸福のランクが上昇したとはいえない。カネが増えるにつれて、幸福感が減退することもあり得る」と指摘した。この指摘は物質的に豊かな先進国に当てはまる。

米国の調査だが、1946年から91年までの間、一人当たり実質GDPは、2.5倍に増

えているのに、世論調査にもとづく国民の幸福感は、1970代に最も高い水準に達したが、以後急速に低下、90年代初頭には、調査開始以来最低の水準に落ち込んでいる。また、日本でも1958年から91年まで実質GDPは6倍になっているのに、生活満足度はほぼ横ばいだ。

なぜそうなのか。所得が増えた当初の段階では、所得の増大は人々を幸せな気持ちにするに違いない。しかし、やがてその所得水準に慣れてしまい、幸福感は元のレベルに戻ってしまう。

それだけではない。沢山の所得を得たいという願望が、実際の所得増加を追い越してしまうことがある。そうすると、幸福どころか失望感に変わってしまう。あるいは、自分の所得は上がっているのだが、他人の上がり方がもっと大きいと、不満の種になる。

以上のような、幸福と所得の微妙な絡み合いを念頭におくと、単純な成長至上主義は、人々に幸福をもたらさないことになる。

では、GNHの哲学は、この難問にどんな答えを用意しているのだろうか。「幸福を拡大するには、自分の欲望を最小限に抑える規範も必要だ」と首相はいう。欲ぼけの戒めだ。シンポジウムには、仏教者や心理学者も参加している。彼らは、仏教的思想を西欧の効用主義幸福観の代案と見なしている。

仏教哲学にもとづく幸福論を、「所得」と「欲望」の関数で表現すると、以下の式になる。

$$H = f(Y, D) \quad H: \text{幸福}, Y: \text{所得}, D: \text{欲望}$$

HとYは正の相関、HとDは負の相関関係にある。すなわちこの関数を単純にすると、 $H = Y \div D$ となる。

つまり、幸福は、所得に比例し、欲望に反比例する。欲望が大きくなればなるほど、幸福は小さくなる。それなら所得を増やせばよさそうなものだが、所得の増大が利己心を刺激し、さらなる貪欲を生み出し不幸のもとを創る。この悪循環を断つには、欲望の抑制こそ大切である。これが仏教の主張だ。

近代経済学は、利潤への貪欲が経済システムを動かすエンジンであることを強調し、貪欲のもたらず倫理的問題点を、宗教の世界に置き去りにした。貪欲は妄想に根ざしている。妄想とは、貪欲を満足させることを、幸福と思い違いをする錯覚のことだ。

これが、経済のグローバリズムに呑み込まれないように、GNHのなかに“欲望抑制剤”としての仏教の教義を組み入れた思想的背景だ。

“曼荼羅共同体”の統治形態

「建国者たちは、国民の啓発と幸福の実現のために、ブータン独特の政治システムを創った。国家というものを仏教の“曼荼羅の世界”と認識し、その中で人々が、より多くのGNH創出をめざし、インフラや政治形態、社会構造を改変する空間と考えていたのだ。」

これは、首相が行ったシンポジウム基調講演の一節だ。

確かにGNHはそのような仏教共同体の持つ伝統と文化をそっくり受け継いでいる。それ

は、中世の自給自足の共同体の中で育まれた、独立独行、自己存続の気概と分かち合いと思いやりの精神だった

だがGNHの目指したものはそれだけではない。国王はブータンの伝統社会を維持しつつ、これに西欧の民主化路線を段階的に導入している。

この点について首相はこう述べている。「以前は共同体の目指す発展計画は、国王のトップ・ダウンで決定された。したがって個人はトップ・ダウンで決められた共同体の意志と多かれ少なかれ妥協する必要があった。しかしこの政策決定方式は修正された。」

1981年、国王は非中央集権化政策を掲げた。それが民主化への弾みをつけ、行政の透明化を促した。さらに人々の社会的責任の意識を涵養し、村やコミュニティといった草の根レベルで物事を決める構造に変革した。

1998年には、国王の権限の大幅委譲を行い、行政の全権限をブータン国会で選ばれた閣僚評議会に移管した。評議会の議長は輪番制で首相職に相当し、初代議長が、シンポジウムの基調報告者のテインレー氏だった。このとき、国王は「私は国家主席を返上し、国家元首に専念する」と発言している。

さらに、2005年、国王自ら憲法草案を作成、1953年に成立した絶対王政から、立憲君主制への移行を提案した。草案には主権在民と、国家元首たる王はブータン国民の統合の象徴である、と明記されている。しかも国会の四分の三の賛成があれば、王を退位させることが出来ると記されている。

王は、「ブータン国の主権と安寧、そして国民の幸福は、他のいかなるものよりも大切である。ということは、王よりも国家の方が大事なのだ」と述べ、草案に対する国民の意見を広く求めた。

国家存立の基本条件を定めた根本法規である憲法の草案には、いたるところにGNH思想が盛り込まれている。

憲法前文には「我々ブータン国民は、三つの光り輝く宝、守護神である仏、歴代の王、および現王の祝福のもとで、ブータンの主権を強化するとともに、自由を尊び、正義、平穏の確保に努め、国民の永遠の団結と幸福そして福利と健康の実現に努める」と書かれている。

さらに個別の条文では、先祖の心の遺産としての仏教（第三条）、文化（第四条）、自然環境（第五条）など、ブータンらしさを構成してきた歴史的伝統を特記し、これを国家像のど真ん中に据えている。西欧の民主主義的要素を導入してはいるが、ブータン人の心のよりどころは、あくまでこの国の歴史と伝統の中にあることを示すものだ。その意味では、憲法草案は“曼荼羅共同体”のGNH思想の集大成ということが出来る。

「よき統治形態なくしては、経済自立、環境保全、文化の発展、国民の福祉など幸福の目標は達成できない。私は、二千年代のいつの日か、世界の全ての国と社会に偉大なる幸福が訪れるよう祈っている」。リヨンポ・テインレー初代首相は、シンポジウムの基調講演を、こう締めくくっている。

第五章 雷龍王国の都、ティンブー ―近代と伝統の接点を訪ねる―

信号機のない首都

空港のあるパロの町から、首都ティンブーに向かう。山道を55キロ、四輪駆動のトヨタ・ランドクルーザーで二時間半かかる。徒歩と馬とロバを除けば、この国の交通手段は、バスか車しかない。もちろん国内航空路線はないし、ヘリコプター会社設立の話もあったが、立ち消えになった。

空港から首都まで最短距離のトンネルを掘れば、三十分もかからないとのことだ。「そんなに急いで、何の幸せがあるのか」という天の声で、これも沙汰済みになった。取材旅行中ずっと付き合ってくれたジェルミ・ツエワンさんの話だ。

道路が狭く曲がりくねっている。渓谷沿いに斜面を切り開いたところが多い。やがて、ヒマラヤを源とするパロ川とティンブー川の合流点にあるチュゾム三叉路に差しかかる。

ここはブータンで一番の交通の要所で、空港、首都へのルートだけでなく、東部ブータン、南のインド国境など各地に向かう道路の合流点だ。検問所があり、全ての車は、ここで政府のチェックを受ける。

合流点の渓谷の断崖の下に、三体の仏塔がみえる。チベット式、ネパール式、ブータン式だ。ブータン式の仏塔には屋根がある。このヒマラヤ三国の中でブータンは一番雨が多いからだという。いずれも交通安全のお守りとのことだ。

崖淵の危険箇所には、ゴルフ場のOB杭みたいな白く塗った背の低い鉄の柱が立っている。ガードレールはほとんどない。たまに転落事故がある。

「ここを夜、通過するのは恐いでしょう？」といったら、「むしろ夜の方が安全、車のライトで対向車の来るのが、あらかじめわかるから」という。ジグザグ道で見通しが悪い。突如、対向車が視界に現れた。登り優先だ。坂道を下る車はバックして擦れ違いの隙間を作る。「登り坂の車は絶対とまらない。いえ、とまれない。停まるとエンストするから」とジェルミさん、それがこの国の交通ルールだという。

谷が開け、川岸に棚田が展開する。道が少し広くなり人影が見えてくる。道端に野菜や果物を売る行商人が店を広げている。対向車線同士の二台のトラックが、顔見知りとみえて、車を止めて雑談している。後続の車に、クラクションを鳴らされるまでのつかの間の世間話だ。

棚田の片隅に、真っ赤なじゅうたんを敷いたような区画が見える。唐辛子畑だった。ここから、川沿いの峠を越えたら、ティンブーの町が展開していた。

標高2400メートル、人口五万人、ヒマラヤの谷間に建設された首都だ。ティンブー川沿いの丘の上から、眼下に展開する町並みを見渡す。ホテル、レストラン、郵便局、スーパーマーケット、いずれもブータン固有の伝統建築で、遠目には竜宮城の町並みのようにも見える。川べりの柳の脇をドテラ姿（実は民族衣装のゴ）が歩いている。一瞬、どこかのひなびた温泉町に案内されたのではないか、と思った。旅人の束の間の感傷だ。

街の中心に足を踏み入れて驚いた。狭い目抜き通りに車がひしめいている。この県の人口の3分の2が公務員、企業家、ビジネスマン、商人などの都市生活者だ。この人たちにとって車を持つことは、いまや当たり前になっている。朝夕の通勤時間には、車の渋滞があちこちで見られるようになった。

半世紀前には、車というものが存在しなかったのがこの国だから、目抜き通りといっても道幅は広くない。夕刻は、買い物客の二重駐車で、車の通り抜けに時間がかかる。

「ここ一、二年、すごく車の台数が増えたみたい。インドへの電力供給収入で政府の財政が良くなり、しばらく据え置かれていた公務員の給料が大幅に上がった。それにローンも簡単に組めるようになったから…」

テインブー在住のジェルミさんの奥さん、青木薫さんの解説だ。交通事故も増えたという。街を歩いて気付いたのだが、運転マナーがよろしくない。車が人間よりも威張って走っている。横断歩道も車が優先で、直進してくる車を歩行者が避けている。近代化がこの街を、ヒマラヤの桃源郷から分離した。

車の台数の増加で、かつて市内に信号が設置された。しかし国王の「景観にそぐわない」という一言で廃止になった。交通量の多い交差点には、赤、青、黄の極彩色の模様で飾られた六角形の小屋があり、警官が手信号で車の流れを裁いていた。テインブーは、世界でも珍しい信号機のない首都でもある。

タシチョ・ゾン（王宮）での対話

テインブーが首都になったのは1955年、第三代ワンチュック王の時代だ。もともとこの地は、王家の宗教であるチベット仏教雷龍派の本山のひとつだった。王はここを近代化への行政の拠点と定めた。

テインブー川のほとりに、タシチョ・ゾン、“祝福された宗教の砦”という名の城郭がそびえている。国王の執務所であり、宗教界の最高権威ジェ・ケンポ（大僧正）の率いるブータン仏教の総本山でもある。釘を一本も使わず、木材に刻んだ溝とホゾを組み合わせる伝統の建築法で建てられている。

三階から七階建ての五つの支城を、つなぎ合わせた多目的の城郭だ。出窓が美しい。早速、見学と思ったのだが、あきらめた。外国人は内務省発行の許可証が必要で、しかもゾンで仕事をする役人の執務時間の終わる午後5時から日没まで、との時間制限がある

代わりに、近くの全景の見える小高い丘に登り、ジェルミさんの解説を聞く。

「ゾンは ブータン人の心のよりどころです。17世紀、シャブドーン王朝によって、建てられた。大きなゾンは、ブータンの12の県に一箇所ずつあり、行政と宗教のセンターだ。曼荼羅共同体の心のよりどころでもある」という。

首都の冬は乾燥し、かなり寒さが厳しい。第二代の王の時代には、冬は亜熱帯のプナカのゾンで過ごし、テインブーのゾンは夏の宮殿として使われていたという。だから冬の王宮はかなり冷えるらしい。「冬に宮殿を訪ねたら、王に“こちらで話そう。日が当たっているから”

と南東の角の最上階にある居室の窓際の陽だまりに招じいれられた」。前出の西水美恵子さんに聞いた話だ。

ゾンに隣接して、18ホールのゴルフ場がある。南の市街地の喧騒から分離するための、緑の緩衝地帯だ。「国王はゴルフがお好きで、民族衣装のゴを着たままプレイされます。」と。城郭の中には、国会議事堂もあったがよそに移転した。ゾンの隣接地に各省庁の建物がある。こちらは、にわか造りで趣はない。

いっそのこと、ゴルフ・コースを潰して、整然とした官庁街、住宅街、それにホテルなども建てようとの提案が、国会に出された。「でも、自然環境保存という国民の義務に反するとの理由で、否決された」とジェルミさん。

ブータン議会の定数は150人、僧侶10人、政府代表（国王からの指名）35人、それに各行政区から一世帯一票の投票で選ばれた105人の国民代議員で構成される。

「議員には議会内での言論の自由が認められています」

「政党を結成して、議会外の言論活動はやらないの？」

「今のところ政党結社は非合法だけど、主権在民の立憲君主制憲法が発効すれば、政党政治が始まると思う。私の尊敬するテインレー初代首相（現内相、四章のGNHシンポジウムの基調報告者）は、いずれ政党を作りたい、とっています」

「憲法上の国王の地位と国会の関係は？」

「国王は世襲だけど、国会は四分の三の賛成、と国民投票によって国王を退位させることができる。その場合は王位継承者の上位のものが王になる」

この退位規定は、どうしようもない“バカ殿様”が出現したときの国民の対抗策なのだろう。ゴルフ場越しに城郭を眺めながら、ジェルミさんと交わしたブータンのユニークな政治体制論議だ。

城郭の北東のゾンの最上階が大僧正職、ジェー・ケンポの執務室という。彼の役割は何か。

王が目に見える世界の指導者であるとすれば、大僧正は精神世界の指導者で、二万人以上の僧を率いている。国王はブータンの仏教の庇護者で、坊さん達のなかには国の財政援助を受けるエリート国家公務員もいる。

「城郭の中には宗教行政に携わる少数の僧侶しかいないが、ティンプー市内や郊外にある僧院や寺院をあわせると、千人以上の僧が暮らしています。」

「瞑想にふけているのですか？」

「それもあるけど、市民の家に呼ばれ、葬式や祭りなどをつかさどる。それだけでなく、病人の祈禱、結婚の立会い、時には家族内の揉め事の仲裁もやる。人口急増でティンプーではお坊さんが足りない。ちょっとした法要では、なかなか来てもらえない。特に私のような東部出身者の宗派のニンマ派のお坊さんが、少ない」。

「葬送は火葬ですか」

「そう。首都には火葬場があります。このごろは森林保護のため薪を節約し、重油で火葬します」

「お墓は？」

「日本のお寺と違ってブータンには、墓も戒名も位牌もない。輪廻転生、人間が死ねば遺体から魂が抜け出し天に昇る。そして、いずれこの世に生まれ変わってくるから、墓はいらない。火葬した遺灰はふつう川に流される」

チベット密教のあの世観だ。

土地ブームと“スイス・ベーカリー”

近代化と産業化の進展で、ティンプーの街は建築ブームだ。四、五階建てのビルがどんどん建っている。市内の目抜き土地は、一平方メートルで十万円もする。この国では土地は誰のものか。

1952年、第三代王の時代、土地改革が行われ、小作人や昔奴隷階級に属していた人々に、王家所有の土地を分け与えた。しかし、中世の荘園時代からつづく豪族の末裔など地元の有力者の所有する土地が多く残っているという。

ティンプーの地主は、特権階級だ。しかも首都のあるブータン西部地域は、母系制相続なので、旧家の女性は不動産収入で優雅な暮らしをしている。そのことは第一章の“優雅な暮らしをする女性大家さん”のエピソードで紹介済みだ。

平地の少ないブータンでは、近代化はどうしても激しい土地の値上がりをまねく。耕地面積も都市化と宅地化でじりじりと減っている。かつて、穀物は完全な自給自足だったが、今はインドから米を輸入している」ジェルミさんがいう。

首都の不動産ブームの象徴的な事例にこんな話がある。

我々の泊まったホテルのまん前に、キノコをイメージした青い丸屋根と白壁で出来た、円形の二階建てのビルがある。中世ブータンの出城からヒントを得た建物だ。入り口には門柱代わりに、キノコの像が建っている。実はこのビル、スイス・ベーカリーという名のパン屋兼カフェテリアだった。

交通整理の警官のいる交差点から三十メートル、商店、みやげ物屋、ホテル、映画館のあるホンコン通りの起点でもあり、東京でいえば銀座四丁目の角地だ。ここに突如として、店の身売り話が持ち上がった。

不動産業者が買い取り、店を取り壊して、跡地に五階建ての高級アパートを立てる計画だった。ところが、ブータン政府は「由緒ある建物を取り壊してはならぬ」との理由で、売却停止命令を出した。

店に入ってみる。都市化で食生活の西欧化の進むティンプーでは、パンとコーヒー、ソーセージなどで洋風の昼食を済ますサラリーマンが増えてきた。昼下りの店には、結構、客がいる。客席で、ジェルミさんがいう。

「なぜ、売却禁止命令が出たか？ここは、先代の国王がスイス人技師にプレゼントした土地だからです。前の王はスイス好きだった。山岳の小国で、自然環境がブータンに似ていたからでしょう。近代化の過程でスイスから農業技師が招かれ、その一人がブータンへの永住

を希望した。国王は一等地を与え、ここでベーカリーを創業させた。技師は亡くなり、今はブータン人の養子があとを継いでいる」。スイス・ベーカリーの由来だ。

土地の暴騰は、人間の欲望をとめどなく増幅させる。土地バブルは勤労の喜びをそいでしまう。このような事態はGNHの哲学の摂理に反する。開発に伴う市街地の暴騰にはブータン政府も頭を痛めているようだ。

でも、近代化がこの国に豊かさをもたらしたことも事実だ。特に先代の王が首都に選んだティンプーではそれが実感できる。自給自足が基本だったブータンには、行商人が品物を並べる道端の露店はあるが、大きな市場はない。だが、公務員を中心に給与生活者が暮らす首都だけは別だ。

毎週金、土、日の三日間開かれるサブジ・バザールの食糧の豊かさには、驚かされた。りんご、みかん、バナナ、パイナップル、マンゴーが並んでいる。パイナップルとマンゴーはインド産だ。この国は寒冷な山岳地帯から、平地の亜熱帯までであるので作物の種類は豊富だ。キャベツ、にんじん、大根、レタス、トマト、ジャガイモなど近代化以降、導入された西洋や日本野菜のほかに、わらび、しだ、さんしょ、唐辛子、ヤム芋、タロ芋、など伝統野菜が並んでいる。穀物は赤、白二種類の米、とうもろこし、麦、そしてソバだ。

伝統的な興奮剤であるドマ（ピンロウ樹の実）も売っていた。この国が、世界初の禁煙国となって以来、ドマを煙草代わりに嗜む人が増えているという。川海苔、シャクナゲの葉で包んだバター、チーズ、羊、牛、豚、鶏肉、インド産の干魚などたんぱく質源も豊富だ。輸入品も多い。カリフラワー、アスパラガス、パセリ、インスタント・ラーメン、コーヒー、コココーラ、ウーロン茶など、輸入額が年々増えているという。

バザールの圧巻は、ヤクの肉の切り売りだ。チベットとヒマラヤの3500メートルから6000メートルに住む肩の高さが1.5メートルもある野生の牛だ。ブータンの遊牧民は、ヤクを馴らしてして家畜化し、放牧している。乳はチーズの原料に、肉は食用に、毛は織物に使われる。

一頭で2万ヌー（2万8千円）、丸ごと買うには中級公務員の一か月分の給料でも足りない巨大な動物だ。遊牧民がトラックで運び、バザール横の広場で解体、肉や内臓を手ごろな大きさに切って計り売りしている。ちなみに一キロ120ヌー（290円）だ。家庭で干し肉にして、冬の蛋白源にする。

バザールの出口で、珍しいものを見た。一人の年老いた乞食が、買い物客に物乞いしている。「インドは乞食が多いが、仏教国ブータンには一人もいない」と聞いていた。「弱者は物乞いをしなくても村人が助けてくれるのに…」ジェルミさんも当惑顔だ。これも都市化が生んだ現象かもしれない。

マツタケを「僧侶のキノコ」という

在日経験七年、日本人の奥さんを持つジェルミさんは、なかなかの話術の持ち主だ。突然面白いことを言い出した。

「私が日本に住んですごく驚いたことが、ふたつある。金持ち国日本に大勢のホームレスがいたことと、ブータンでは人気のないマツタケが、ビックリするほどの高値で売っていたことだ。」と。

「日本のホームレスは必ずしも貧しさゆえではない。家庭の事情など様々な精神的問題が原因だ。家族を棄てたり、あるいは棄てられたり…」

そう答えたら、「ブータン人も貧しくはない。あの乞食の老人も、その精神的問題とかいう特殊な事情を抱えているのかも知れない」と逆襲された。ブータン人は論客が多いと聞いてはいたが、まさしくその通りだった。

乞食とホームレスの論争はこの辺で棚上げにした。ブータンのマツタケの話が聞きたいといったら、奥さんの青木薫さんを、夕食の席に呼び寄せてくれた。

青木さんによると、標高2千から3千メートルくらいの樹林帯では、七月から九月にかけていろいろな種類のキノコが取れるという。マツタケ、シイタケ、マイタケ、ホウキタケ、シメジなどがある。一番人気は中型の黄色いキノコで、杏子のように甘酸っぱい香りのするアンズタケだ。

アンズタケはブータン人の大好物で、贅沢料理のシャモ・ダツツイ（キノコのチーズ鍋）に欠かせない食材だという。マツタケの小売値は一キロ1500円くらいだが、それよりも高値で取引されている。「ブータン人は、マツタケ特有の松葉のような香りが、お気に召さないみたい」と彼女はいう。

マツタケは、テインブー、パロ、それにチベット国境に近いブムタン県のヒマラヤ五葉松の林に分布している。JICA（国際協力機構）の協力でマツタケ山の保全管理が進み、有力な外貨獲得産業になった。輸出相手国はもちろん日本で、関西方面に空輸されている。

マツタケが安くてふんだんに食べられることは、日本人在住者にとっては、「思いもかけない贅沢でした」と彼女はいう。

青木さん御用達のマツタケ採取農民を紹介してもらい、話を聞く。彼の名はカルマ・デンダップ、34歳、ゲネカ村の農民だ。市内から四輪駆動の車で、三時間険しい山道を登りきった山村だ。カルマは村のマツタケ山の入会権を持っている。

「マツタケは儲かりますか？どこに売るのですか？」

「はい。七月中旬から十月中旬までマツタケを取ります。日本向けの輸出業者にまとめて売ります。収入はおよそ二千ドル。ジャガイモ、小麦、唐辛子、豆を少し作っているが、畑がわずかなので大したカネにはならない」

「季節のマツタケの売り上げだけで、一年間生活できますか？」

「出来ないことはない。でも私は欲しいものがあるので、中古の車で、村人の作った野菜や穀物の市内への運搬をやっている。人も運んであげる。運送屋で、一ヶ月、150ドルの収入がある。」

「余分のカネをなにかにつかいますか？」

「三年前、月賦で93年型の中古のトヨタ・ランドクルーザーを600ドルで買った。そろそろ、もっと新しい中古車に買い換えたい。後は四人の子供の本や、学用品、次は仏

間を改築し、残ったら百ドルくらいの素晴らしい仏像を買い足すつもりだ。家も土地もテレビも車もある。それ以上稼ぐつもりはない」

これが、カルマさんの英語で話した「キノコで生計を立てる、の弁」だった。彼は小学校しか出ていないという。ブータン人の英語力の高さには改めて感心させられた。

ところでカルマという苗字は“梵”とか“業”を意味する仏教用語だ。ブータンでは仏教の単語がそのまま苗字になっているケースが多い。

「ブータンではマツタケのことをサング・シャモといいます。シャモはキノコのことだが、サングとはお坊さんのことです。お坊さんのキノコを売って暮らしていけるのだから、毎日、仏様に感謝しています」という。英語のうまいカルマさん、どうもこの人、ただのキノコ売りではなさそうだ。

ティンブー名物、野犬の大群

「夜明け、騒音で目を覚ます。“一犬虚に吠えて、万犬吠ゆ”。野犬やたらに多し。ここはホテル・ペドリリング。ティンブーの中心部、交通整理の警官ボックスの近く、スイス・ベーカーリーの裏なり。窓のカーテンを開ける。戸外をうかがう。三十頭ほどの野犬、群をなして残飯をあさる。建物の裏から、別の野犬の一団があらわれ、吠えまくる。

もはや眠りにつくことあたわず。徒然に、客室備え付けの教典“仏陀の教え”を拾い読みする。野犬と信心との関係ありや否や？とおもいつつ。2005年10月8日、記す」

旅先でのホテルで記した私の旅日記の一節だ

ブータン取材旅行の相棒、赤川貴大君（東京財団研究員）が、朝の散歩の成果だといって、犬の大群の写真を何枚か持って戻ってきた。「仏教国の犬は、おとなしいかと思ったら結構気性が荒い。危ないです。なぜ市は放置しておくのでしょうか。」といった。同感だ。

早速ホテルのフロントに聞いた。人通りの多い日中は、どこか山陰とか谷間に隠れている。夜、商店が店を閉め、人通りが少なくなる頃、餌を求めて姿を現し、目抜き通りの広場に集結するのだという。ホテル前の広場だけでなく、王立バスケット・ボールコート、映画館前、ショッピング・センター前など何箇所か、野犬のたまり場があるという。

ガイドのジェルミさんが、お馴染みのランドクルーザーで、ホテルに迎えに来る。

「やはり、気になりましたか。日本人は気にしない人が多いけど、西洋のお客さんには必ず聞かれます。質問は二つ。狂犬病が出たら大変なのに市役所は放置しているのか？もう一つは、野犬放置は、仏教の殺傷の禁止の教えに由来するものか？です。一問目の答えは“ノー”。市役所は一生懸命野犬対策をやっています。第二問の答えは、“イエス”。お察しのとおり、仏教の教義の関係で、野犬狩りには、信心深い市民の抵抗が強いのです」

彼は以下のように解説してくれた。

野犬問題は、ブータン唯一の週刊新聞、「KUENSEL」（すべてを明らかにする）にも何度も取り上げられた。ティンブー付近には、四千頭の野犬が放浪している。馬がおびえて道路に立ち往生することもしばしば。年に十件から二十件、人間が野犬にかまれる事件も起こっている。

だが、テインプーの衛生当局は、捕獲して殺す手は封じられている。ほとんどの市民は、「野犬は生きる権利を持っている。」とと思っているからだ。そこで衛生当局は、一計を案じ、野犬を生きのまま捕獲して役所につれて来た人に賞金を出した。

「絶対殺さない」と約束したので、三百頭が集まった。市は捕獲した野犬をトラックに乗せ、百キロも離れた標高4千メートルのヒマラヤの山中に棄てた。ところが二ヶ月ほどたったら、ほとんどの犬がテインプーの古巣に舞い戻ってしまった。

テインプーの野犬問題は、まさしく近代化の過程で起こった信心と進歩の葛藤だ。仏陀の目から見れば、犬やねずみだって、人間同様、神聖で犯してはならぬものなのだろう。「そうです。輪廻転生という来世の思想と現世の現実との摩擦です」。ジェルミさんがそう言った。

「私のお母さんは人間です。だから私も人間です。私が死ぬ。また生まれ変わる。その時、私は犬の姿でこの世に現れるかも知れない。もしそうなったら、私のお母さんは犬です。犬に限らず全ての生き物は、私の来世のお母さんになる可能性がある。だから生類には憐れみを持って接し、絶対に危害を加えてはならぬ」

これが輪廻転生思想のエッセンスだ。「野犬は不潔で、狂犬病の媒体だ」と市がいくら説得してもなかなか聞き入れてもらえない。それどころか、暮夜ひそかに、野犬に餌をやっている人も結構いると聞いた。

深夜の繁華街を探訪する。誰が餌付けをしているのか？その現場を目撃したかったからだ。店の裏口から、籠にパンを入れた人が出てきた。暗闇の中を野犬が取り巻く。やおらパンをちぎり犬に投げ与えている。売れ残りのパンなのだろう。

道端にバターを入れたアルミのボールが転がっており、犬がなめている。誰かが棄てたのではなく、わざわざ置いたのだろう。アスファルトの路上で残飯をあさっている犬もいる。野犬が自分の“来世の両親”候補になるかもしれないと信じている人にとっては、餌付けはやむにやまれぬ行動なのだろう。灯明として使っているバター・ランプの燃え残りを、寺に群がる野犬たちに舐めさせるのが、若い修行僧の朝の日課とも聞いた。

都市化の波が押し寄せなかったら、バリアと呼ばれるこの半ば野生のヒマラヤ犬たちは、人間と桃源郷の谷間で、何の緊張もなく共存していたのに。

市街化の進む首都テインプーで仏に仕える僧侶達は、そんな思いに駆られているのかも知れない。

鍼灸師、高田忠典さんと

テインプーには国立伝統医学院がある。ブータンではどの保健所や病院にも、西洋医学と東洋医学の医師が配属されている。東西併用医療システムだ。外科や薬で患部を狙い撃ちする現代医療だけでなく、心と身体全体のバランスを重視する伝統医療の研究も盛んだ。

この国では、祈りや精神による治癒力を高く評価しており、患者は、鍼と麻酔薬、ヒマラヤの薬草と抗生物質のいずれかを選択することが出来る。国立伝統医学院は、仏教哲学に基づくホリスチック（心身一体）医療の研究センターだ。薬草の製造・普及に努める傍ら、診療

所を開設している。

そこにただ一人の外国人鍼灸師として、高田忠典さんが働いていた。一日に三十人ほどの脈を診てハリを打ち、夕方には西洋医が対応できなかった重症患者も含めて往診する毎日だ。二十歳で東京に足ツボ療法サロンを開き成功した。2003年、三十歳で、事業をたたみ雲水のような心境でブータンにやってきた。

仏教の心で医療を学びたいと思い立ったのだ。首都ティンブプーでハリ治療を始めたところ、口コミで評判が広がり、肩こりから末期がんまで次々と患者が訪れるようになった。

皇太后や王妃にも往診を頼まれたのが縁で、国王の推薦で伝統医学院の鍼治療師として採用された。月給450ドル、日本時代の収入に比べればわずかだが、チベット密教の流れを引く、ブータン医学の奥の深さを学ぶ良い機会だと思っているという。

治療の傍ら医学院に残る経典を紐解くという高田さんに、病の根源は何か？密教的解釈を聞いてみた。

「病の根源は無知、貪欲、憎しみです。身体という有機体の中には病のもととなる三つの有害な要素が恒常的に存在している。だから人間は病から完全に解放されることはない。

人間は病気を引き起こす潜在性からは、逃れられない。しかしこの三つの病源の平衡状態を保っていれば、身体は健康でいられる。無知、貪欲、憎しみが、均衡を破壊する働きをして、病気を作り出す」

「密教の無知とはどういう意味ですか？」

「老、病、死は人間の持つ宿命であることを、悟っていないことです」

「病気の見立てはどうやるのですか？」

「患者の尿や脈です。脈を調べる場所は手と手首に十二箇所ある。治療法には祈祷もある。無知、貪欲、憎しみを抑える療法です」

「するとハリを打つ前に祈祷もやるのですか？」

「いえ。それはもっぱら僧侶の仕事です。医師は一に食餌療法、二に医薬、三にハリ、四に外科的手段を使う。でも、話をよく聞いてあげて、さわってあげるだけで、“楽になった”と喜ぶ患者が多いのにはビックリしました。これも三つの病源の均衡を回復するための心の療法で、ある種の祈祷効果でしょう」

「桃源郷の仙人みたいですね？」

「だと楽しいのですが、ティンブプーでは、近代化と急速な都市化で、現代病が増えています」高田さんが苦笑する。

「やはりストレスがたまります。日本ではそれが肩こりの症状となって現れるのですが、ブータン人には偏頭痛が多い。偏頭痛はTVの解禁による情報過多と生活様式の多様化でストレスが一気に増えたからだと思う。それから糖尿病が多い。

食生活が突然豊かになった。しかも位の高いお坊さんや高級公務員などエリート階級の糖尿病が多い。脂っこい高カロリーの食品をたらふく食べて、車に乗りっぱなしで歩かないからでしょう。最近、減量のためのスポーツクラブも開店した。

街には、中国、インド製のジャンク・フードが氾濫している。子供の弁当にインスタント・

ラーメンを持たせる横着な親もいる。TVの観過ぎで、親も子も寝不足なのです」

近代化は着実にヒマラヤに現代病を持ち込みつつある。ティンプーではヒマラヤ杉の花粉と排気ガスが混じり花粉症が出始めたという。

ブータンは、昔から高価な薬草の世界的特産地として知られてきた。だが秘境ブータンの薬草にも危険信号が出ている。こちらはブータンの近代化のせいではなく、ヒマラヤ大山脈の北にある隣国、チベット自治区における中国政府の急激な開発が原因だ。

「乱獲でヒマラヤ最高の高貴薬の原料である冬虫夏草が減ってきている。ブータンとの国境に沿って周遊道路が建設されたおかげで、中国側の越境者が簡単にブータン領の生息地に入り込み、密猟が絶えない」と高田さんはいう。

冬虫夏草とは、蝙蝠蛾（こうもり）という3千から5千メートルの深山に生息する蛾の幼虫に寄生するキノコだ。冬はミイラ化した幼虫の死体の中でじっとしているが、夏になると小さな草木のように成長する。冬は虫で夏は草になるのだ。中国の歴代王朝では、無病息災、不老延命、精力増強剤として珍重されてきた。

「世界で一番高価な薬草でしょう。急激な値上がりで、一キロ20万円はします。高血圧以外なんにでも効きます。1958年以来、ブータンはチベットとの国境を閉鎖した。といっても道路を閉鎖しただけで、柵があるわけではない。密猟者がブータン領奥深く侵入し一週間くらい山にこもり、採集していると聞いている。おかげで品薄で当医療院でも投薬できなくなっています」と高田さん。インドの中国大使館を通じて北京政府に抗議しているが、なしのツブテとのことで、冬虫夏草はブータンにとっては頭の痛いヒマラヤの安保問題でもある。

“メディア開国”と国王の決断

ティンプーのホテルの部屋にこもり、半日、じっくりとテレビを見た。なぜそんなにテレビにこだわったのか？それはこの国にTV放送が始まったのが、1999年という極めて新しい出来事であり、しかも紆余曲折の末、国王の決断で実現したといういわくつきの背景があると聞いたからだ。

1999年6月、TVとインターネットの解禁に際し、ワンチュック国王は談話を発表した。「若者達に言いたい。TVやインターネットは個人や社会に対して、恩恵をもたらすと同時に悪い結果をもたらす。あなた方が良識と正しい判断をもってこれらの情報機器を使ってくれることを強く要望する」と。

TVやインターネットは外国の異なる文化が入り込むのを許す道具であることは疑問の余地はない。新しいメディアの導入は、GNHの政策目標の一つである伝統文化の維持と仏教に基礎を置く“ブータン人の魂”の確立にマイナスの効果をもたらしかねない。

国王はそれを承知であえて“メディア開国”に踏み切った。グローバリゼーションが進行する中で、もはや外の情報から国民を遮断することは不可能だと判断したからだ。まさしく苦渋の決断だった。

国王のメディアをめぐる心の変遷を知る興味深い記録がある。ブータンの本屋で見つけた「天国にとても近い国」と題するニューヨーク・タイムスの女性記者の書いた旅行記だ。その中で、彼女は国王とのインタビューで、TVの解禁について質問している。

当時（1990年代中頃）は、ブータンのメディアは、KUENSELという週刊新聞とラジオだった。TV受像機は、輸入はされていたが、外国のビデオを観る道具でしかなかった。しかし一部の超エリートの家庭では、政府の特別の許可の下で、高価な大型のパラボラ・アンテナを屋根につけて、海外の衛星放送を楽しんでいた。

女性記者は、この“不平等なパラボラ”について、国王の見解を引き出している。

「確かに29個のパラボラ・アンテナが、ブータンにある。そのうち八割は王族と企業家が所有している。海外のメディアは、政府がこれを国民に解禁しないのは不平等だと非難している。しかし、一機、三千ドルもするアンテナを一部の金持ちの楽しみものとして解禁することが何の意味があるのか。ブータンの庶民はいまだに、安全な飲み水、良き衛生設備が不足している。村から村を徒歩で行かねばならないし、映画だって一年に一回観る機会のない庶民が沢山いるのだ」と。

ジェルミさんにこのエピソードに対する見解を求めた。彼はこういった。

「もし、あの時代に、パラボラ・アンテナの個人所有を野放しにしたら、持つ者と持たざるもの間で紛争が起こったでしょうね。あれほど貧富の差が外見ではっきり見えるものはないから。その後の技術革新で、不平等の象徴である海外衛星放送受信の為の高価なアンテナが不要になった。そしてついにブータンに大衆レベルの平等な多チャンネルTV時代がやってきた」と。

ティンプー市内には民営ケーブル・テレビ会社二社と国営テレビがある。ホテルのTVで60ほどある多チャンネルを試す。

BBC、CNN、香港のクリケット、米国のプロレス、英語が三割、後はヒンドウ、ドイツ語、フランス語、日本語のNHKの海外放送などだ。映画チャンネルを選べばハリウッド映画も手軽に観られる。おかげでティンプー市内のビデオ屋は廃業に追い込まれたという。このあたりは日本のCATVと全く事情は同じだ。

ブータンの国営テレビのBBSは英語と国語のゾンカ語で、番組を流している。ニュースのほかに政府の広報、料理や園芸番組、祭りの紹介、学校の文化祭などお堅いものが多いが、のど自慢大会の中継もある。昔の日本のNHKを見ているような錯覚に陥る。

ブータン人はテレビが好きだ。一日に十二時間もテレビにかじりつき、外で遊ばない子もいるという。2003年、KUENSEL紙が、メディアの影響力調査をやったところ、回答者の75%が「TV導入以来、生活スタイルが変わった」と答えている。

例えば「夜更かして寝不足になった」「家での仕事だけでなく、職場での仕事の時間割を人気TV番組の放映時間とぶつからないように調整する」「TVに夢中になり日課のマニ(礼拝)を忘れてしまう」「TV画面に家族全員が夢中になり、家族の会話が少なくなった」などだ。

TVと同時に解禁されたインターネットは、個人主義という“異教徒集団”を作るという警戒論も出ている。第四章で紹介したGNHシンポジウムでも、「GNHという観念とインター

ネットは異なる文化的属性を持っている。近代化の過程で起こる個人的自己利益の追求は、家族や共同体の中で形成された人間同士の強い精神的絆に対する脅威となる」という意見も出された。

情報というパンドラの箱は開かれた。情報の解禁は物欲を刺激する。仏教と共同体の持つ精神的絆によって、近代が増殖してやまない物欲に歯止めをかける、それがブータンの国家戦略GNHの課題だ。国王のメディア開国に伴う談話は、まさしくそのことを国民に告げている。

第六章 母系制社会の原風景 ―パロ谷の農家に泊まる―

ワンモ家の石焼き風呂

ブータンは、母系制社会が丸ごと残っている珍しい国だ。これを体験するには伝統的風習を残す農家に、何日か泊めてもらうのが手っ取り早い。「閉鎖的な山国の農民は、人見知りをするから難しい」とは聞いていたが、ガイドのジェルミさんの尽力で、ホーム・ステイ先が見つかった。

そこは数日前、我々が入国した空港のある町、パロ近郊の豊かな農村だった。首都、ティンプーに滞在するうちに、長引いた今年の雨季もようやく明けて、パロ谷には秋が訪れていた。空が抜けるように青い。刈り入れ真近かの水田が黄金色の絨毯のように展開している。

標高2300メートル、パロ川の左右に盆地状にパロ谷が開けている。山がちのこの国としては、貴重な“平坦な土地”で、数少ない豊かな米作地帯だ。川沿いの道を遡る。二、三百メートルおきに、森や丘を背にして数軒の農家が固まって集落を作っている。

どれも三階建ての堂々たる建物だ。川原の石を集めて石垣を積み、門が作られている。「大きいけれども地主の家ではありません。普通の農家です。」ジェルミさんがそういう。連れて行かれたのは、その一つ、ランゴ村のワンモ家だった。

門をくぐると庭だ。ジェルミさんが二階に向かってなにやら、ゾンカ語で叫んだ。窓からお婆さんが首を出して手招きしている。ブータンの農家は梯子を使って二階から出入りする。一階は豚と牛の住居だ。梯子を七、八段登る。そこは、板張りのベランダで、玄関のドアに通じている。

三人の女性が迎え入れてくれる。この家の若主人、キンザさん（34歳）と家長で実母のミンドウさん（64歳）、そしてキンザさんの長女ロブテンちゃん（8歳）だった。廊下を抜けて右に曲がると台所と作業部屋らしきものがある。その奥に家族の寝室が二部屋、奥に納戸がある。いずれも北向きで、山を背負っており暗い。

案内されたのは台所から、ドアで隔てられた日当たりの良い南側の明るい居間だった。先刻ミンドウさんが、窓から顔を見せた部屋だ。居間を挟んで東西に、広い部屋が二つある。仏間と客間だ。

ワンモ家のお婆さんと打ち合わせを済ますと、「うまく行くといいですが」と言い残して、パロ市内のホテルに引き揚げた。彼は「言葉が通じなくてもいいから、ガイドなしでの生活体験をしたい」という私の希望を尊重してくれたのだ。

ワンモ家で、唯一言葉が通じるのは、8歳の小学生、ロブテンちゃんだ。小学校教育のおかげで、ほんの片言だが英語を話す。私と旅の相棒、赤川貴大君に、「FIRE, HOT WATER」といいつつ、身体を洗うしぐさをして見せた。風呂へ入れという合図だ。

門外の田んぼの脇に野天風呂がしつらえてあった。板囲いの中には、縦一メートル、横七十センチ、深さ七十センチほどの木の湯船が半分ほど地中に埋め込まれている。話には聞いていたが、これがドッツオという名のブータン式風呂だった。湯船に手を入れたらまだ水だ。

風呂の焚口を捜したがそれらしきものはない。

囲いの向こうで、薪が盛大に燃やされ、その中で直径二、三十センチほどの石が真っ赤に焼けていた。この家の女の子が「FIRE」といったわけがやっとのみこめた。作男風のおじさんが、真っ赤な焼け石を大きな鉄の火バサミに挟んでやってきた。湯船に放り込む。ジュウという音と共に泡が立つ。五、六個石を入れたところで、湯が湧き上がる。

石と一緒に湯船に入った。韓国料理の“石焼ビビンバ”みたいなものだ。身体が芯から温められるような気分になる。おじさんが手まねで「熱いか？」と聞いている。水を桶に入れて持ってきた。「NO」といったら、今度は焼け石をひとつ、湯船の隅にそっと追加してくれた。

身体がいつまでもホカホカしている。五十メートルほど先にはパロ川の清流が流れている。せせらぎの音が絶え間なく聞こえる。ヒマラヤの河原の石を抱いて風呂に入るのも乙なものだ。板囲いの隅で虫の鳴き声がある。湯船から見上げる夜空には、満天の星が。パロ谷の秋はたけなわだった。

そんな感傷から我に返った。この風呂焚きおじさんは何者なのだろう？ジェルミさんから、ワンモ家は女三人の典型的母系家族だと聞いていた。初対面の挨拶の時も、このおじさんはいなかった。それが気になりだしたのだ。

彼は「アジャ」と呼ばれている。この家の納戸のような日当たりの悪い小さな部屋に寝泊りしている様子だ。風呂焚きに限らず、ワンモ家の統率者のお婆さんだけでなく、女若主人であるキンザさんに言い付かった仕事を、もくもくとこなしている様子だ。だから、「アジャ」とは、この国の言葉で、作男のことなのだと一人で納得することにした。

「スサノオ命」と「マスオさん」

翌朝、言葉が通じないのではないかと心配していたジェルミさんが、様子を見にやってきた。彼はいった。

「アジャは使用人ではありません。母方の叔父さんという意味です。あの人は、この家のアマ（お婆さん）の弟です。」という。名前はサンゲイさん、未婚か、既婚かは定かではないが、いまは独り身の52歳とのことだ。飛んだ早とちりだった。でも、叔父さんにしては、肩身が狭そうだ。私の感覚では、家族の一員というより、居候だ。

母親の系統をたどって、組織される血縁集団を母系制家族という。パロ谷の母系制は徹底している。土地や家屋など財産の所有権は、一族の女性から、女性へと相続され、家長も女性だ。土地付き、家持ち女主人は、不都合があったら夫に離婚を申し渡す。

夫でさえそうなのだから、母方の兄弟である叔父の同居は微妙だ。子供のころはまだしも、成人した姪のキンザさんにアジャは気を使っているみたいだ。どこか遠慮がちに見える。所詮、母系制というものは「男はつらいよ」であるらしい。

そんなワンモ家に、厄介になるうちに、日本の建国神話「古事記」を連想した。

高天原の女帝、天照大神は、暴れ者の弟スサノオ命を地上に追放した。母系制の天国から、葦原の中つ国に移ったスサノオは国を治め、地上の神、大国主命の家系を確立した。

その後、天照大神は、大国主命に天国から使者を送った。母系のわが子、ニニギ命に国を譲るよう交渉、ついにスサノオの家系は、地上の統治権をも失った。

古事記にある日本の建国神話、長い話を短くすれば、こんな筋書きになる。神話の中のスサノオは、ついていない。ブータンにはこのような母系制の神話はないらしい。だが、風呂焚きをやってくれたこの叔父さんの立ち居振る舞いをみていると、ワンモ家のお婆さんと彼のつながりが、天照とその弟スサノオの関係と二重写しになってしまう。

以後、私と赤川君は彼をスサノオ、お婆さんを天照と呼ぶことにした。二人だけの隠語だ。

母系制は古代の氏族社会の名残りだといわれる。考古学的調査によれば、ブータンには紀元前、十世紀から人が住んでいた。しかし判っているのは中世以降の歴史だけだ。この国の母系制は、歴史時代以前から存在しており、チベットや、中国の雲南省あたりから入ってきたらしい。チベット母系制の特徴である一妻多夫制の家も残っている。

ワンモ家も昔は一妻多夫制の家系だったのか？女若主人の父親は誰なのか？後刻通訳を介していろいろ取材したのだが、ほとんど語ってくれない。この家の水田は1.2ヘクタール、山林は1ヘクタールで、家長であるお婆さんの所有であること、娘は亭主を離婚した。わかったことはそれだけだった。

昔々チベット人がヒマラヤ越えて、ブータンにやって来て谷間に母系制の氏族社会を形成した。それが、ワンモ家の始まりなのだろうが、お婆さんに聞いても、その辺のことは全く不明だった。

「水田は家族だけでは、やりきれないので、農繁期には人を雇う。農作物は全部自給、余剰の米は売る」とお婆さんは言う。それにしても所有する水田の面積が、米どころのパロ谷にしてはちょっと小さい感じがする。

「多分、お婆さんの姉妹で田畑と山林を分けあったのでしょう。そもそも母系制は、唯一の生産手段である農地の散逸を防ぐために出来上がった古代の制度です。しかし長姉が家を継ぐが、不動産は分割相続する場合もある」ジェルミさんがいう。

ブータンではいまでも、女性が家の権利書の筆頭になっているケースが多い。とくに中西部の標高二千から三千メートルの山に囲まれた谷間の農地に母系制家族が目だっている。パロ県では、女性が不動産の所有者となっているケースが、なんと全世帯の95%をしめしていると聞いた。

パロの隣で首都のあるティンプー県も、母系制氏族社会の伝統を色濃く残している。夫は大臣や政府高官などの要職にあっても、住んでいる家も屋敷も奥さん名義のケースが多い。奥さんはこの地域の豪族で家付き娘だ。長谷川町子の漫画「サザエさん」の婿さん「マスオさん」のようなもので、家庭内では奥さんの発言力がかなり強い。

二階のトイレと豚小屋の関係

キンザさんが朝と晩、二階の居間に食事を運んでくれる。家族達は北側の薄暗い台所で、床に直接皿を置き、車座になって食事をしている。彼女は寡黙だ。シャイな人柄なのだろう。

この国で英語が通じる世代は、三十歳が境目だというのが、三十過ぎの彼女はぎりぎり英語世代以前のブータン人に属するらしい。でも、こちらの話す簡単な英単語はいくらか、わかるらしく、「YES」とか「NO」とか、ポツリ、ポツリと返事はしてくれる。

食卓を片付けにきて、私に「OK?」といった。ご本人は「我が家の料理はおいしいか?」と聞いているつもりなのだろう。「YES」といったら、にっこりして酒の追加と肴にヤクの干し肉を持ってきてくれたりする。

お婆さんが珍客の食べっぷりを観察に顔を見せる。よくしゃべる人柄のようだが、いかんせん言葉が通じない。ゾンカ語で何か言いつつ「モット食べる、モット飲む」のしぐさをする。

ブータンの農家は、少量の惣菜で、大量の飯を食べると聞いてはいた。ワンモ家の食生活はまさしくクラシック・ブータンのそれだった。ブータン料理の基本は塩味だ。これに唐辛子、豚の油、バター、チーズ、山椒を混ぜて料理される。だから日本人の口にはどの皿を試しても同じような味がする。

中国語で唐辛子の辛さを辣(らー)、山椒の舌がしびれる刺激を麻(まー)というが、ブータン料理の激辛と痺れの組み合わせは、世界一ではないのか。真っ赤な唐辛子は香辛料ではなく、野菜なのだ。チーズやバターを加えて煮て食べる。調理法も汁気が多いか少ないかの違いしかない。ベースはエマ(唐辛子)とダッツイ(チーズ)で、これにキノコや野草、あるいは季節の野菜を入れて食べる。

サラダに相当するホジという和え物もある。タマネギ、ショウガ、唐辛子、トマトを混ぜて塩と山椒で味付けた漬物みたいなおかずで、朝飯にはつき物だ。どれもこれも頭のてっぺんから汗が出てくるほど辛い。

米は赤米と日本米に近い白い米がある。どちらも沸騰した湯を棄ててしまう調理法なので、ぼそぼそとしている。多量のご飯を激辛のおかずで浸し、手づかみで口に運ぶ。大量のご飯が必要なのは、ブータン人の胃袋が生まれつき大きいからではなくて、激辛のおかずのせいではないかと思った。

ブータン人はお茶が好きだ。ちょっと近所の人が立ち寄ってもお茶が出る。我々が戸外をほんの短い時間散歩して戻ると、そのたびにお茶を出してくれる。塊になったお茶をほぐして煮出し、これに塩とバターを加えたのが、ブータン茶だ。お茶というより、むしろ熱くてまるやかな味のスープに近い。飲むたびに、唐辛子でただれた胃袋にジーンとくる。

ワンモ家の二階の客間に泊めてもらって、ほんのりとした暖かさを感じた。暖房は入っていないのに、ぬくもりの正体は何なのか。後刻、ガイドのジェルミさんに聞いた。ブータンの伝統的な農家建築は、一階が家畜の住居で冬場は家畜の発する熱で人間の住む二階の床が暖くなるからだった。しかも二階の床や天井は木の板が二重に張られ、間に土が挟みこまれている。

それが冬には保温効果、夏場は断熱効果を発揮するというのだ。

「夏、もう一度泊まって御覧なさい。冷房なんかないけど、木陰にいるような涼しさですよ」とジェルミさん。

二階の天井裏には背の低い屋根裏部屋がある。梯子をあがってみた。屋根との間には空間があって、吹き通しになっている。食糧の貯蔵室だ。干し野菜や、ヤクの干し肉がぶら下がっている。その隣の、六畳ほどの空間は、丸干しした赤唐辛子で占領されていた。一年分の唐辛子だという。重さにして、百キロ以上あるのでないか。

ワンモ家の二階の玄関脇の階段が、一階の動物居住区兼倉庫に繋がっている。一階の外壁は木造ではなく厚さ五十センチほどの石積みの壁と、一部は厚い板枠の中に土を詰めて固めた頑丈な壁から出来あがっていた。内壁も同じ構造になっており、穀物倉や農機具置き場と家畜居住区とが、厚い壁で仕切られている。

豚と牛がいる。豚は殺して食べるが、牛はもっぱらバターの原料である牛乳をとるためのものだ。夏場は山の遊牧民と契約して、牧草の多い高地で、放牧してもらうという。ぎょっとさせられたのは豚と人間様を使う二階のトイレとの関係だった。

ブータンの伝統的トイレは、ただアナがあいているだけで、中は真っ暗だ。暗闇めがけて用事をすませ、脇に置かれた甕から柄杓で、水を汲み清潔にする。原則として紙は下に落とさない。なぜなのか？その理由が一階に降りてみて初めて判った。

人間の排泄物は、下の豚小屋に直行し、豚のエサとなる構造になっていた。確かに効率的で自然の理にかなっているのかもしれない。この家の台所の排水も直接外に捨てているようだ。

だがブータンの近代化とともに、家畜と人間の分離を政府は推奨しているとのことだ。便所と家畜小屋を母屋の外に移転し、排水溝を作る農家もちらほら出ているという。

八歳の通訳、ロブテンちゃんの英語力

朝、読経の声で目を覚ます。ワンモ家の朝の勤めかと思ったが、家人の声ではない。しかも一時間以上も続いている。仏間にラマ、つまりチベット密教の坊さんがやって来て法事がはじまった。年に何度か祈禱をやってもらい、法話を聞いているようだ。この日の大人たちは坊さんの対応で忙しい。

小学生の一人娘、ロブテンちゃんが、客間のカーテンの隙間から顔を覗かせた。

一言「MAY I?」といった。よほど退屈したのだろう。「遊んで欲しいので、中に入っているか」という気持ちを、この二つの英単語で表現したのだ。英語で、意思を伝えるには、これで必要かつ十分、八歳にしてはなかなかやる。

彼女はパロの小学校の二年生だ。外国人である私とのコミュニケーションに積極的で、英語で言えないことは絵に描いて自分の意思を通じさせようとする。彼女の英語の単語力は、少なくとも三百語はあるようだ。

「YES」と「NO」がはっきりしている。「What is this?」がいえる。「I」「He」「You」の区別が付く。数字が二十まで言える。赤、白、黄色、青、緑、ピンクがいえる。山、川、空、星、太陽、月が言える。好き、嫌い、欲しい、あげる、嬉しい、悲しいがいえる。これに手まねと絵を加えれば、外国人の泊り客と、必要最低限の意思の疎通は出来る。

ブータンの英語教授法の優れたところは“英語を”教えるのではなく“英語で”教えているところにある。小学校は六歳から入れるが、義務教育ではないので十五歳の小学生もいるとのことだ。国語の授業と歴史と道徳はゾンカ語で行われるが、数学や科学は英語で教えている。

そのことは、予備知識としてもってはいた。だが、ブータンの学校は、何も知らない彼女のような若い小学生に、最初にどうやって英語を身に付けさせるのか？そこがわからなかった。この子と遊んでいるうちに、その秘訣がわかった。

お絵かきに飽きてきた彼女が、歌を歌ってくれたのだ。

昔のアメリカの西部劇映画「荒野の決闘」の主題歌「いとしのクレメンタイン」だった。ブータン語かと思ったら、聞いているうちにそれが英語で、しかも教材用に作詞した替え歌だった。

歌の文句が振るっている。

「Chili eating, Chili eating, Chili eating Just now,,,,,,,,,,

Stomach painning, Stomach painning, Stomach painning just now,,,,,,,,,,

Call a doctor ,Call a Doctor, Call a Doctor Right now,,,,,,,,,,

No Operation , No Operation , No operation,Please.....

Give me Medicine ,Give me Medicine, Please give me Medicine,,,,,,,,,,,,,

I'm OK ,I'm OK, I'mOK Right now,

Thank you Doctor, Thank you Doctor, Thank You Doctor for a medicine,

英語の元歌の出だしは「Oh my Darling, Oh my Darling, Oh my Darling Clementine」だ。「いとしのクレメンタイン」では、小学生低学年向きではない。やさしい単語を使いつつブータンの子供たちの生活実感にぴったりの歌詞に入れ替えたのだ。彼女の歌の聞き書きなので、英文に直すとちょっと字あまりの部分もあるが、ざっとこんなところだ。

この「唐辛子の歌」、強いて日本語に訳せば以下のとおりだ。

「唐辛子食べちゃった。食べちゃった。食べちゃった。オオ、辛い、辛い、辛い、どうしよう。どうしよう。

あー、胃が痛む、胃が痛む、どうしよう、どうしよう、どうしよう。お医者さん呼んできて、呼んできて、今すぐに。手術はダメ、ダメ、絶対にダメ、薬チョウダイ、薬チョウダイ、薬がいい。

アー、直っちゃった、直っちゃった、直っちゃった。もう大丈夫、大丈夫、大丈夫。お医者さんありがとう。ありがとう。ありがとう。お薬ありがとう」

まず、歌で基本単語と文型を暗記させる。カナダが開発した子供向けの生きた英語の教育法とのことだ。第五章で紹介したマツタケのお兄さんの英語を思い出した。彼は小卒の学歴しかないのに、簡にして要を得た英語の文章がすらすら出てくる。それは、歌を沢山暗記して、単語だけではなく英語の基礎文型を頭に叩き込んだ成果であると納得した。

「May I?」の英語の一言で、勇敢に意思の疎通を求めてきた小学二年生のロブテンちゃん、その将来はかつ目に値する。十年後に再開、もう一度英語で話をしたいものだ。

パロ谷に蒔いた“ダショー・西岡”の種

私が、ブータンという王国が、ヒマラヤにあることを知ったのは、1960年頃だ。「秘境ブータン」という本が、毎日新聞社から出版された。故中尾佐助大阪府立大農学部教授が書いたもので、鎖国中のこの国に入国、二ヶ月にわたる体験を記した日本ではじめての本格的“ブータン本”だったと記憶している。

今回のブータン行きでは、何冊か日本語の本を持参した。その一つに中尾教授の弟子の西岡京治氏と奥さんの里子さんが書いた「神秘の王国、ブータン」がある。

西岡氏は1964年、門戸を開いたばかりのこの国にチベット語が話せる農業専門家として赴任した。政府開発省に勤務し、農業の発展に尽くし、外国人として初めて貴族の称号「ダショー」を授与された。西岡夫妻の活動の拠点は我々の民宿のあるパロ谷で、現地ですぐ病がもとで1992年死去、とこの本にあった。

ジェルミさんがいう。「ダショー西岡を知らないブータン人はまずいません。あの方は、インド人の官僚が主導する初期の開発時代に、日本の農法をもってやってきました。日本のやり方が素晴らしいことを、わかってもらうのに、最初は苦労されたらしいです」と。

「最初に蒔いたのは、主人が日本から持参したキュウリ、大根、白菜、ネギの種だった。言葉も通じず、あまり乗り気でない少年三人と始めた。パロの気候のよさも手伝って、村人たちが目を見張るほどの収穫だった。」西岡夫人は著書の中でこう語っている。

野菜の成功が出发点となり、王のお声がかかりで1966年、パロから6キロほど下流のボンデ村に日本式農業のモデルとしての「ボンデ農場」が開設された。日本式稲作はここから始まったのである。

「ブータンの稲作は今では、ほとんど日本式です。おかげで収穫量も沢山増えた。」これは、ジェレミさんの“お世辞抜きの評価”だ。

「これからヒマラヤ見物に行きましょう」。突然妙なことを言い出した。

「ここがヒマラヤでしょう？」

「そうなんだけど、ヒマラヤは三つある。一番南のヒンドスタン平原に近い低地がサブ・ヒマラヤ、その北の千メートルから4千メートルまでが、小ヒマラヤ、そのもっと北の6千から八千メートルの背の高い山々が本ヒマラヤです。ここは小ヒマラヤです。私はまだ一つのヒマラヤにしか、あなたがたを案内していない」

たしかにそれには違いない。ボンデ農場から、山道を四輪駆動車で登る。途中、ボンデ村を見下ろせる山の中腹の尾根に、西岡氏追悼のチョルテン（仏塔）があった。さらに一時間ほど上り詰めると峠に着く。標高3998メートル、ブータンの自動車道路の最高地点の道標が立っている。

小ヒマラヤの頂上に位置するチェレ峠の分水嶺だ。ここから道が二つに分岐している。一

つは徒歩二日間でチベット領に通ずる昔の交易路だが、国境閉鎖で通行禁止だ。もう一つは、車で一時間も九十九折を下ると、ブータンの西の谷間の古い都、「ハ」に突き当たる道路だ。

峠の展望台の千メートル下には川が流れ、パロ谷の黄金色の秋が展開していた。はるか北の雲の合間に白い山が顔をのぞかせている。「いやー、お連れしてよかった。あれが、大ヒマラヤですよ」と彼。ブータンの霊峰、チョモラリ（7314メートル）であった。

峠のテラスで、恐ろしい話を聞いた。ヒマラヤの洪水についてだ。

この日は雲で見えなかったが、この大ヒマラヤ山脈の手前には、四、五千メートルの山が連なっている。そこには、氷河の表面が溶けてできた氷河湖が数百ある。

地球温暖化で氷河が融けるスピードが速くなっており、水があふれる。湖を水源とする川が洪水を起こす危険があるという。

「1970年代に比べて小ヒマラヤの温度は確実に一度上がっています。1994年にはルゲ湖が決壊した」

「それどこです？」

「ブータンの古都、プナカ川の源流の氷河湖です。岩や流木交じりの濁流が、七十キロ下流のプナカの町を襲ったのです。二十人くらいの方が洪水で死亡、川岸のプナカのゾンも破壊された。決壊の後、ルゲ湖の水位は二十メートルも下がっていたという話です」

「パロ谷はどうです」。

「絶対安全とはいえないでしょう。平地の少ないブータンでは川沿いのわずかな土地に人口と農業が集中している。怖いです」

地球温暖化は、海面上昇をもたらし、海拔1メートルもない、南太平洋の島国はいずれなくなると騒がれている。温暖化が世界の屋根ヒマラヤには洪水をもたらすとは、初耳だった。ブータンではすでに、二十四の氷河湖に決壊注意報が出されているという。

ヒマラヤの「妻問い婚」問答

「妻問い婚」を日本では「通い婚」とか「言問い婚」ともいう。夫が妻の家に夜毎に通い、同居はしない母系制社会の婚姻形態だ。源氏物語とか、堤中納言物語など平安の王朝文学お馴染みの話で、平安時代の貴族が、夜毎に妻の家に通う。あのやり方のことだ。

ワンモ家に泊めてもらい、「妻問い婚」の実態に触れることが出来た。ワンモとはゾンガ語で「強い女」という意味だ。ホーム・ステイ最後の夜、この家の「強い女たち」はお別れの宴会を開いてくれた。

八歳の女の子の英語頼りでは、無理だと思ったのだろう。パロのホテルに勤め、英語を若干しゃべる若主人の女友達を呼んでくれた。参加者は、この家の家長のお婆さん、女若主人、そして友人のホテル女史、そのいとこというふれこみの中央銀行パロ支店の男性行員、英語はかなりできる。

それに、身元不明の若主人のボーイ・フレンドと思しき英語をしゃべらぬ若い男だ。石風呂を焚いてくれた例の「スサノオのアジャ」のことが気になったが、やはりこの宴席から、

外されていた。

中国の雲南省あたりの母系大家族では、同居のアジャは、「妻問い婚」で生まれた姉の子のしつけを担当し権威があると聞いている。しかしワンモ家では員数外らしく、一人、納戸にこもり酒でも飲んでいる様子だ。姪といってももはや三十過ぎ、駈け係はとっくにお役御免になったのかもしれない。

竹筒入りの「アラ」という名の自家製の米焼酎が何本も用意されていた。乾杯の後、全員で山の民謡を歌ってくれた。「めでた、めでたの、若松様よ…」の花笠音頭に良く似たにぎやかな節回しだ。“中央銀行氏”の通訳では、客人を歓迎する歌で「遠路はるばるよく来てくれた。私のお酒、酒盃に注いで、あなたの口まで運んであげる」との意味らしい。

宴会たけなわのころ、やりとりをテープに取った。私も含め、みんなアラの飲みすぎで出来上がってしまったが、断片的に判るところもある。

「“この人”私のいとこ」とホテル女史が言う。「ホウ。どんないどこ？」と私。「いとこは、いどこでしょう」「ご主人じゃないの？」「夫はテインプーに働きに出たきり、ずっと帰ってこない」彼女がいう。やはり、“この人”、通い婚の恋人らしい。

そこで中央銀行務めの“この人”に聞いてみた。「いどこですか？」「いや、彼女はともだち、いとこじゃないよ」と彼。なに野暮なこと聞いているの、といわんばかりだ。こんどは、中央銀行氏が質問してきた。「日本語でLOVEのことなんていうの？」「恋人さ」と私。「ホウ。KOIBITO」彼は何度も、KOIBITOとつぶやいた。これは、俺は彼女の恋人だ、のメッセージなのだろう。

この家の若女主人、キンザさんが、先刻から隣の男にマメに酒を注いでやっている。この三十がらみの農民風の男、お婆さんとも親しげに話している。昼間は見なかった顔だ。キンザさんが通訳の中央銀行氏を通じて言った。「いつか日本に行ってみたい。もし招待してくれるなら、“この人”も一緒に呼んで。でも無理しなくてもいい。」と。やはりキンザさんの“この人”は、妻問い婚の相手の男だった。すでに通い婚を卒業して、婿入りしているのかもしれない。

家付き娘が、男をひき入れる。夕食、朝食の接待を受けるうちに男は、娘に頭が上がらなくなる。畑仕事を手伝う。牛を放牧に山に連れて行く。山から焚き木を運んだりしているうちに、家付き娘に飼いならされてしまう。そのうち母親にも見込まれて、なし崩しに婿養子になってしまう。それがこの国の母系社会の婚姻形態であるらしい。

翌朝、迎えに来たジェルミさんに、先夜の宴会と彼女たちの“二人の新しい彼氏”の話をした。「それはブータンでは、ごく自然の成り行きです」との返事が帰ってきた。ブータン西部の谷間の村落、とりわけパロ地方では、結婚は、なし崩しの同居から始まり、結婚式などはないとのことだ。「離婚も簡単、この国では通常、苗字に当たるものがないし、そんなこと昔から世間の人には気にしていない」という。

しかし、最近政府がこのことを気にし始め、「コート・マリッジ」を奨励するようになったという。強制ではないが、裁判所への届け出婚の勧めだ。そうすれば妻に不当に？離婚され

た男は、裁判所に駆け込み、慰謝料を請求できると、政府は広報している。これもGNHの近代化政策の一つなのだろう。

ところで、母系制社会で、娘を夫の家庭に連れてきて夫の父母と一緒に住んでもらうことは出来ないのか？出来ないわけではないという。ただし、ブータンの農村では多額の結納金を娘のお母さんに支払わなければならない。ある種の“購買婚”といえる。やはり、男は大変だ。

パロ谷からインド平原へ

標高2千3百メートルの小ヒマラヤから、標高2百メートルのインド平原の国境の町、プンツォリンに車で向かう。ひとしきり、ブータンの母系制の話題が続く。ジェルミさんが、ふる里の青年時代の話をしてくれた。

彼の出身地は、ブータンの東端、タシガン県だ。このあたりは、ブータンの先住民の子孫が多く住んでいる。チベット移民が主流を占める西部のパロやティンプーのように、母系制家族一色の土地ではない。

家と土地の所有者が女性である割合は三割くらい、あとは父系家族制度が支配的だという。それでも、通い婚のような風習は若い人の間では盛んだという。

「十代のころ、焚き木集めに山に入ると、女の子達とツアンモ（相聞歌）を交わす楽しみがあった。歌声を頼りに森の中をさまよい、二人は出会い約束を交わす。村中が寝静まってから彼女の家に“ナイト・ハンティング”に忍び込んだら、先客と鉢合わせしたなんていうハプニングもある。もちろん、これ、友達のケースですけど。ナイト・ハンティングを重ねるうちに、入り浸ってしまう。そして家付き娘の虜になり結婚してしまう。パロ谷の農家に限らず、私の田舎でも良くあることです」と。

なぜ、ブータン全域に、ほぼ完全な形で母系家族社会が、残っているのだろうか？その理由はこうではないのか。

そもそもいにしえの氏族社会は母系制だった。多分、女性の生理的特長がそうあらしめたのだろう。

メスが子供を産む能力を失ってから、なお長生きする動物は人間だけだ。あらゆる動物の中で、独り立ちするのが極端に遅いのが人間の赤ん坊だ。子育てに手間がかかる。家族内で、子育て経験の豊富な閉経後の女性の役割が重要になる。そこで種族繁栄の見地から、お婆さんを家長にいただく“子育ての為の血縁集団”が形成される。

メスはお婆さんの跡継ぎとして家に残り、オスは成人すると集団から出て行く。それが母系制家族だ。

では、人間はなぜ母系制から父系社会へと転じたのか。父系社会というのはオスが家族内にとどまるオスどうしの世襲血縁集団のことだ。メスは成人すれば出ていく。子育て向きではないが、他の集団と争うときに父系制は圧倒的な強みを発揮する。

身体が大きく身体能力の優れているのはオスだ。血縁のあるオスどうしが家族という協力

関係を築き、他集団の攻撃に備える。集団と集団の戦い過程で、多くの国では母系制から、父系制へと移行していった。日本の父系制は平安末期から武士とイエ社会が発生した鎌倉時代にかけてだとされている。

ブータンでは今日においても父系家族よりも、母系家族のほうが数では上回っている。なぜ、よその世界では消えつつある母系制がブータンにしっかり残っているのか？

それはこの国が、平和な桃源郷だったからだ。人々は小ヒマラヤの谷間に集落を作り、他の集落との交流もほとんどない自給自足の暮らしを営んでいた。この国が統一され封建制度が確立されたのは17世紀であり、ブータン全土に点在する谷間の集落は外敵を意識する必要がなかった。だからオスのリーダーに守られることによって安堵する父系制社会に国を挙げて移行の必然性がない。今日においても然りだ。

インドへの道すがら私はこう言った。

「西欧やインドや日本の近代が父系制だから、ブータンの母系制は時代遅れか？そんな事はない。国には個性がある。中国の雲南省では、文革の時代、母系の少数民族に対し、父系一夫一婦制への転換を強制したという。しかしこの国では、共同体の基本的な柱としての母系制は温存されるのではないかと。」

「重婚は将来なくなるでしょうね。でもこの国の主流である、母系制は残ると思う。それがこの国の文化であり、伝統だから。文化を破壊すると国は滅びる」。私の問いに対するジェルミさんの答えだった。

(この話には後日談がある。ジェルミさんの“将来、ブータンから重婚がなくなる”の予想はマトを射ているようだ。

私が、この国を離れて二週間後、ジグメ国王と国民との対話集会があった。その際、四人姉妹を妃に持っている国王に、田舎の老人から質問が出た。

「国王陛下、畏れ多いことを伺いますが、陛下は複数の奥方をお持ちですが、いかがなものかと思えます。妻はやはり一人のほうが、よろしいのではないかと思えますか？」

国王は、一瞬、びっくりしたようだったが、苦笑しつつ答えた。

「複数の妻を持ったのは、私の過ちだった。複数の妻を持つ王は私が最後、今後、複数の妃を持つ王はありえない」と。

このやり取りは、国営放送BBSのテレビ画面で、報じられた。ジェルミさんの奥さん、青木薫さんのホームページ、シデの日記には、「こんな質問を王様にするなんて、勇気あるお爺ちゃん。お迎えの来るのが近そうなお爺ちゃんだから、何があってもいいや、ということかな。いずれにしても、天晴れな爺ちゃん」とのコメントがあった。

ジェルミさんの運転する四輪駆動車は、インド国境に向かって山をくだる。国道一号線だ。それまでは自動車道路というものがあった。1960年、インドの援助とブータン人の勤労奉仕で、着工一年半で完成した。道路幅路幅7メートル、昔、馬と徒歩で往来した山道を拡幅し、橋を架け、トンネルを作り開通させた。

徒歩で一週間かかったルートが、今では六時間から八時間で国境まで下ることが出来る。

断崖のはるか下を流れるワン川の急流が突然姿を消した。川がすっぽり導水管の中に吸い込まれてしまったのだ。チュカの地下発電所だ。発電量330メガワット、75%がインドに売られている。

さらに下流のゲドの町に、大規模水力発電基地をインドの援助で建設中だ。出力1020メガワット、大型原発一基分に相当する「タラ地下発電所」だ。2007年に完成する。ほかにも一箇所大発電所を計画しており、すべてが稼動すれば、電力のインドへの売り上げで、この国のGDPの25%相当分を稼ぎ出すことができるという。

蒸し暑くなってきた、と思ったら、崖下の低い山の向こうに、大河が見えてきた。「あれがインドです」とジェレミさん。ヒマラヤの濁った青空はなくなり、一面ヘイズがかかり始めた。

湿気で、車の窓が曇る。ドテラ風の民族衣装「ゴ」を律儀に着用して、運転していたジェルミさんが、たまりかねて、もろ肌脱ぎになる。車の検問所を通過し、一挙に坂道を下ると、国境の町ブンツォリンだった。

標高200メートル、ブータンの南の玄関だ。椰子の木、バナナ、ニセアカシヤ、植生は亜熱帯だ。インドとの交易で栄え、人口五万人の商業都市だ。国境に建てられたブンツォリン門の向こう側は、インドの町ジャイガオンだ。ブータン向けの物資の集積地だ。

門をくぐりインド側に入った。とたんにインド臭くなる。リキシャ、はえ、屋台、物乞い、ゴミの山々、車の排気ガス、猛烈な雑踏だ。ブータンならどこにでもお目にかかれた「チョルテン」(仏塔)、「マニ車」も、経文の書かれた「ダルの旗」もない。

代わりに街のいたるところに極彩色の鬼のような神様の像の飾り付けがあった。「ドルガブジャというインドで人気のある女神です。ヒンドウ教のシバ神の奥さんです。明日から、ドルガブジャ祭りがはじまります」

ブータン式“ドテラ”を脱いでTシャツとGパン姿に変身したジェルミさんが教えてくれた。

第七章 ブータンよ、何処へ？ “一周遅れの走者”ではない

グローバリゼーション 対 「小国の地政学」

ヒマラヤの秘境ブータンは、ぼんやりしていたら大国の餌食にされて、滅亡していたはずだ。ところがどっこい、したたかに生き残り、“低所得国”卒業の日も遠くはない。かつてヒマラヤに栄えた仏教王国は、次々に滅ぼされた。チベット然り、シッキム然りだ。そして、ブータンだけが生き残った。なぜなのか？

その秘密については、この本の一章から六章で説明を試みた。

ひとことで言えば、独特の文化と歴史を土台に、独特の“国のかたち”を形成してきたからだ。ブータンは世界標準から見れば「異常な国」だ。この国が「普通の国」になったらおしまいだ。大国によって飼育されたグローバリゼーションという名の、世界を同質化する怪物に呑み込まれ、融けてしまうだろう。

ブータンの地政学のエッセンスは、国王が1972年に名づけたGNHという独特の国家ビジョンだ。最初は一笑に付されていたが、目立った成果が出てきた。2005年暮、国王は「あと、二年で、低所得国を卒業できる」と宣言した。

ブータンは、20世紀後半になって、鎖国政策を捨てて地球社会入りした最後の参入者の一つだ。第二次大戦後、西欧の植民地から独立し、国際舞台の一員となった東南アジアやアフリカ諸国よりも、後発国だ。

最貧国として、国際経済に登場したが、世界の多くの人が気付かぬうちに、地道な成長を遂げ、教育と医療は無料の福祉社会を実現した。しかも、世界一流の自然保護政策、治安のよさ、仏教の心に根ざした穏やかな人々の暮らしぶりなど、ヒマラヤの桃源郷の面影をしっかりと維持している。

ブータンは、したたかである。先進国や国際機関の援助にすぐ飛びつかなかった。後発国の利点を生かし、アフリカやアジアなど途上国の開発の失敗例をよく観察していた。国益に合致すると判断した案件の海外援助はちゃんと受け取ったものの、グローバル資本主義や、国際援助機関が推奨する市場経済万能の開発思想については、警戒的で距離を置いた。

グローバリズムは、市場経済は自立的で自己完結的であるとする合理主義思想の上に成り立っている。市場原理の地球的普遍性が強調され、国家、地域、文化、社会の持つ個性は無視される。グローバル化はその国の歴史や、文化が育んだ倫理や価値観を侵食し、そこに住む人間を、市場の中で物質的快楽追求に明け暮れるホモ・エコノミックスに仕立てあげてしまう。

九十年代後半、グローバリズムの影の部分で批判する論調が、世界的に高まってきた。グローバリズムは人間を幸せにするのか？という疑念である。GNH思想の検証によって判ったのだが、ブータンは、早い時期からそれを予見していたように思われる

この国は固有の文化と価値観を防衛しつつ、40年かけてやっと“中進国”の門までたどり着いた。ということは、ブータンは、一周遅れの走者なのだろうか？グローバリズムは必ずしも幸福をもたらさない、という教訓を得るのに、世界は少なくとも十年以上の無駄な歳

月を費やした。

この時間的ロスを考えるとこの国は、決して一周遅れの走者ではない。一見遅いようだが、寄り道せずに一周節約して、ゴールインする“亀”の走者ではなかったのか。

ブータンを、周囲を確かめつつ、ゆっくり進む利口な“亀”たらしめたのが、この国特有の「小国の地政学」だ。地政学は19世紀のヨーロッパで生まれた。自国の地理的な位置が周辺国との間に、どのような係わり合いをもたらすか、を究める学問だ。

地理といっても、自然の地形だけでなく歴史、政治システム、経済制度、軍事、それに文化や宗教的価値観をも、考慮に入れて国の進路を決める。これが地政学的国家戦略だ。

ブータンの地政学の特徴は、外延的ではなく内向的であり、攻撃的ではなく防衛的である。周囲から隔離されたヒマラヤの谷間に建国されたという、地理的な事情がそうさせたのだ。地政学へのこだわりが、この国の安泰と発展をもたらした。

地政学が、世界を“一つの地球”と見なす経済のグローバリズムとは反対概念をもつ“個の空間”を重視する思想だったことが、幸いした。

ブータンの地政学は、国の置かれた小空間と、そこに刻まれた独自文化の産物だ。その内容については第四章、「GNH」—弱者の地政学の集大成—で詳しく述べた。なぜブータンが、独自性にこだわり続けたのか。すでに15年前、当時35歳だった第四代ジグメ・シンゲ・ワンチュック国王が、米国のメディアに対し、明確に答えている。

問い なぜブータン化政策を推進するのか？（1990年のブータン南部における、ネパール人暴動に対してとった国外追放措置について）

答え 何らかの政策を取らなければ、独立国家としてのブータンの独自性は今後20年のうちに完全に失われるだろう。ブータンの国境は穴だらけだ。わが国は土地や仕事を持たぬネパール人のたまり場になっている。

問い 西欧で教育を受けてきたあなたが、ブータンの西欧化を嫌うのはなぜか？

答え ブータン人は私も含めてみな保守的ではない。勤勉でもない。楽しいこと、遊びやレジャーは大好きだ。ブータンは東洋のスイスになればよいという意見もさかんに出始めている。しかし我々には、そんな気はない。急速な開発と伝統・文化とのバランスをとりたいと思っている。西欧の真似はしたくない。

ニュース・ウィーク日本語版、1990年11月発行の、国王インタビュー記事からの引用である。

降って湧いた国王の退位宣言

ブータンが、グローバリズムに揺さぶられながらも、一つの国、一つの民族とし、まとまってきたのは、仏教という共通の心の基盤を持っていたからだ。その中で若くして王位についた第四代国王の果たした役割が、いかに大きかったか。指導者としての王の哲学と思想については、第四章の「GNH」で詳しく述べた。王は国民の尊敬と人気を一身に集めていた。

ところが、2005年12月17日、建国記念日の祝典で国王は、「二年後に退位し、王位を皇太子に継承させる」と宣言、人々を驚かせた。しかし、国王はいずれ引退するのではないかと思わせる予兆はあった。

ジグメ国王は、2003年、国王の65歳定年制や、国王の罷免の権限の議会への付与を盛り込んだ主権在民の憲法草案を作成、国民に信を問うていたからだ。これは王の提唱するGNHの柱の一つで、ブータン国を長持ちさせるための「より良き統治形態」(Good Governance)の提案だ。

だが、王の提唱する政治の近代化の必要性を徐々に理解した国民も、現国王が、憲法草案の定年を大幅に残し、五十代の若さで王位を皇太子に譲り、早い時期に引退を表明するとは、思っていなかった。

この国の国営新聞、KUENSELは「国王の早期交代宣言に、人々は衝撃を受け言葉を失った」と報じた。同紙が伝えた王の国民へのメッセージの概要は以下の通りだ。

一、“低所得国”卒業宣言

我々は、開国以来、九次にわたる五カ年計画を実施してきた。この間、ブータンは国防上の問題を乗り越え、国家安全保障の強化を達成してきた。政治体制改革と開発計画により、福祉は目覚しく向上しつつある。来年にはタラの水力発電計画が完成し、毎年40億ヌルタム(8900万ドル)という巨額の収入がもたらされる。

国際社会で、主権を保ち、独立国家としてやっていく重要な要件は、経済の自立度を向上することである。自分の足で立つこと、これは国家の目標としてずっと掲げてきた。私は、ここで大変喜ばしいことを皆さんに伝えたい。

それは2007年までに、ブータンは国連の定める、“低所得国”の分類を脱するであろう、ことだ。よその多くの国々が、現在の発展水準に達するまでに数百年かかっている。ブータンは開発計画開始44年で、社会、経済の分野で目覚ましい発展を達成した。これは、政府の政策と国民の努力によるもので、ブータンの誇りである。

(筆者注、ブータンの“低所得国卒業”の国王発言の根拠は、世界銀行の分類に基づく試算とみられる。世銀は、現在、一人当たりGNP825ドル以下の国を“低所得国”、826ドルから3255ドルまでを“下位の中進国”、3256ドルから10065ドルまでを“上位の中進国”、10066ドル以上を“高所得国”とするカテゴリーを設定している。

国王の指摘したタラ水力発電所は、インド向け輸出電力の大発電所(=第六章の「パロ谷からインド平原へ」を参照=完成すれば、一人当たりGNPを120ドル以上押し上げる経済効果を持つ。その結果、2007年までに、ブータンは世銀番付で、“下位の中所得国”に昇格、一人当たりGNP1000ドル突破を達成するだろう)

一、議会制民主主義の導入の呼びかけ

王国は初の憲法草案作成の過程で、国民の関心をいかに呼び覚ますかについて心を砕いてきた。私は各県を訪問し、憲法に関する公聴会を開いたが、そこで得られた感触は、ブータンに議会制民主主義制度を導入するのは時期尚早だという懸念を国民が持っているというこ

とだ。2006、7年には選挙管理委員会によって、議会制民主主義と選挙制度の普及運動が実施に移される。

私が地方分権化と国民への権力の移譲を開始してから、26年経つ。いまや国民が自分自身の手で、良き統治を実施し、国家の関心事を最大限に遂行する政府を選出することが出来るようになったと確信している。2008年には議会制民主主義の下で初の選挙が行われることを、国民一人、一人がしっかりとわきまえてもらいたい。

一、皇太子への王位の早期移譲

2008年には、第五代国王として、皇太子、ジグメ・ケサル・ナムギエル・ワンチュックが即位することをここに表明する。彼が国王として、最大限の能力を発揮するには、できるだけ多くの経験が必要である。

第五代王の時代においても、国家がさらに発展し、あらゆる国家目標、希望、志が達成され、ブータン国民が更なる満足と幸福感に満たされることを願っている。

タシ・デレ！（吉祥あれかし）

以上、第四代国王、五十歳の決断である。国王は声明発表後、対話集会に出席、君主による専制主義は国の為にならないことを、自ら訴えている。歴史上、世界には数え切れないほどの王国が存在したが、王がためらう人民に対し「国の将来は民の選択にまかすべきだ」と説得に回った例は、このブータン王が初めてだろう。

ジグメ王は、十数年も前から、自分に失政があればいつでも退く用意がある、と声明してきた。失政ではなく成功の中での引退は、21世紀の今日、王制は一般的な政府の形態ではないことを、よく承知していたからだろう。憲法草案に、国民に王の退位を求める道を開いた条項を、自ら加えたのもそのためだった。

「王制の将来は人民意思にゆだねる。人民は統治システムを選ぶ自由を持っている」。これが王自身の政治哲学なのだろう。

この点について、元世銀副総裁、西水美恵子さんは、1997年の会見で、国王の真意を確認済みだ。彼女によれば、王は“人の世に不変なものは変化のみ”と前置きして、自ら政治システム改革の話題を選び、次のように語ったという。

「君主制度はもう国民の為にならない。国の将来は民の選択に託すべきだ。問題は民主主義の可否ではなくて、具体的にどういう民主主義を選ぶかだ。各国の経験から長所を取りいれ、短所を学び、わが国の歴史と文化に適した民主主義を作り上げねばならない。世界各国の憲法は手に入るものは全部読んだ。日本の憲法も英文で読んだ。

改革は世の常、逆らえるものではない。積極的に先取りするほうが賢いのに国民は、今のままでいいと反対する。私は国王になりたくてなったのではない。偶然、その命に生まれただけだ。自分がもし悪玉だったら、わが民はどうするつもりなのか」と。

（雑誌「選択」2005年8月号、“思い出の国、忘れえぬ人々”から引用）

君主制の欠点は、一人の人間にあまりにも多くのことを託さねばならないことだ。王が賢者ならよい。しかし王が凡庸だったり、悪人だったらどうするか。そこが困る。民主制にも

欠点がある。物事の判断をしっかり出来る個人と成熟した社会システムが不在だと、この制度はうまく機能せずに衆愚政治に陥る、そこが問題だ。

ジグメ国王は、この二つの統治形態のどちらが、ブータンの歴史と文化にふさわしいのか、長年考え続けて来た。苦悩の末、到達した折衷的なブータン式民主主義、それが、「議会主義を基盤とする主権在民の立憲君主制」への移行だった。

仏教映画「旅人と魔術師」を見る

国王の提示した初の憲法草案には、どの宗教も平等に扱われると規定されている。しかしこれは、ブータンが仏教王国をやめたことを意味するものではない。同じ条文には、「国の霊的、精神的な遺産への忠誠」を国民に義務付ける規定が盛り込まれている。霊的な遺産とは、チベット密教に他ならない。信仰の自由の規定の有無にかかわらず、ブータンは仏教国なのだ。

国王の声明で明確になった二つの柱、“民主制の導入”と、“低所得国”からの卒業は、政治と経済の目覚ましい近代化の進展を示すものだ。だが、国が近代化すればするほど、霊的な遺産、すなわち仏教への忠誠心が重要になってくる、少なくとも国王はそう考えている。

なぜならば、ブータンの国家主権と民族のアイデンティティを失わないためのよりどころは、ユニークな文化しかないからだ。文化を形成する心の支えが仏教だ。政治システムの近代化の為の国民の啓蒙運動と並行して“仏教共同体”の再認識という心のキャンペーンにも、力を入れている。

「旅人と魔術師」(Travelers and Magician's)という映画を観る機会があった。2003年の制作で、監督のキンツエ・ノルブ氏は、位の高いラマ、つまり僧侶だ。しかも彼の祖父はブータンにインドから始めて仏教をもたらした、グル・リンポチェの第十九代目の化身だった。

1961年生まれで僧院育ちのノルブ氏は、ロンドン大学留学中、映画に惹かれた。その後ハリウッドで、映画製作を学び、子供時代の仏陀の役で映画に出演したこともある。処女作は、ブータン映画「The Cup」、サッカーのワールド・カップに熱中するブータンの若い坊さん達を描く。一年のうち、数ヶ月は瞑想の日々を送っている。

「坊さん達は上座に座っているだけで、若い人の疑問に答えていない。仏教は現代的質問にも、ちゃんと答えを持っているのだ。それを映画で表現した」と監督はいう。アメリカを夢見る男を題材に、「幸せとは何かを考える」仏教説話映画だ。使用言語はゾンカ語だが、英語の字幕がついていた。

主なキャスト：アメリカかぶれの若い役人ドンダップ、旅の坊さん、村の農民と19歳の娘ソナム、+<夢の国の怪談の世界に住む妖艶な魔女デキ、恐怖の老人、そして、そこに紛れ込んだ女たらしの若者、タシ>

筋書きは以下の通りだ。

山奥の村に、長髪で西洋かぶれの、いかれた役人が赴任した、しかし新人とはいえ村人にとっては、エリートのお偉いさんだ。村に赴任後わずか一ヶ月、もう田舎が嫌になった。知り合いの

アメリカ人から、米国行きの招待状が来るのを待ち望んでいた。ついに来た。村を出る算段をする。両親の供養と偽って県知事に休暇をもらい、ヴィザ取りのため首都テインブーに向かう。

「これぞ人生のチャンス。中国人なんか命がけでアメリカに行く。あちらに行けば、俺のもらう月給なんて半日で稼げる。もうこんな国に用事はない。ルンルン」と同僚に言い残して。ところが、律儀な村人に挨拶されたり、土産をもらったりしているうちに、週に四便しかないバスに乗り遅れる。

バス停には、坊さんとリンゴ売りのオジサンがいた。便乗できる車が通れば乗せてもらうが、なければ二日間歩いてテインブーを目指す急がない旅人だ。当てにしたヒッチハイクのトラックが来ない。道路端で野宿することになった。役人は焦った。「こんなところで、もたもたしているとアメリカに行きそこなう」と。

坊さんが言った。「ホウ、アメリカか。お前の夢の国なんだな。“欲望は苦悩を作る”という仏陀の教えを知っているか？夢の国とは恐いところだ。気をつけろよ。あそこは魔術師の世界だ」。夜が更けた。坊さんは焚き火を囲み、ドラミン（ブータンの三味線）の弾き語り、夢の国の怪談を語り始めた。

< 昔々、遠い所に、タシという怠け者で、いつも女のことしか考えていないヤサ男がいた。親の言いつけで、村の寺子屋に通い、ラマから魔術を学んでいたがモノにならなかった。迷信だとバカにしていた。ある日、彼は野原で酒をしたたか飲んだ。気がついたら連れてきたロバが、白馬に変身している。白馬にまたがったとたんに、雷鳴がとどろき、嵐がやってきた。白馬は山越え、谷越え、夢の国めざして疾走した。彼は気を失った。馬の姿はなく、暗闇の中に一軒家があった。

全身、怪我をした彼は、一夜の宿を乞うた。老人と妖艶な若い女性の二人暮らしだった。女の名前はデレク、ぞっとするほどの美女だった。タシはたちまち、デレクの魅力の虜になったしまった>

ここで、画面は現実に戻る。夜が明ける。トラックが一台やってきた。テインブー行きではなかったが、坊さんと役人とリンゴ売りは途中まで、乗せてもらうことにした。トラックの荷台には二人の先客が便乗していた。役人の赴任した村の、父と美しい19歳の娘で、行き先は同じテインブーだった。

「あんた、うちの村に新しく来たお役人様じゃないか」

「おう。この子あんたの娘か。村では見かけなかったが…」

「テインブーで働いているんだ。一緒に行く途中だ。あんたはどこに行くんだ」

「遠いところだよ。お前なんかにはわからないところだ」

そこで坊さんが言った。「この男、夢の国に行くのだって。」

「ホウそれどこだ。テインブーか？」

「もっと遠いところ、アメリカさ」

ここで、トラックが故障、一同、道路端に車座になり弁当を食べる。役人は、夢の国の怪

談の続きをせがんだ。

＜老人はタシに「家に帰れ」といった。だが、道はない。老人は、タシを溪谷の崖淵まで伴った。「ここから、沢を下れ、二日でどこかの村に着く」と命令した。タシは、崖下の谷を、さまよい歩き精魂尽き果てた。気がついたら再度、一軒家の前にたたずむ自分を発見した。

老人は恐い顔をした。妖女デレクは、喜びの表情を隠すかのように、顔を伏せた。「どうしてこんな山奥に住んでいるのか？あんな美しい女房持って」タシは尋ねた。老人は忌々しげに答えた。「若い奴が来て、俺の女房を奪うからだ」と。

二人は老人の目を盗んでは、密通を重ねた。ある日、デキは妊娠している自分に気づいた。彼女は、老人の仕返しを恐れた。

「あの人は年寄りだが、山刀を使う。精神も若い。特に嫉妬心は人並み以上よ」とタシに言った。タシは恐怖におののいた＞

トラックの故障が直った。役人と坊さん、それに村の父、娘の四人は、テインプーへの分かれ道までトラックで運ばれた。ここで次の車の出現を待つことにした。ロバ一匹やっ来て来ない。四人は野宿の覚悟を決めた。道端で火を起こし、夕食の支度にとりかかった。

役人に坊さんがささやいた。「おい。あの同じ村の綺麗な子、お前のこと好きらしいぞ。」父親が言った。「あんた、村に帰って来いよ。いいとこだよ、オラが村は。何でアメリカなんか行くんだ」「俺は金持ちになりたいんだよ」役人はぶっきらぼうに答えた。

役人は、村の娘が気になりだした。焚き火で炊事している彼女の横に座った。「名前はソナムといったな、年は幾つだ」

「19歳よ」

「お前美人だし、頭もよさそうだ。勉強して都会の上級学校受けたらどうだ。」

「試験なら受かっているわよ。でも入学はあきらめた。私、体の弱いお父さんの面倒見るため、村に住まなくてはならないの」

「あんた、料理作ったことあるの？」ソナムは、焚き火の灰で目が見えなくなった彼の顔を、指で優しくぬぐってやった。そして言った。「タバコ、ダメよ、吸っては。身体に悪いから」と。彼は、素直にタバコの火を消した。

四人はその晩、道端でキャンプした。役人は、夢の国の怪談の結末が知りたくなった。焚き火を囲んで、坊さんの弾き語りが始まった。

＜「彼、わかったら私を殺すわ。どうしよう」とデキ。タシは決心した。裏山からトリカブトを採集し、二人で酒に混ぜた。老人が狩から戻ってきた。「デキ、腹が減った。酒と飯をだせ」不機嫌な声で命令した。

タシは、震える手で毒入りの酒を老人の杯に並々と注いだ。老人はジロリとタシに一瞥を加えたのち、一気に杯を空けた。何度か杯を重ねるうちに、老人はがっくりとうなだれ、息を引き取った。

タシは、逃げ出した。「タシ行かないで」デキの声が追いかけてきた。断崖を飛び降り沢を

下るうちに、声が消えた。タシは戻った。溪流の深みの中に、かんざしが浮いていた。水中には晴れ着をつけた女性が上向きに横たわっていた。デキの溺死体だった。

野原で、タシは目を覚ました。傍らに、酒の筒が転がり、白馬ではなく一頭の見慣れたロバがたたずんでいた。彼は覚った。「アレは、恐ろしい夢の国の夢だったのだ」。遠くで弟の声が聞こえた。「そろそろ家に帰ろうよ」といっているようだ。>

翌朝、テインプーに向かうクボタの耕運機がやってきた。「先を急がぬ」という村の父娘の勧めで、役人と坊さんは、耕運機に乗った。

「昔々、美しい村に若い役人が住んでいた。彼は金儲けがしたいと、はるか彼方の夢の国をめざした。桃の花は綺麗だ。でも花なんて一時的なものに過ぎない。それなのに、彼は、アメリカに……」と坊さん。

役人が、坊さんを遮り、あとを続けた。

「その役人は、アメリカに行くと言い張っていた。ところが、旅の途中で、自分の村に美しい娘と幸せがあることを発見した。役人は夢から覚め、とうとうアメリカ行きを止めてしまったとさ」

役人と坊さんは、顔を見合わせた。遠くに女神の山、チョモラリの白い頂が見える。ヒマラヤの峠は春たけなわだった。

比較文化論：“仏教”と“アメリカ”

この映画は、ブータンで大ヒットした。生き仏と崇められている46歳のラマ僧の監督によって製作された映画であることが、人気を呼んだ理由であることはいうまでもない。だが、それだけではない。この映画の題材である“アメリカ”と“仏教”が、今日のブータンの若者にとって一番気になる二つの文化的存在であるからだという。

ブータン取材旅行中、20代三人、30代一人、40代一人の男性に、簡単なアンケートを試みた。

設問は①「仏教を心の底から信仰しているか？僧侶を尊敬しているか？」

②「あなたは今幸せを感じているか？どのくらいの収入があれば満足か？お金と信仰のどちらが大事か？」

③「どの国が一番好きか？行ってみたい国はどこか？脅威を感じている国、嫌いな国はどこか？」の三項目だ。

問いの①は、全員が、心の底から仏教を信じ、僧侶を尊敬している。そしておおむね毎日祈りを捧げている、との回答があった。仏教の真髄は「自己を超越しようと試みることだ」という答えもあった。

問いの②は、失業中の一人の若者を除き「ブータン人であることに日々幸せを感じている」との返事が戻ってきた。収入については、「多ければ多いほど良いとは思わないが…」との但し書きつきで、現在の収入の約二倍に相当する月額八千から一万ヌー（170～210ドル）

が欲しいと答えている。信仰もお金もどちらも大切だが、ある程度の収入さえ確保されれば、それ以上の金は欲しくない。なぜなら「信仰は無限だ」との回答もあった。

問いの③では、アメリカの人気を群を抜いていた。一番好きな国のランク付けで、アメリカを一番に挙げたのが、五人のうち四人、あとの一人は無回答だったが、一番行ってみたい国として、やはりアメリカをあげている。

二番手は、英国か日本をあげる人が多く、ついで仏教王国のタイ、山国のスイスが続き、ネパールとインドは人気がない。とりわけインド人への警戒心は強い。チベットを占領した中国は嫌いな国のトップで、ブータンの安全保障上の脅威だと見なされている。

ブータン人のアメリカ好きは、想像以上だった。アンケートの手配をしてくれた、ガイドのジェルミさんに、理由を聞いてみた。「多分それは、ブータンの伝統的仏教文化と正反対に位置するのが、アメリカ文化だからでしょう」という。異なるものへの興味である。米国の物質的豊かさと大衆文化が、敬虔な仏教徒であるブータン人を誘惑しつつある。

欲望の塊であるアメリカ文化から、ブータンを防衛するのが、この仏教説話映画の目的だった。にもかかわらず、ブータンの若者にとっては、アメリカは、“気になる国”であり続ける。この問題をどう考えたらよいのか。

例のKUENSELのバックナンバーをあさっていたら、解答の手がかりが見つかった。

1993年5月の同紙に載った、アメリカの大学留学中の学生の次のような要旨の投書だ。

「アメリカに住んで三年になる。途上国であることと、先進国であるということは、人間にとってどんな意味を持つのかを、最近、考えてしまう。ブータン人の誰もが車に乗り、冷暖房つきの家に住み、ビデオ、冷蔵庫、電話等を持つようになったら、ブータンも先進国入りしたというのだろうか？

もし、そうだとしたら、こういう恩恵を手に入れるにはどんな代償を払わねばならないかを考えてしまう。ブータンの文化と伝統が大切にしてきた家族とか共同体のような価値体系を捨てて、人々が個人主義に徹し、ひたすら富とか財産の蓄積にはげむことを意味するのか？

そのような生き方は、仏教が説く“脱欲望”の教えと、相容れないのではないのか。そうだとすると、先進国になるということは、ブータン人がブータン人でなくなるということではないのか？

アメリカ人の生活は、墮落している、などというつもりはない。物質的な恩恵は、身体的な面では、快適さをもたらしてくれる。しかし、情緒や精神面では、多くのアメリカ人は、ブータンの庶民に比べて、ずっと貧しい生活を営んでいる」

「自ら足る、を知るべし」を説く仏教哲学と、「多々ますます便ず」の物質至上主義との相克、ブータンの若者はその狭間にあって、思い悩む。だが、アメリカ生活を送ったこの留学生の「幸せとは何か」の自問自答の中に、すでに答えが出ているのではないのか。

それは、「ヒマラヤのブータン国が、ブータンでなくなっても、アメリカ国にはなれない」ということだ。

この自明の理のもとで、“曼荼羅共同体”の哲学が輝きを増す。「ブータン人はヒマラヤ仏

教最後の砦の中に生きている。仏教が滅亡すればこの国は消滅する」。これは“小国の地政学”が発見した不変の公理でもある。

図解：似て非なる国、ブータンと日本

ブータンを訪れた日本人は、「古き良き日本に行つたみたいで、ブータン人に親近感を覚えた」という人が多い。彼らは、顔も似ている。この国の先住民のひとつレプチャ族の古語は、日本語の元祖だという学者もいる。彼らは、ドテラのような民族服(ゴ)をつけ、信心深く、礼儀正しい。米、餅、味噌、そばを好み、米の麴から醸造した酒をよく飲む。里山の森と棚田が美しい。マツタケもある。

だから、遠いヒマラヤで、「日本人の原型を発見した」と思い込むのも無理もない。観光旅行ならそれでよい。だが、政治学、とりわけ、“国家と安全保障”という見地から見たブータンは、日本とは全く異質の国だった。もし、日本が“普通の国”だとしたら、ブータンは“異常な国”だ。

ではどう違うのか。まず、領土、人口、資源力、工業力、軍事力など、その国の国力を形成する基礎的条件が異なる。当然のことながら日本がブータンを圧倒的に引き離している。ところが、国を愛する文化的素質、国防意識、国家の団結力、外交力の水準ではブータンに軍配を上げざるを得ない。これらの要素は、国力を外に向かって発揮せしめるエンジンだ。小なりといえども、ブータンは頑張っており、国家防衛の意志力と戦略形成能力の面で、大国日本を引き離している。

米国の安全保障学者、レイ・クラインは、「国力とは一国が他国の政府に対して行使する強制力、もしくは抑止力」と定義し、以下のような国力測定方程式を作成した。

$P(\text{国力}) = (C + E + M) \times (S + W)$ 、Cは人口、領土などの基本要素、Eは経済力、Mは軍事力、Sは戦略目的、Wは国家戦略を遂行する意思だ。この概念を援用して、ブータン、日本、そしてブータンがもっとも親しみを感じているタイ王国の三カ国について、以下の六つの項目を設定し、物心両面から国力比較を試みた。

①人口と領土(C)、②はGNP、エネルギー、鉱物、食糧などの資源支配力、技術、貿易力を含めた総合的な経済力(E)、③は軍事力(M)で、大国ほど強力だ。

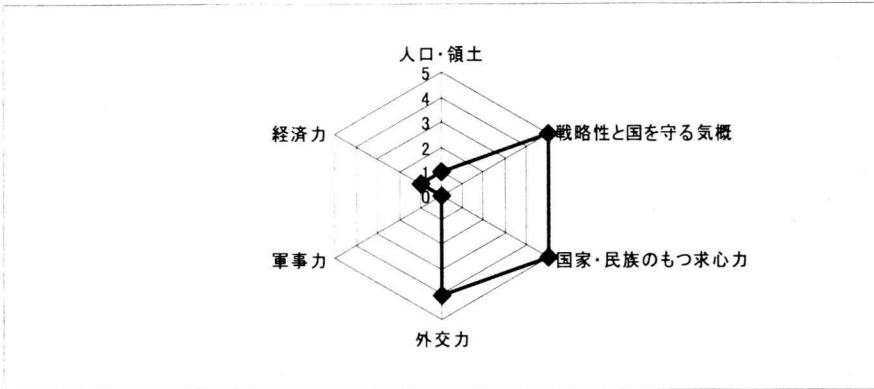
しかし、国力はこれだけで決まるわけではない。以上の基本要素では劣っている小国も、優れた智恵と強い意志力があれば、自国を守りぬくだけでなく、大国と十分に張り合うことが出来る。それが、④外交力、⑤国民の団結力の源泉である、国家と民族の求心力⑥戦略性と国を守る気概、の三つのポイント(S+W)だ。

それぞれのポイントについて、1から5点で評価し、数字を入れてみた。グラフを見ていただきたい。三カ国の“国のかたち”がいかに異なっているかが、はっきりするに違いない。

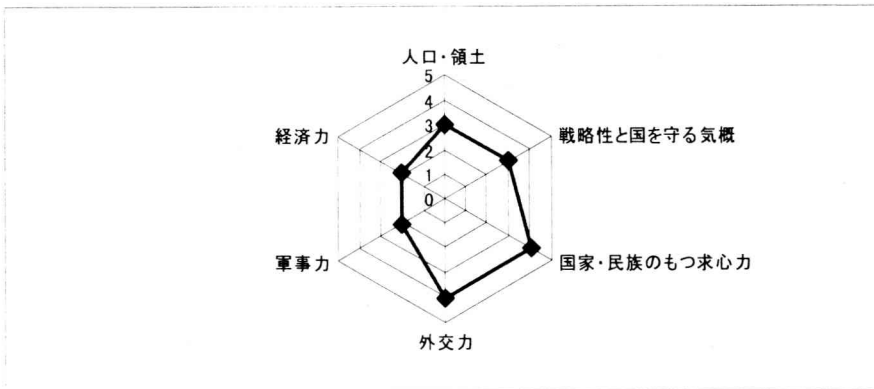
まずブータンだ。人口、領土と経済の規模は小さいので、それぞれ得点は1点、治安の維持は6千人の警察軍があたっているが、対外的安保はインド軍任せなので軍事力はゼロと評価した。しかし外交力はなかなかのものだ。国連とインドをたくみに利用して領土の安堵を

「こうも異なる」国の“かたち”
 -似て非なる国 日本とブータン-

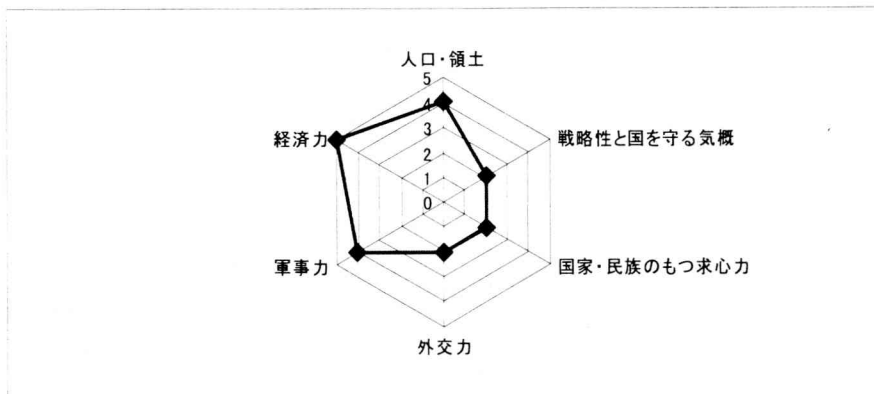
ブータン王国



タイ王国



日本



確保し、その他大国とは距離を置くという、計算づくの外交を評価して4点。王と仏教を軸とする文化的同一性を基盤とする“国民の団結力”はおそらく世界一で満点の5点、“戦略性と国を守る気概”も、「小国の地政学」と命名するのにふさわしく同じく5点だ。

ブータン王が、もっとも親近感をもち、首都バンコックに直行便を飛ばしているタイ王国はどうか。人口、領土は世界の中級国家並で3点。経済力は80年代後半の外資導入と加工貿易立国の成功で3点。軍事力は2点といったところか。

タイの外交力のしたたかさは、歴史的にも定評がある。南、および東南アジアの国が欧州諸国の植民地にされてしまった時代に、独立を保った。国家の指導者にずるさと縦横の機略があったからだ。第一次大戦では、土壇場でドイツに宣戦を布告、欧米に自国を戦勝国と認知させた。

第二次大戦では日本についたにもかかわらず、日本敗戦後わずか18ヶ月で戦前の地位を回復した。タイの地政学の要諦は、①アジアで一番強い国につく（冷戦中はアジアで一番強いアメリカにつき、ベトナム戦では、米兵の休養施設を提供した）、②国際情勢が流動的な場合は、様々な代案を常に用意する、の二点だ。タイの“外交力”は今日でも4点の実力はある。

国王に対する尊敬の念は強い。毎夕、国王賛歌のメロディが街頭に流れ、街を行く人はその場で直立不動の姿勢をとる。ブータン同様、仏教、国王、政府が国体の三要素を構成している。だが、政治家が不人気なのが欠点で“国の団結力”は、4点か。もともと戦略性のある国柄なのだが、最近の内政の泥沼に足をさらわれており“国を守る気概”については、これを発動する機会がないので、とりあえず3点としておく。

ところで日本はどうか？人口、領土4点、経済力5点、軍事力4点と国力の基礎的要素は十分すぎるほど備えている。だが、それも宝の持ち腐れだ。自分の国の悪口を言うのは天に向かってつばを吐くようなものだ。でも、あえて言わせてもらうなら、日本は国力発揮の為のエネルギー（S+W）が不足している。国益という概念が明確でないため外交力が弱く、周辺国からなめられている。外交力はせいぜい2点ではないのか。

いわゆる戦後民主主義の下で、共同体意識は希薄になり、心はバラバラである。“国家団結力”の現状は残念なことに、せいぜい2点と評価せざるを得ない。“戦略性”と“国を守る気概”については、“平和憲法”に邪魔されたせいか、ひいき目に見ても2点だ。

ブータンと日本。「国力測定方程式」にもとづいて、作成した“国のかたち”を示すものの巣のグラフの形状が、あまりにも対照的ではないか。持てる国日本とは逆に、基礎国力の足らざるところを意識と戦略性（S+W）で補い、今日を築き上げてきたのがブータンだ。

国王はこういつている。「ブータンは小国だ。経済力も軍事力もない。人口も少ない山に囲まれた国だ。そういう国にとっては、固有の文化を保有し続けるしか、生き残りの道はない。唯一、ブータンの国家主権とアイデンティティを維持し続けるための、よりどころは独自性だ」と。

持たざる国ブータン。小国であるとの自己認識が、国民の戦略的思考を研ぎ澄まし、国を守る気概を高揚した。持てる国日本は、このままでよいのか？日々、そのことを考えさせられた私のブータン紀行であった。

第八章 付録：シッキム紀行 ―消えた仏教王国を訪ねる―

「ある日気がついてみたら、国がなくなっていた」そんなこと、万世一系で他国の領土にされたことのない島国の人には、ピンと来ないだろう。だが、国というものは生き物だ。自滅することあれば、他国に乗っ取られ、洗脳されたあげくに、別の有機体に“変身”してしまうことがある。

ヒマラヤの仏教王国、シッキムが消えてしまったのは、1975年、世界史でもっとも新しい事例だ。この山形県ほどの小さな地域には、8世紀からチベットから仏教徒が移住、15世紀には仏教王国が建国された。いわば、ブータンの親戚筋に当たる隣国だった。

ところが、最後の国王、パルデン・ソンドゥップは、インド政府の差し金で国外に追われ、領土と住民はインドの二十二番目の州として丸ごと吸収された。

シッキムの悲劇は、ブータン国民に衝撃を与えた。以後、「第二のシッキムにならないこと」が合言葉になった。一体どのようないきさつが重なって、シッキムは滅びたのか。国の滅亡とは、何を意味するのか？それを実感するのが、この旅のテーマだ。

国境の門をくぐると……

ブータン王国の南端の町、ブンツォリンの国境の門をくぐり、インド領ジャイガオンに入る。時差で時計を三十分遅らせた。とたんにインド臭くなる。リキシャ、ハエ、屋台、物乞い、ごみの山々。猛烈な雑踏だ。デリーからやってきガイドのポール（Paul）氏とここで落ち合った。五十代半ばの彼、博識なのだが、日本語も英語もものすごい訛りだ。どちらのチャンネルを使っても半分くらいしか聞き取れない。こちらも日英語の両チャンネルで対応することにした。

ここはヒマラヤのふもとの西ベンガル州の平野だ。ヒマラヤから下ってきた幾筋もの川が合流し、やがてガンジス川を形成する肥沃な土地だ。二千三百メートルのブータンの渓谷から前日、四輪駆動で山道を半日かけて国境の町まで南下してきた。標高二百メートル。ヒマラヤからやって来た者にとっては、恐ろしく蒸し暑い。ここからインド領を西へ、蟹の横ばいよろしく二百キロ平行移動する。そこから北へターン、さらに半日かけてヒマラヤの消えた仏教王国シッキムに向かうべく、再度山を登る日程だ。

この旅を思いついたきっかけは、一枚の大雑把な地図だった。実は今回のヒマラヤ訪問の主たる目的地はブータン王国だった。地図を開いたらブータンと並んで栄えたヒマラヤの仏教王国、シッキムがすぐ西隣にあるではないか。帰路、ちょっと脚を伸ばそうと思った。

だが、ヒマラヤの旅を、鳥瞰図でイメージすると大失敗する。国境に四千メートル級の山脈が屏風のように立っている。「ロバならいけるかもしれないけど」とブータン人に笑われた。このまま引き下がるのも、釈然としない。はるばるインド領、西ベンガル州まで車で下り、迂回してシッキムに挑戦した。

シッキムはその昔、ヒマラヤのシャングリラ（桃源郷）と呼ばれていた。深い山に展開する絶景、珍しい動植物、そしてチベット仏教の寺院がある。インド亜大陸とヒマラヤの北側のチベットとをつなぐ交易路でもあった。昔はここに行くのは大変だった。いや、今でも容易ではない。インド政府発行の入域許可証が必要だ。

1975年までは、シッキムは独立した仏教王国だった。ただし防衛と外交はインドが代行していた。英国の植民地時代からの協定が引き継がれたのだ。インド政府はシッキム王国で内乱が起きたダクサにインドに編入、22番目の州にしてしまった。当時、国際社会から批判が続出した。しかし今では文句を言っているのは、シッキムと国境を接している中国だけになった。隣のチベットを支配する中国はいまだに、シッキムがインド領であることを認めていない。だから、インドにとってシッキムの仏教文化など本当はどうでもよろしい。仏教文化好きの外国人観光客などあまり立ち入ってもらいたくない、軍事的に重要な中国国境の戦略地域だ。

茶畑、稲刈り直近の田んぼ、椰子の林がかわるがわる車窓に展開する。西ベンガル平野の風景の三点セットだ。茶畑の中に樹木が植えられている。オリーブの木だ。「日よけですよ。この先のダーズリンやシッキムなどヒマラヤの丘陵地帯は、涼しいし、夜間の露でよい品質のお茶が出来る。このあたりは茶の栽培には、暑い日差しが強すぎる。木があると夜露が茶の葉を潤してくれる。」とのことだ。

カルカッタからダーズリンの麓まで行く鉄道線を渡り、国道31号線を北上するうちに茶畑から日よけの樹木が姿を消した。ヒマラヤ山麓丘陵（Himalayan foot hills）に差し掛かったのだ。やがて道路は狭くなり渓谷の断崖すれすれにカーブを切りながら、車はジグザグ状に山を登る。

椰子の林がなくなり、うっそうと茂った喬木の森に取って代わられた。「サーラの木です。高さ三十メートルくらいの大木になる。木質は堅く、インドでは大事な建材です」という。「ハウ、サーラの木ね」と気のない返事したら、「日本語では沙羅双樹といいます。平家物語の“サラソウジュの花のイロ、ショウジャ、ヒススイのコトワリあり”ですよ」とダメ押しされた。「ブッダはサーラの木に囲まれて涅槃に付いた。四月には白い花が咲きます」ポール氏、日本人の心を掴むツボを心得ている。

「入域許可証提示を求められない人、それをインド人と定義する」

沙羅双樹の森に住む野生のサルが、群れをなして道路に飛び出してくる。猿の群れすれすれにカーブを切る。猿が崖下の木々に鮮やかに飛び移る。こちらは、よけ損なえば車ごと谷底だ。消えたヒマラヤの仏教王国シッキムを源流とするテースタ川だ。コバルト色の水が白砂の中をゆったりと流れている。と思ったら、川幅が狭くなり、ヒススイのような濃い緑色の急流に変わる。重くて蒸し暑かった空気が、いつの間にかひんやりと軽くなる。ヒマラヤに入ったのだ。

渓谷の鉄橋を渡ると州境の町、ランポーであった。検問所があり「ようこそシッキムへ」

のアーチがかかっている。外国人は、インドから、どこかよその国に入国すると変わらない手続きが必要だった。日本にあるインド大使館発行のシッキム地域入国許可証とパスポート、ヴィザを提出させられた。所定の手続きを終わるまで二十分ほど費やした。分厚い出入国記録の台帳を取り出し、職業、旅行目的、日程、宿泊ホテルなどしつこく事情聴取し記入する。その間バスやタクシーそしてトラックで、大勢のインド人と思しき人々が自由に通行していく。

インド人は州を越えるのに証明書は要らない、とのことだ。「どうやって、インド人と見分けるのだ」とポールに聞いたら、「顔でわかる」という。「顔だけで判るはずがない」と食いつ下がったら、「本当にインド人であるかどうかは問題ではない。入域許可書の提示を求められなかった者が、ここではインド人と定義される」と。「そんなバカな」という私に「それで十分、問題が起こったという話は聞いていない」と苦笑する。

インド併合以来、インド中央政府はこの旧シッキム王国地域にかなりのカネをつぎ込んだ。道路建設、電化、水利、農業開発、繊維などの小規模産業開発をやった。谷間の傾斜を削って平地を造成し、そこにハイテク技術を教える工業大学まで建設した。人口55万のシッキムは、隣の西ベンガル州より豊かで、しかも、税金なしの優遇措置がとられている。

インドのこうした投資や経済的優遇措置は、全てが国家安全保障上の施策で、中国のヒマラヤに対する軍事的な野望を恐れたためだ。インドにとって山の自然の要塞であるシッキムが中国に破られたら、チベットの中国軍は一瀉千里、ガンジス平原を突っ走り一日で、首都デリーに到達できる。

検問所から50キロ、州都ガントックを目指して、テースタ川沿いに刻まれた七曲がりの道を登坂する。

軍用トラックの隊列と頻繁にすれ違う。沿道にインド軍の駐屯地や物資集積所が目につく。「この道路はそもそも軍用道路です。もともとはロバや馬がようやくすれ違いできる程度の、チベットとインドのガンジス平野とを結ぶ交易路だった。植民地時代の英国がインドーチベット道の建設をもくろみ、シッキムのインド編入後、インド政府が道作りをした。道路は陸軍の管理下にある」という。

沿道に「この道路はシッキムの命」と書かれた看板があった。山国のシッキムでは自給自足は不可能だ。ベンガルから毎日数百台のトラックで生活物資を運びこまねばならぬ。だからこの軍事道路は、住民の命をつなぐ民生道路でもある。

「道路は狭い。人生は長い。あわてるな！」という標識にもお目にかかった。軍用自動車も現地のトラックも急カーブをスピードを落とさずにすれ違ってくる。その都度肝を冷やした。がけ下の谷底に転落する事故が後をたたないという。

「もし地震がきたら…」崖の州都、ガントック

州都、ガントックに着く。丘の頂上という意味の街だ。標高1780メートル、ヒマラヤの消えた仏教王国の首都だった。ガントックは、人口五万人、箱根の山をもう少し険しくし

た山と溪谷の斜面に熱海の温泉旅館街をそっくり持ってきたような人工的な町だ。

ジグザグ状に山頂まで道をつくり、道を挟んで山と谷の両側にわずかな平坦な土地を造成し、宮殿、役所の庁舎、五階から七階建てのホテル、商店、アパートなどが山にしがみつくようにして立っている。狭い道路には人通りも多く、ミニバン型の軽乗用車タクシーが走っており、ヒマラヤとはいえ喧騒のインドの町の一つだった。

「昔の仏教王国の時代のガントックはもっと素朴で静かなところだったと聞いている。山頂に立派な王宮があった。役所の建物はあった。大きな建物はその程度で、あとは道沿いに商店や、小さな旅人宿が建ち、山を切り開いた広場にバザールがあったそうだ。ロバや馬が運搬手段だった。ここが都市になったのはインドが仏教王国を滅ぼした1975年以降だ。「なに？仏教の寺院か？それなら山に行けばある。破壊されてはいない。明日案内する」ポールがそういった。

インド政府発行の観光案内パンフレットには、「ガントックは山の背中に展開するくつろげる魅力的な街、崖に杭を打って建設された」と書かれている。遠くの山から、谷を隔てて眺めると山に九十九折の道が掘削されており、道沿いに街が展開する箱根や熱海の温泉そっくりの町だ。だが実際に足を踏み入れると、もっと急傾斜だった。まっすぐ立っていられる平地が少ない

この街一番の平坦でまっすぐな目抜き通りは両側にビルの建つマハトマ・ガンジー通りだ。といっても崖を切り開いて造った幅10メートル、延長百メートルほどの道で、これ以上進むと道はジグザグ型に曲がって山に登ってしまう。

通りの谷側にあるこの街で一番古いというタシ・デレ（衆生に吉祥あれという意味のチベット語）・ホテルに泊まる。表玄関から見ると、間口の狭い二階建ての小さなホテルだ。だが中に案内されて驚いた。裏側の谷に向かって視界が大きく開けている。傾斜に鉄の杭を打ち、コンクリートで基礎を固めて建設したヒマラヤの世界第三の急峻、カンチェンジュガ（標高8586メートル）展望が売りものの七階建ての大ホテルだった。上の二つの階だけが表通りに頭を出していたのだ。

ホテルのテレビでカシミールを中心とする南アジア大地震の発生を知った。そもそもこの地震は、ヒマラヤの造山運動と関係がある。五千万年前、大陸移動によりインド亜大陸がユーラシア大陸に食い込むように衝突し、間の海が山脈上に押し上げられた。それがヒマラヤの起源だが、今でも巨大な大陸のせめぎあいが続いている。二つのプレートの境界付近の活断層に生じたひずみが、大きなゆれとなって数万の人命を奪ったのだ。

いつの日か、このシッキムに大地震がやってきても不思議ではない。温泉あるところに、地震ありだ。ガントックの北には温泉がある。もしここが地震に襲われたら、あれほどの震度の地震でなくても、この街の全ての建物は谷底にずれ落ちてしまうに違いない。

ホテルからミニバンの軽自動車タクシーで十五分ほど山を登る。稲妻のように曲がる道の両側には高級住宅地、その上が官庁と州議会、さらに登ると山頂のあるシッキム仏教王国時代の王宮に突き当たる。チベット風の赤、青、黄の極彩色の門がひっそりと閉ざされている。

この宮殿の主、パルデン・ナムギャップ・ナムギャル王はインド政府に追われ、1980年、ニューヨークでさびしく死んだという。ここはインド政府発行の観光案内パンフレットには載っていない。訪ねる人もまばらだ。

「PRIVATE NO ENTRY (私有地につき立ち入り禁止)」の看板がかかっている。なにやらいわくありげだ。数奇の運命をたどった宮殿の主と無関係ではなさそうだ。ヒマラヤの仏教王国、シッキムは何故消えてしまったのか？

ラスト・キングの妃は米国娘だった

門の柵越しに、中をのぞいてみた。州の警備兵とおぼしき銃を持った男が二人いるだけで、人の気配がない。

庭や屋敷の手入れも手が回りかねると見えて、草は伸び、花は枯れている。はるか奥のほうに英国コロニアル風のテラスつきの建物が見える。ところどころ白い化粧レンガがはがれているようにも見受けられる。

これで月でも出てくれたら“ヒマラヤの荒城の月”だ。昔はさぞ栄耀栄華を極めたことだろう。デリーからやってきたインド人ガイドのポールが言った。

「州政府発行の観光案内書はこの宮殿の由来について一行も書いていない。インド政府にとって触れて欲しくない話だからね。政府が国有財産として没収すると国際的に波風が立つから、私有財産としてそのままにしている。なんでも最後の王の縁者たちが住んでいるというウワサだ。いずれ廃屋になってしまうのではないか」。

「滅びの王国の最後のチョイガル（チベット語で国王のこと）の妃はアメリカ人だった。結婚式には各国の外交団や貿易商などの外国人が何千人も招待され、大宴会が催されたそうだ。」彼は、王宮の門の下の谷間を指差した。

急傾斜の山を削った土で谷底を埋めた平地があった。王宮付属のクリケット場だ。当時、ヘリや車でやってきた、招待者たちはここにいったん集合したとのことだ。ここから王宮の門の脇まで階段が繋がっていた。

消えたシッキム王国の最後の王の妃が、アメリカ人とは、何かいわくありげだ。もしかしたら、この結婚が、シッキム滅亡の鍵を握っているのかもしれない。そう思った私はガントックの小さな土産物屋で手がかりをみつけた。インド人のジャーナリストの書いた『シッキム』という本だ。

「インドの東の端、ブータンとネパールに挟まれ、チベットへのルートであった桃源郷に神話と伝説に満ち溢れたシッキム国ありき…」とある。そして第十二代国王、パルデン・ソングップ・ナムギャルとニューヨークの有名女子大出の才媛、ホープ・コーク女史との結婚式の光景が記されていた。

「1963年5月、当時皇太子だった彼と彼女の国際結婚式が宮殿で催された。五千人が招待された。貴族、農民、ヤクを飼う人、将軍、交易商人、そして外交官たち。招待客の中にはネパール、ブータン、インド、アメリカ、そして中国の弾圧で逃げてきたチベット人避

難民など二千人の外国人が含まれていた。結婚式は仏式で行われた。3メートルもある長い角笛、銅鑼と太鼓の奏でる音楽の中で、二人は両刃の剣を交換し、バター茶の杯を交わした」とある。

「二人の馴れ初めの地は1959年のダージリンだった。前妻を亡くし失意の中年の皇太子と観光にやってきた若いアメリカ娘は恋に落ち、結婚を約束した」とのことだ。

私は一つの仮説を立てた。「そもそも、シッキム王国のつまずきはこの国際結婚にあったのではないのか？」と。知識人ガイドのポールにそれをぶつけてみた。

「きっかけにはなっただろう。あの結婚はアメリカCIAの陰謀だという説さえあった。王政擁護派と反対派の溝が深まったことは確かだ。だけど、仏教王国シッキム滅亡の原因はもっと奥が深い。そもそもの仕掛人はインド植民地時代の英国だ」という。

ポールとシッキム崩壊の構造を論じた。

「インドを植民地支配していた英国はシッキムに目をつけ、永久支配をもくろんだ。チベットへのルートだったからだ」土産屋で求めた本にもそう書かれていた。

「それがシッキム滅亡の遠因だ」とポールがいう。

1881年、英国は嫌がるシッキム王を説得し、インドからシッキム経由、チベットのラサまでの道路開発権を獲得した。私はまさしくその道を登ってインドから、州都ガントックまでやってきた。

話はこの辺からややこしくなる。英国は道路建設労務者という名目で隣国のネパールから非仏教徒を大量に移住させた。仏教徒の王は猛反対したが、英国は軍勢力をちらつかせ強行した。この結果、人種的なバランスが崩れ、15世紀の建国以来、仏教信仰を軸に共存してきた先住のレプチャ族とチベット族の発言権が、ずるずると低下していった。

国盗りの名人、英国の深謀遠慮

「英国は大量の異教徒を連れ込み、国の人口構成を変えることで、この国の自滅を計画した」とポール。血液の入れ替えで国という“生き物”を別の有機体へと作り変える深謀遠慮だ。1914年、シッキム王暗殺事件が起こった。犯人は英国情報機関の息のかかったネパール移民との説もあった。

「インドが、シッキム王国を乗っ取ったと非難されるが、それは全てインドを植民地支配した英国が準備したものさ。ダージリンもそうだ」とポールがいう。紅茶の名産地として知られるヒマラヤの保養地ダージリンはシッキム領だった

英国はシッキム王国乗っ取り計画の手始めとしてダージリンを年に金(きん)三千グラムで借地する契約を結んだ。英国は涼しいこの地に“夏の行政府”を建設した。1831年のことだ。その後、シッキム王に対し、些細なことで難癖をつけ、金(きん)の支払いを停止、事実上の領有を達成した、という。

1947年、シッキム乗っ取りのお膳立てを整えた英国は去り、インドは独立した。あとは実行あるのみだ。インドが具体的に動き出したのは1962年、シッキム皇太子の米国娘

との結婚の一年前だ。

この年、インドと中国との間で、ヒマラヤの中印国境線をめぐって軍事衝突が起こった。インドにとって、山の自然の要塞シッキムが中国の手に落ちたら、あとは平原続きで一瀉千里首都デリーが危ない。国防上の理由から、インドはシッキムの直営が必要になった。

一方、王国の内政は年々揺らいでいった。米国人の妻を持つ仏教徒国王に対し、いまや国民の多数派になったヒンドウ教徒、ネパール系移民の反発が高まった。貧しい彼らは地主だった僧院に反発した。王政と仏教反対運動の嵐の中で、アメリカ人の王妃は母国に出かけたまま帰国しなかった。1973年、王室を支える仏教徒のレプチャ、チベット族とネパール移民との間に内戦が勃発した。そして血筋はチベット人だが、反君主制、プロ・インドの政治家、カジ・レンダップ・ドルジが公選で首相に選出された。失意の国王は米国に亡命した。

準備は全て整った。当時の人口三十万人の75%が、仏教支配に反対するネパール人が占めるにいたった。二年後、インドは行動を起こした。ドルジ首相に住民投票を持ちかけ、圧倒的多数でシッキム王国を廃しインドへの帰属を勝ち取った。

かくて、ヒマラヤの仏教王国は消滅した。王宮跡にはぺんぺん草が生えていた。「栄枯は移る世の姿…昔の光いまいずこ」（土井晩翠作詞、荒城の月）とはこのことだ。

「カルマバ17世を知っているか？」

ポールに尋ねた。「王国の国教だった仏教はどうなったのだ」と。彼は「存在しているさ。インド政府は保護している」と。ルムテクの僧院に連れて行かれた。王宮のあるガントックから谷間をへだてて反対側の丘にあるチベット仏教カギュー派の寺だ。ラマ教とも呼ばれるチベット仏教にもいろいろあるが、インド亡命中のダライ・ラマ系の宗派だ。

文化大革命の際、中国に破壊されたチベットの僧院を復元すべく、王の肝いりで建設された大僧院で、以後、カギュー派総本山を名乗っている。僧院の要所に武装したインド兵が立っている。これでは保護ではなく、管理しているのではないか。

ポールが言った。「そうかも知れん。ところで、カルマバ17世のこと知っているか。私は会ったことある」

「知らない。ダライ・ラマなら親しく話したことあるけど」と私。

カルマバ17世はまだ20歳そこそこの青年で、本名はウゲン・ティンレー・ドルジエという。聖者カルマバの転生者で、チベット仏教ではダライ・ラマに次ぐ重要人物だとのことだ。ウゲンはチベットからの脱走者だった。中国政府はこの若いラマ僧を手なずけて中国のいいなりになるチベット仏教の指導者に仕立てようと試みた。だが、ひそかにラサを脱出、インド亡命中のダライ・ラマのもとに逃げ込んでしまった。

「シッキムの仏教徒はルムテクにこの生き仏を迎え、ラマ教の再興を図ろうとした。ところがインド政府はこれを阻止、訪問さえも禁じた。」

「なぜ？ 仏教王国再興を警戒したのか？」

「いや、シッキムが仏教王国に戻ることは考えられない。中国からの脱走者をシッキムの

宗教指導者にすえるのは、中国に対し刺激的過ぎるといふ政治的配慮さ。逆にウゲンを中国が送り込んだスパイだとみるインド人もいる」

インド軍武装兵に監視される僧院の庭で、ポールと交わした会話だ。この僧院はドイツ、アメリカなどからよせられる多額の寄付金で運営されているとのことで、欧米の観光客で賑わっていた。

インドでは仏教は滅びたとされているが、チベット仏教に帰依する十数人のラマ僧達がこの僧院で暮らしている。

「シッキム人は単純でずる賢いところがない。だから英国にだまされ、拳銃の果ては国を盗まれた。頭の回転の速いインド人や小利口な中国人とは性格的に合わないのだ。インドは非軍事的方法で合法的にシッキムを手に入れた。シッキム人は弱くて、風変わりな人種とみられているが、偉大なる慈悲のもとに生存している。それは仏教、すなわち仏陀の癒しと教えだ」

これは、ルムテクの僧院で仏に仕えるラマ僧の述懐だ。

カンチェンジュガを仰ぎつつ…

秋のガントックの朝は素晴らしい。日の出とともにカンチェンジュガ（世界第二の高峰、標高8586メートル）が、緑の山並みのむこうに真っ白な姿を現した。「あなたは日本人か？早起きは良いこと。午後は雲に覆われてしまうから」眺望抜群の宿泊先のタシ・デレ・ホテルのテラスで、いきなり見知らぬインド人老紳士に声をかけられた。

このホテルの会長、ラジェシ・ラコーティアさんだった。ダーズリン紅茶とクッキーの朝食をご馳走してくれた。八十歳に近いこの人にシッキムのことを聞いた。このホテルは1978年にオープン、シッキムで一番古いという。

「何故ここにホテルを？」

「百二十五年前、私の祖父はインドの東北部からこの地にやって来て、チベット国相手に交易商をやっていた。シッキムの王家とはとても親しかった。私は最後の王の米国婦人との結婚式にも招かれた。中国のチベット支配でシッキム経由のインド・チベット交易も廃れてしまった。王政廃止をきっかけに祖父の開いた商館を取り壊し、そこにこのホテルを建てたのだ」

「王様はニューヨークの癌病院でさびしく死んだと聞いたけど…」

「そう、1981年のことだ。アメリカ婦人との間に男の子と女の子がいた。息子はニューヨークにいと聞いている。」

「薄幸な王をどう思うか」

しばらく沈黙の後、彼はこういった。

「あの王様はね。次男で、もともと王ではなく僧になる修行をした人だ。それが長兄の飛行機事故死で王位継承者にされたのだ。ラマの資格をもつ立派な人だから、きっとあらゆる苦悩を超越して仏になっているのではないのか」

「悟りか？」

「そうだ。それが仏教の真髄だろう。私はヒンドウ教徒だけどね」

ヒマラヤには四つのラマ教の仏教王国があった。本家のチベット、ネパール、シッキム、ブータンだ。この中ではネパールが最初に脱落した。ネパールは10世紀ごろから北部の山岳地帯を中心にチベット仏教が栄えていた。だが、15世紀、イスラムに圧迫されたヒンドウ教徒の大群がインドから移住、カトマンズにゴルカ王朝を興した。それ以来、仏教徒は圧迫され、国王の宗教であるヒンドウ教が国教となった。今日では、国民の90%がヒンドウ教徒だ。

チベットは1950年中国の自治区にされて仏教は形骸化、そしてシッキムは、国を盗まれて滅亡した。残るは仏教王国、ブータンのみである。

参考文献（書籍）

「ブータン—変貌するヒマラヤの仏教王国」今枝由郎、大東出版社

「現代ブータンを知るための60章」平山修一、明石書店

「雷龍王国への扉、ブータン」山本けいこ、明石書店

「地球の歩き方、05～06ブータン」ダイヤモンド社

「窓から見るブータン、2005」日本ブータン友好協会編

「Lonely Planet・Bhutan」 by Stan Armington

（以上の六冊のブータン本は、二度の現地取材に持参、その都度参照させてもらった）

「So Close to Heaven」 The vanishing Buddhist kingdoms of the Himalayas By Barbara Crossette

（NYタイムス女性記者のヒマラヤ仏教王国旅行記、第二章、第三章、第五章で引用）

「秘境ブータン」中尾佐助、社会思想社現代教養文庫

（第六章、ブータンの母系制社会執筆に役立った）

「ブータン神秘の王国」西岡京治・里子、NTT出版

（第六章のパロ谷の生活で紹介）

「ブータンの政治—近代化のなかの仏教王国」レオ・E・ローズ著、山本真弓監訳、明石書店

（第二、三章のブータン史記述の基礎になった）

「ダライ・ラマ自伝」ダライ・ラマ著、山際素男訳、文春文庫

（第三章の“化身相統”とは何か、について引用）

A Traveller's Guide 「Sikkim」 by Sujoy Das & Arudhati Ray

（第八章付録：シッキム旅行で引用）

「Gross National Happiness, Discussion Papers」 The center for Bhutan studies

「Gross National Happiness and Development」 The center for Bhutan studies

（この二冊はブータンの国家戦略GNHをめぐる国際シンポジウムの英文の議事録。

GNHとは何かを掴むための基礎資料）

「地政学」—アメリカの世界戦略地図—奥山真司著、五月書房

（第三章、地政学の定義作りに役立った）

「文明の衝突」サムエル・ハンチントン著、鈴木主税訳 集英社
「グローバリゼーション」M・Bステイガー著、桜井公人ほか訳、岩波書店
「世界を不幸にしたグローバリズムの正体」J・Eステイグリッツ著、鈴木主税訳、徳間書店
「合理的な愚か者」A・セン著、大庭健、川本隆史訳、勁草書房
「経済学の再生、道徳哲学への回帰」アマルティア・セン著、徳永澄憲ほか訳、麗澤大学出版会
「幸福の経済学」ブルーノ・S・フライ、アロイス・スタッツァー著、佐和隆光監訳、ダイヤモンド社
(以上の六冊は主に第四章の主題であるGNHの評価に役立った)

「風土 人間学的考察」和辻哲郎、岩波文庫
(ヒマラヤの風土とブータン人の生きざまとの関連を考えるきっかけを与えてもらった)

「The Constitution of the Kingdom of Bhutan, Draft as on 18th August 2005」
(ブータン王国第二次憲法草案、第四、七章で引用)

「World Power Trends and U・S Foreign Policy for 1980`」 by Ray・S・Cline
「Politics among Nations 1948」by H・J Morgenthau
(この二冊は第七章のブータンと日本の国力比較の分析に役立った)

参考文献 (雑誌、新聞、小冊子、ホーム・ページなど)

ドルック航空機内誌「Tashi Delek」(第一章)
WHO Goodwill Ambassador Sasakawa Yohei's Newsletter "For the Elimination of Leprosy"
(第三章 ブータンのハンセン病制圧事情)
CIA World Fact Book 2005 (第三章)
読売新聞 「国王会見記」1989年10月25日 (第四章)
ニューズ・ウィーク日本語版、「ブータン国王会見記」1990年11月8日付け (第七章)
KUENSEL 2005年12月17日「国王の建国記念日の演説」(第七章)
KUENSEL 1993年5月29日「米国在住留学生の投書」(第七章)
2005年、10月29日付、「シデのホームページ、青木薫の日記」(第六章)
「Media information kit—Travellers & Magicians」
(映画、「旅人と魔術師」の英文広報用パンフレット、第七章で紹介)
雑誌「選択」2005年8月号、「西水美恵子、思い出の国、忘れえぬ国」の国王会見記
(第七章)

東京財団研究報告書 2006-13
小国の地政学
－秘境・ブータンはなぜ滅びないか－
2006年 10 月

著者：
歌川 令三

発行者：
東京財団 研究推進部
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル3階
TEL:03-6229-5502 FAX:03-6229-5506
URL: <http://www.tkfd.or.jp>

無断転載、複製および転訳載を禁止します。引用の際は、本報告書が出典であることを必ず明示して下さい。
報告書の内容や意見は、すべて執筆者個人に属し、東京財団の公式見解を示すものではありません。

東京財団は日本財団等競艇の収益金から出捐を得て活動を行っている財団法人です。

いま、なぜブータンなのか？

- 第1章 ブータン素描—パロ行き航空、4時間半の見聞—
- 第2章 ブータンの古代と中世—チベット仏教の系譜—
- 第3章 中世からの跳躍、20世紀後半へ—その地政学的事情—
- 第4章 ブータン発、幸福の政治・経済学—「GNH」とは何か—
- 第5章 雷龍王国の都、ティンブ—近代と伝統の接点を訪ねる—
- 第6章 母系制社会の原風景—パロ谷の農家に泊まる—
- 第7章 ブータンよ、何処へ？“一周遅れの走者”ではない
- 第8章 付録：シッキム紀行—消えた仏教王国を訪ねる—